

A Suitable Boy 論

—世界最大の民主主義国家としてのインドの旅立ちと苦悩—

加 藤 恒 彦

目次

はじめに—4つの家族を通して見た独立後のインド社会の諸相

本論—インドの民主主義国家としての旅立ちと苦悩

- I ザミンダーリー制度廃止法案を巡る州議会での論争
- II ザミンダーリー制度廃止法の骨抜きを計る農村の地主勢力と、それに反対する地主の息子ラシードの悲劇
- III ザミンダーリー制度廃止法の合憲性を巡る高等裁判所の審理
- IV 会議派右派の台頭を巡る党内権力闘争とネルーの苦悩
- V 第一回総選挙と農村での選挙活動

はじめに—4つの家族を通して見た独立後のインド社会の諸相

ヴィクラム・セス (Vikram Seth, 1952年-) の *A Suitable Boy* (1993年) (『婿探し』、以後『婿探し』) は、1947年8月の独立後数年経ったインド北部の架空の都市ブランプールとカルカッタ (コルコタ) を舞台に、1950年の冬に始まり、第一回総選挙が行われた1951年秋から1952年初頭の時期を挟む18カ月間を対象に、ヒन्दゥー教徒の3つの上流中産階級や中産階級の家族、イスラム教徒でバイターのナワブと呼ばれる大地主・封建的領主・貴族の家族やそれらの家族に関係する様々な人々の生き方を通し、当時のインドの上層から底辺に至る社会的現実を輪切りにして描いた小説である。その結果、『婿探し』は、ペーパー・バック版で1475頁の大長編小説となった。

さらにその手法について言えば、『婿探し』は、議会や裁判所における農地改革を巡る審議やインド国民会議派 (以下、会議派) 内部の権力闘争等の過程、大地主制度が存在する農村の実態、製靴ビジネスの世界とそれを支える皮なめし業や革靴業を支える不可触民の世界等の中

心に、インドの多様な現実を細部に至るまで実にリアルに描いており、インド文学の大御所であるクシュワール・シンは、「この細部へのこだわりは実を結んでいる。私は、この小説に描かれた時代を生き抜いたが、この小説はネルーの時代のインドの本当の姿を描いていると信じる」と述べている¹⁾。『婿探し』は、批評家によってよくイギリスリアリズム小説の伝統との関連が云々されるのであるが、私は、社会全体をスケッチしようというスケールの大きさにおいて、むしろ19世紀フランスのスタンダールやバルザックのリアリズム小説の伝統をそのまま受け継いだ社会的リアリズム小説と性格づける方が適切ではないかと考えている。

だが、セスは、最初から独立直後のインド社会の全体を輪切りにしたような大きなスケールの社会リアリズム小説を書くという意図を持っていたわけではなかったようだ。彼の幾つかのインタビューから、この小説が現在のような形を取った経緯を知ることができる。

『婿探し』がパノラマ的小説になった経緯

ニューヨーク・タイムズ誌とのインタビュー記事²⁾によれば、セスが当初考えていたのは、50年代から90年代にかけての時代の推移を描く一連の短編小説で、その最初に選ばれたのが「婿探し」であったと言う。セスは、冒頭の結婚披露宴でメーラ夫人が、末娘のラタに「お前は私の選んだ人と結婚するのよ」と言い、ラタがそれをはぐらかそうとする場面から始め、数か月書き進んだが、やがて筆を進めることができなくなったという。

その理由について、セスは、次のように述べている。

私はドアを半開きにしていた。この広い居間にはたくさんの人々が入ってきていた。しかし、私にはそうした人々に肉付きを与えることができなかった。彼等は勝手に動き回っていて制御不能であった。私がこの時代とこの時代の様々な職業、活動、出来事—心のなかの地図—を熟知するのに長い時間を要した。(Woodward, 1993)

そこでセスは、そうした人々を知る為に、数か月間、この時代の古い新聞に目を通し、ウルドゥー語に磨きをかけ、アグラの皮なめし工場を訪れ、独立以前の時代の封建的領主・貴族であるナワブさまの全盛期に「遊女の館」を頻繁に訪れていた人々にインタビューした。この小説の舞台となるブランプール市は、デリー、ラクナウ、アグラ、ベナレス、パトナ、そしてアヨーディヤを全て足して作ったものである。セスは、「書きかけた時から私は、架空の都市を造らないと問題が起きることに気が付いていた」³⁾と述べている。

またガーディアン紙の記者から受けたインタビューでは、「1年かけて古新聞の山、議会での討論の記録、ガゼット、回想録に埋もれ、ウツタル州の田舎で数週間過ごし、アグラの皮なめし職人、音楽家、判事、オウム使いに会いに行った」と述べている⁴⁾。

セスは、このようにして登場人物についての予備調査に1年をかけ、さらに、取り憑かれたように執筆に没頭し、6年を要して書きあげたのが『婿探し』であった。

『婿探し』の主な出来事が起きる1951年は、セスが生まれた年でもあったことが、セスのこの時代への関心に拍車をかけたであろうことは容易に想像できよう。

こうして『婿探し』は、当初の、婿探しのテーマを扱った短編から一転し、19世紀のフランス社会の全貌を描こうとしたバルザック的世界に広がったのであるが、セスは、当初のタイトルは生かし、拡散してゆく物語の要の役割を果たさせている。すなわち、物語は、ラタの姉の結婚披露宴に始まり、ラタの婿探しの過程を経、彼女の結婚式と新婚旅行への旅立で終わるといふ起承転結のあるプロットに支えられているのである。

さらにセスは、4つの主要な家族と、そこから無数に伸びている人脈の網の目を通じ、独立直後のインドが抱えていた多様な現実や諸課題を描いているのである。本論では、それを幾つかのテーマに絞り込み、紹介しつつ論じるのであるが、小説の全体像を読者に知ってもらう為に、どのようなテーマが、取り上げられているのか、四つの家族の人脈に依拠しつつまず概観しておこう。

メーラ家とチャタジー家

小説の冒頭の結婚披露宴は、1950年の冬の初めに、メーラ (Mehras) 家の長女サビータ (Savita) とカプール (Kapoor) 家の長男プラン (Pran) の結婚を祝し、新郎の父マヘシ・カプール (Mahesh Kapoor) のプレム・ニーヴァ屋敷で開かれたものであった。まず、メーラ家から紹介して行こう。

メーラ夫人の夫は、鉄道会社の重役であったが、8年前に心臓発作で急死していて、未亡人となったメーラ夫人には、二人の息子と二人の娘がある。長男のア룬 (Arun) は、イギリス系企業に勤めるエリートビジネスマンであり、カルカッタのチャタジー家 (Chatterjis) のメーナクシ (Meenakshi) と結婚している。メーナクシは、魅惑的ではあるが礼儀を知らない娘で、メーラ夫人の不興を買っている。

チャタジー家の父親は、カルカッタの高等裁判所の判事であり、メーナクシの弟、アミーは、オックスフォード大学の英文で教育を受け、カルカッタで詩人としての名声を獲得しつつある。

つまりチャタジー家は、イギリスの影響を色濃く受けたインドの教養ある上流中産階級の家庭であり、イギリス流の生活様式、とりわけ英語を日常語として使用し、婿選びの過程でも相手の英語のなまりが問題になるような家柄である。アミーは、英語で詩や小説を書くサークルのリーダーであり、持ち寄った原稿の朗読会ではリーダー的な役割を果たしている。ちなみに、アミーは、ラタの花婿候補の一人でもある。

だが、そのようにイギリス化された知的な家庭ではあるが、結婚という問題についてはイン

ドにおけるヒンドゥー教の伝統が「世間の目」という形で息づいていて、親や親族を介した見合い婚が基本であり、その壁を打ち破るのは極めて困難なのが見える。アルンの妻のメーナクシのイギリス人ビジネスマンとの不倫などは、社会的体裁を表面上整えながら裏で自分の欲望を満たそうとする生き方の典型なのだろう。

結婚を巡る伝統的な考え方を体現するメーラ夫人は、末娘のラタの婿探しに奔走することになるのだが、ブランプール大学でイギリス文学を専攻するラタは、伝統に縛られない自由恋愛に憧れ、ムスリムの学生カビールに恋をし、母親を悩ますのである。このラタがどのような形で納得の行く結婚相手を見つけることになるのかが、この小説の一つのテーマとなるのだが、これについてはすでに多くの論者が扱っているため、本論では他のあまり論じられない重要な政治・社会的テーマに絞って論じたい。

カプール家

新婦のサビータの結婚相手のプランは、カプール家の長男である。父親のマヘシ・カプールは、独立闘争時代からの会議派の大物政治家であり、ブランプールを州都とするパルーバ州政府の財務大臣としてザミンダーリー制度廃止法案（農地改革法案）を推進している。プランは、喘息持ちで痩せて色黒で風采は上がらないが地元のブランプール大学の英文学科の新進気鋭の講師であり、学生にも人気がある。プランは、ジェームズ・ジョイス等のモダニズム文学の新しい潮流を英文のカリキュラムに取り入れるべきだと考え、英文学科の重鎮で19世紀までのイギリス文学の伝統を重んじる保守的なミシュラ教授（Mishra）に反旗を翻しており、英文学科の次期の助教授のポジションを巡る人事がその対立の争点となっている。披露宴から少しした、1951年3月の満月の後行われる無礼講のホリのお祭りで酒に酔ったプランの弟のマーン（Maan）が、ミシュラ教授にピンクの粉を体中に振りかける場面は、日頃、プランの教授への不満を知っていたマーンの、酒に紛れた意図的な悪戯だったのだ。

そしてプランのブランプール大学の人脈から他の幾つかのプロットが展開する。

ケダナス・タンドンとハレーシュの製靴ビジネスの世界

プランの妹のヴェーナ（Veena）が嫁いでいたケダナス・タンドンと、その家族からも興味あるプロットが展開される。ケダナスはブランプール市の旧市街のミスリ・マンディ（Misri Mandi）に住む靴の仲買人であるが、ケダナスの関係からは次のようなプロットが生まれる。

一つは、製靴ビジネスの世界である。物語の冒頭、地元の製靴職人たちが仲買人（trader）に抗議ストライキが起きている。そうしたなかで、北インドのカンプルのカウポーア革靴製造会社（Cawnpore Leather & Footwear Company）から出張でハレーシュ・カナ（Haresh Khanna）がケダナスを訪問する。ハレーシュは、製靴業の友人からケダナスを紹介されたのだ。

ハレーシュは、デリーの生まれであるが、幼い時に両親を亡くし、養子として育ち、デリーの名門、聖スティーヴンス大学卒業後、イギリスの大学で製靴業の課程を学び、カンプールの今の会社に勤めているビジネスマンである。

ハレーシュが、ミスリ・マンディを訪れたのは、技術がしっかりしていて信頼のおける小さな製靴業者を探すためであった。それは、小口の注文に答える為に、会社に新たな設備投資をする無駄を省くためである。

ハレーシュは、町で靴職人たちが何故ストライキを起こしたのか、ケダレスに尋ねる。ケダレスは、ムスリムやパンジャビ地方の欲深い仲買人に利益を絞り取られることへの抗議だという。

そしてハレーシュは、ケダレスに頼み、なめし皮から靴を作っているラビッドプールにあるジャガット・ラムの小さな作業場や、その元となる皮をなめす作業現場を訪れる。そして試しにジャガット・ラムに一足の靴を注文することにし、その靴のサンプルを翌朝持って行き、自分がカンプールに戻る三日後までに仕上げるよう依頼する。こうしてハレーシュは、製靴職人の技術的力量と信頼に足る仕事相手かどうかを確かめる。セスは、インドに優れたビジネス感覚を持ち、誠実な人柄の新しいビジネスの担い手が生まれてきていることを示しているのである。

数学の天才児バスケルの物語

他方、ハレーシュは、出張中に、聖スティーヴンス大学時代の友人でブランプール大学の数学講師をしているスニルの開いたパーティに招待され、そこでブランプール大学の若手教員と出会い、プランとも知り合いになる。このパーティで知った人脈が二つ目のプロットにつながる。

二つ目のプロットは、ケダレスの息子のバスケルの物語である。バスケル少年は、数学の数の世界に天才的な才能を早くから示していたが、彼の才能を開花させてくれる相手を必要としていた。それを知ったハレーシュは、スニルを通じ、大学の数学教授のデュレニ (Duranni) 博士を紹介してもらい、二人を会わせる。そしてその教授がバスケルの才能を認め、アメリカへの留学の道を開いてくれるのである。

三つ目のプロットは、このハレーシュのラタとの交際と結婚である。ハレーシュは、メーラ夫人が選んだラタの花婿候補の一人であり、ラタは、恋愛感情はまだ持てないけれども自分を明確に愛してくれるハレーシュを最終的に結婚相手に選ぶのである。だからこそセスは、地に足をつけつつも人間的な理想を失わず、かつ、誠実なハレーシュの人柄を微に入り細に入り描いているのであろう。

製靴業の底辺を支える不可触民の職人の世界

だが、それだけではない。製靴業と、それを支える皮なめし業は、共に、伝統的に不可触民 (Dalits) の携わる職業であり、不可触民の住む地域に隣接している。ハレーシュは、ジャガット・ラムの仕事場に行く途中、不安定な橋を渡りながら、その下を流れる覆いのない下水溝の真っ黒な水で朝の沐浴をする人々を見て、どうしてこのような生活に耐えることが出来るのだろうかと思う。

また、お寺の境内で賭け事をする不可触民の子供たちを見て舌打ちをする。それは彼らを責めたのではなく、文字を知らず、貧困のなかで親から躰をされることもなく放置されている子供たちの状況に対するものであった。ハレーシュは、この子供たちに可能性がないわけではない、自分に資金と労働力があり、それを自由に使えるなら、6カ月もあれば、必要な施設を整備し、この境界の状態を見違えるように改善して見せるのだが、と口惜しい思いに取られる。ハレーシュは、現実的で精力的で、課題に据えたことはやり遂げないと気が済まない性格なのである。

又、ハレーシュは、同じ不可触民といえども皮なめし職人と製靴職人の間には大きな差別の壁が存在し、相互に大きな不信感を抱いていることを知る。

このようにしてセスは、ハレーシュを通じ、ブランプールの産業を底辺で支えている不可触民の世界に読者を導き、かつ独立後の新しい動きの一環として、不可触民が集団として自分たちの地位向上の為の運動に乗り出し始める姿を物語の後半で描く。インドにおける不可触民の問題の重要性に鑑み、簡単に、ここでそれを紹介しておこう。

ヒンドゥー教の秋祭りでの『ラーマーヤナ』上演を巡る不可触民の要求

ヒンドゥー教の伝統的な秋祭りに際し、祭りの実行委員会に、不可触民の多いラヴィダスプー (Ravidaspur) 地区から、二つの要求が出される。要求の一つは、それまで出番のなかった不可触民にも何らかの役を演じる機会を与えること。二つには、劇として上演する場合には、ヴァールミーキの原作を戯曲風に書き直した大衆的なバージョンが伝統的に使われてきたのであるが、原作を採用するようだという要求である。(戯曲版では、ラーマが妻のシータをランカから取り戻しアヨーディアーの都に戻り王となる所で終わるのであるが、原作では、ランカに囚われていた間のシータの貞操を疑うものが表れ、シータは自分の身の潔白を証明せねばならなくなり、結局、追放の身となるのである)⁵⁾。

仕事柄、不可触民と接触しているケダレスが、仲介役となり複雑な話を双方の側に説明する役割を担うことになる。他方、不可触民の代表の一人としてケダレスとの交渉役に選ばれたのは、すでに物語に登場していた靴職人のジャガット・ラムであった。

ケダレスから不可触民の要求を聞いたケダレスの母、タンドン夫人は、「ラーマヤバラット

やシータの役をチャーマー (不可触民への北インドでの総称) がやるなんて考えられるかい?」と不満を露わにする。不可触民への差別に反対するカプール家からタンドン家に嫁いだヴィーナはそれを聞いて顔をしかめるが、それは町の人びとの率直な意見なのだ。そして、分離独立の時期までラホールに住んでいたタンドン夫人は、独立前の昔のお祭りを懐かしみ、「その当時は、こんなことは起こりようがなかった。・・・スワループ (神々の化身の役) (Swaroop) はブラーミン (ヒンドゥー教の僧侶でカーストの最上位に属する) の子供が演じたもんだ」と言う。するとそれを聞いたマヘシ・カプールの息子マーンは、「それはダメだよ。そんな時代だったら、バスケルは絶対にスワループを演じられなかっただろうね」と口を挟む。バスケルは、タンドン夫人の孫である。タンドン夫人は、それを聞いて、「そうだね」と考え深げに答える。彼女がこの問題をそんな角度から考えたことはこれまでなかったのである。「それはよくないね。ブラーミンじゃないという理由だけでバスケルが演じられないというのはおかしいね。でも昔は皆古臭い考えを持っていたんだ。でも良くなっている事もある。バスケルも来年はスワループの役を演じなくてはね。今でも、セリフの半分はもう覚えているんだから」と改革の必要に傾くのである。

他方、ケダレスは、それまで舞台の観衆として、あるいは、寄付を寄せることでしか祭りに参加できなかった不可触民から、時代の流れに沿った提案が出てくるのは理屈の上では当然のことと受け止めていた。だが、ケダレスは、ラーマの芝居は、長い伝統のなかで認められてきたものであり、ミスリ・マンディのラーマの上演は町全体でも有名であった。そうしたなかで原作を使おうという提案は、意味なく不快であり、宗教への政治の介入や利用と受け止められ、その年の初めの不可触民によるストライキの延長だと捉えられる危険もあった。また、神の化身の役柄に不可触民も入れるべきだという主張は、政治的な係争に繋がり、芸術的にはひどいことになると考えていた。

それに対し不可触民の製靴職人ジャガット・ラムは、英雄の役柄をブラーミンが独占するのではなく他の上位カーストも演じることが可能となったのだから、下位カーストや不可触民も出演できるようになるのは当然ではないかと主張した。ケダレスは、今年はまだ遅すぎるので、来年の上演委員会の話し合いの場に彼らの要求を持ち出す約束をすればと言いつつ、君達の住む地区のなかでもラーマの物語を演じてみてはどうかと逆提案もする。

ジャガット・ラムの哲学と農村での経験

ジャガット・ラムは、自分たちの要求がすぐには通らないことに少しも驚かなかった。農村の地獄を子供時代に経験し、思春期に都会にでてきて労働者として酷使され、同業者のなかの競争相手と仲買人に苦しめられ、貧困と泥のなかを這いずり回る生活は、ラムを一角の哲学者に変えていた。

誰も、ジャングルの中なかで荒れ狂う像や大通りを気が狂ったように疾走する車の流れ相手に言い争いはしない。そうしたものを避け、自分の家族を守り、できれば人間としての誇りを守るのが人の常だ。この世は、野蛮で惨い所だ。自分のような人間が宗教の儀式から排除される位は、まだましなことだと考えたのだ。

こうして、ジャガット・ラムは、インドの都会とは全く状況が異なる農村部におけるカースト的抑圧の実態を物語るある出来事を回想する。

前の年、ブランプールで数年暮らした彼の村のジャタブ（不可触民の一種）の若者が、収穫期に村に戻っていた。村よりは自由な都会の生活を経験していたために、村の上位カーストの不可触民への嫌悪から自分だけは免れていると勘違いしたのだ。恐らく、まだ18歳だったので、若さ故の性急さや向こう見ずさも手伝って、流行りの映画の歌を歌いながら、稼いだ金で買った自転車で村を走り回っていた。ある日、喉が渴いたので、家の外で料理をしていた上位カーストの女性に厚かましくも水を一杯たのんだのだった。若者は、その晩、男たちの集団に襲われ、自転車に縛りつけられ、人間の糞を食べさせられた。頭と自転車は粉々に叩き潰されていた。皆、誰がやったのかを知っていた。しかし、誰も証言しようとはしなかった。事件の詳細はあまりにひどいものであったので、新聞も記事にしなかった。

田舎では、不可触民は、事実上無力であった。人間としての威厳と地位を保証する土地を持っているものなどいなかった。小作人として耕すものも殆どいなかった。小作人のなかで、来るべき農地改革法で与えられる小作人の権利を利用できるものは殆ど居なかったのだ。町でさえ、彼らは、社会の屑であった。ガンディーでさえ、人々は世襲の職業を続けるべきだと考えていた。靴屋は靴や、掃除人は掃除人として。何故なら、掃除人は、弁護士や大統領と同じ位、雇人として尊いというのだ。

ジャガット・ラムは、大きな声では言わなかったが、これは大間違いだと考えていた。便所掃除や悪臭のただよう穴の中なかで働くことや、自分の両親がそうしていたという理由だけで、そうした仕事を続けなくてはならないこと自体に本質的な価値など何も無かった。しかし、殆どのヒンドゥー教徒は、そう信じていた。だから、それが変わるまでには、何世代もの人々が、大きな二輪戦車の車輪が血みどろになり停止するまで踏みつぶされねばならないのだ。

ジャガット・ラムが、新憲法の下で「指定カースト」と規定され保護された不可触民も、『ラーマーヤナ』の芝居で神の役を演じることを許されるべきだと主張したのは、心からでは決してなかった。恐らく、それは、下級カーストが許されるのなら、俺たちにもという論理的な理由ではなく、むしろ感情的な理由からであった。恐らく、ネルーの法務大臣にして不可触民の偉大で、すでに神話的な指導者となったアムベドカー博士が主張したように、ヒンドゥー教は、それが無慈悲に自己の保護の下から放り出した人々に何も与えるものなどなかったのだ。自分はヒンドゥー教徒として生まれたが、ヒンドゥー教徒として死ぬつもりはないとアムベド

カー博士は言ったのだ⁶⁾。

ガンジーが暗殺されてから9か月後に、不可触民という地位を廃棄する憲法の規定が憲法制定会議を通過し、制定会議のメンバーは「ガンジー万歳」を叫んだ。その法が、象徴的な意味ではなく実際の意味においていかに微力なものであろうと、ジャガット・ラムは、その法の勝利は、そのような法的手続きには関心のなかったガンディーよりも、むしろ別の、そして同様に勇気ある人物（アムベドカー博士）のお陰であると信じていた。(ASB, pp.1128-1132)

ヒンドゥー教とイスラム教徒の間の宗派闘争の世界

そして、この時代は、1947年8月のインドとパキスタンの分離独立の際に起きた、ヒンドゥー教徒とムスリムの間の無差別殺戮の記憶も生々しい時期であり、インド内部においても宗派間の憎悪が未だ癒っていた。『婿探し』においても、宗派闘争の再燃を危惧させる事件が、物語の冒頭で描かれている。

ブランプールでは、16世紀に北部インドがムガル帝国の支配下に入った時代、ヒンドゥー教のシバ神を祭った寺院がイスラム教徒に破壊され、そこにモスクが建立されていたのであるが、最近、ガンジス川の浅瀬に沈められ破壊を免れたシバ神を象徴する巨大な男根の石像が発見され、その地域のマー藩王国の王でヒンドゥー教の寺院の建設技術を持つマーが、ムスリムのモスクの隣に、そのシバ神の男根を祭ったヒンドゥー教寺院を建立する計画を立て、工事を開始していたのだ。そしてある時、ヒンドゥー教過激派が礼拝中のモスクに向かって法螺貝を挑発的に吹き鳴らし、それに怒ったイマム(モスクの司祭)がムスリムたちを扇動し、ヒンドゥー寺院建設現場に向かって襲いかからせ、それに対し、州の治安担当の内務大臣アガワールが警官に発砲を命じムスリムを数名死傷させる事件が起きたのだ。そして、それが州議会で、ムスリムはもとより、会議派の議員からも批判に晒される事態となっていたのだ。

アガワールは、会議派なのだが、反ムスリム感情を持ち、ムスリムとの協調を主張する同じ会議派の重鎮で財務大臣マヘシ・カプールの永年の政敵である。そしてマヘシとアガワールは、第一首相のシャーマとともに州の政治の主導権を巡り、微妙な関係にある。

セスが描いた宗派闘争は、『婿探し』が発表される前年の1992年に起きたアヨーディヤー事件と酷似している。アヨーディヤーは、かつてヒンドゥー教の古都であったが、16世紀イスラム教徒の侵入によってヒンドゥー教の寺院が破壊され、その跡地にモスクが建立されていたのであるが、ヒンドゥー教の過激派が、そのモスクの攻撃・破壊を呼びかける全国的運動を組織し、その攻撃・破壊が実行されると、それを引き金にしてインド各地でヒンドゥー教徒によるムスリム住民への無差別殺戮事件が発生したのである。

つまり、独立直後の事件としてセスがこの小説のなかで描いた宗派闘争を遥かに凌駕する規模の宗派闘争が再発し、インドにおける宗派闘争の根深さを証明することになったのである。

そして現在、インドの政権党である BJP（インド人民党）の首相のモディは、アヨーディヤー事件を引き起こしたヒンドゥー過激派の組織 RSS（民族義勇団）の出身である。モディは、2002年にグジャラート州で起きた類似のヒンドゥー過激派によるムスリム大量虐殺事件当時、グジャラート州の第一首相であったため、彼のその大量虐殺事件への関与が疑われ、当時、アメリカの国務省はモディのアメリカへの入国を拒否したのである⁷⁾。さらに、そのモディが、インド最大の人口を誇り、モディの次に来る首相の座に最も近いと言われるウツタル州の第一首相に、ヒンドゥー至上主義者で戦闘的な指導者として有名なオギ・アディトヤナス（Ogi Adityanath）を任命したというニュースが、ニューヨーク・タイムズ誌で報道され、多くの人々の不安を呼んでいる⁸⁾。

又、物語の後半では、ヒンドゥー教徒のお祭りとイスラム教徒のお祭りの日がぶつかり、両者のお祭りの山車を引く行進がぶつかり合い、暴動に発展する事件が描かれ、カプール家の末の息子でヒンドゥー教徒のマーンがヒンドゥー教徒の暴徒に取り囲まれたムスリムの友人でナワブの息子フィローズを助けるエピソードが描かれたり、第一回の総選挙の際にも、ヒンドゥー教徒のマーンがムスリムのフィローズを刺し、重症を負ったフィローズが死んだというデマが選挙の勝敗に影響を及ぼしたというエピソードも描かれる。

このように、すでに言及したカースト制度の抑圧性ととともに、インドの民主主義にとって、多数派のヒンドゥー教徒が少数派のムスリムをどう扱うのかが大きな試金石であることをセスは強調しているのである。

マーンのムスリムの遊女サイーダ・バイへの恋と放蕩

だが、マーンの世界からは、宗派闘争の世界とは対照的な宗派を超えた恋愛の世界が展開される。マーンは、父親が生涯をかけてインドの政治に関わってきたとは対照的に、25歳になったにもかかわらず、自分自身の生き方を見出すことができず、美と快楽と異文化の世界に耽溺して行く。マーンは、ホリのお祭りの際、カプール家のプレム・ニーバス屋敷で開かれる恒例のイスラム教の伝統音楽と舞踏の宴で踊る遊女サイーダ・バイに一目惚れし、サイーダの遊郭に入りびたりとなり、いつしかサイーダもマーンを愛するようになる。こうしてムスリムの遊女と名門の子息との恋愛の世界が展開して行く。そして、それは又、ヒンドゥー教徒のマーンにとっては、イスラム教シーア派の異文化世界とウルドゥー語との遭遇でもあったのだ。しかし、そのような放蕩の果てにマーンは、ある日、父親の怒りを買って家を追い出される。その話をマーンから聞いたサイーダは、妹のタズニームのアラビア語の家庭教師兼マーンのウルドゥー語の教師でもあるブランブル大学の学生ラシードが、1カ月間田舎の実家に帰ることになっていることを知り、マーンをラシードに預けることにする。こうして親元を初めて離れ、農村の人々と触れ合うなかでマーンのなかには人間的成長の兆しが見えてきて、物語のこの部

分は、一種の教養小説的色合いを帯びてくる。

だが、より重要なのは、そのような物語の展開により、西洋化の洗礼を受けた都会とは対照的に、国民の大多数が実際に生活し、古きインドの封建的伝統が未だ息づいている農村社会の実像が描かれることである。

マヘシ・カプールとザミンダーリー廃止法案

マーンの父親マヘシ・カプールは、すでに述べたように、会議派のパルーバ州の有力政治家であり、独立後、州政府の財務大臣の要職に就き、ザミンダーリー制廃止法案を州議会に提出している。

ザミンダーリー制度とは、ムガル帝国の時代に生まれた土地所有制度であり、ザミンダールはベルシャ語で、土地の所有者を意味し、ムガル帝国時代のインドで、皇帝から土地を与えられた、小作人以外で、小作人より上位に立つ階級、つまり地主階級を意味する。(Barbara Pozz, p.47) ムガル帝国を滅ぼしインドを植民地支配したイギリスは、ムガル帝国の時代の徴税制度でもあったザミンダーリー制をそのまま利用した(Permanent Settlement, 1793年)⁹⁾。すなわち、実際の耕作者である小作人や小作権さえ持たない農業労働者とイギリスの間に立ち、中間搾取者として小作人や農業労働者から富を絞り上げる大小の地主(ザミンダール)が存在する仕組みは、インドの人口の大多数が住む農村の貧困の根源となり、その廃止は、国民会議派の独立運動が掲げる独立後のインドの重要課題の一つであった。

インドの場合、イギリス統治時代から、土地からの税の徴収は州政府の管轄であった為、地主制度の改革、あるいは、農地改革は、中央政府ではなく州の管轄とされていた。従って、ザミンダーリー廃止法案は、州議会の専決事項であり、独立後、幾つかの州政府が廃止法案を提出していたのである。しかし、独立直後のインドでは、有力な地主階級であるザミンダールが抵抗勢力として、農地改革の前に立ちはだかり、そのような法に反対の立場を取り、州議会が法案を承認すると高等裁判所に憲法違反という理由で告訴するケースが起きていた。

そして、折からビハール州では州議会でも可決されたザミンダーリー制度廃止法が、ビハールの高等裁判所で憲法違反として否決されるという事態が起こり、パルーバ州でも動揺を引き起こしていることが、ハレーシュが参加したブランプール大学の若手教員のパーティでも話題になっていた。

ザミンダールのナワブ・カーンと妹の政治家ベグム・アビダ・ハーン

法案が通過すれば先祖伝来の土地と収入源を失うムスリムのザミンダールも主要な登場人物として登場する。パルーバ州のルディア地区に大規模な領地と砦のような屋敷を所有し、ブランプール市から1日の所のバイターにも屋敷を持つナワブ・カーンである。ナワブとは、ムガ

ル帝国の時代に皇帝から半ば独立した公国の支配者に与えられた尊称である。ナワブは、伝統的なムスリムの宮廷芸術・文化の庇護者であり、イスラムの詩歌、伝統音楽、舞踏等の職人的芸術家を抱え、その他にも沢山の従者を抱えている。つまり、貴族的半封建領主のような存在である。ナワブ・カーンは、大地主のなかでも教養があり、自宅の図書館で読書を好む学究的な気質を持った人物で、独立運動の時代から会議派のマヘシ・カプールとは長年の政敵ではあったが、二人の間には、友人としての個人的信頼関係がある。ナワブは、マヘシが個人的恨みによってではなく、会議派としての政治的原則に基づき、ザミンダーリー制度廃止法を議会に提案していることを理解し、かつ、この封建的地主制度の欠陥にも気づいており、その没落を歴史の不可避的な動きとして冷静に受け止めつつ、州議会でのザミンダーリー廃止法を巡る激しい攻防戦を傍聴している。

しかし、ナワブの弟の妻ベグム・アビダ・カーン（ベグムは女性のナワブの尊称）は、分離独立の際に、パキスタンへの移住を選択した夫と別れ、女性だけの世界に閉じ込められるムスリムの女性の運命と決別し、インドの政治家としての道を選んでいった。そして、ザミンダーリー制度廃止法案の審議がパルーバ州議会が始まると、地主階級の立場から舌鋒鋭くザミンダーリー制度を擁護し、廃止法案に反対する強力な論陣を張る。『婿探し』は、そのようなムスリムの女性政治家がいかに生まれたのかにも焦点を当てている。

ザミンダーリー制度廃止法を巡る州議会での審議を描く象徴的意義—民主主義国家インドの旅立ち

『婿探し』における、州議会でのザミンダーリー制度廃止法案を巡る議論や、その後の高等裁判所での違憲裁判を細部に渡りリアルに描いた部分は、独立直後のインドを描くこの小説の最も重要な側面を成していると考えられる。何故なら、ここにこそ、独立後、世界最大の民主主義国家として世界史の舞台に登場したインドの面目が躍如としており、同時期に、内戦を経て社会主義国家を建設した中国との対照的な差異も見ることができるからである。中国の場合にも農村部における地主制度の廃止が大きな課題であったが、それが大地主に対する毛沢東率いる共産党に指導された小作人による武装闘争という暴力的形態を取ったからである。

その後、中国では、毛沢東の指導の元行われた農村復興・発展を目指した「大躍進計画」が大失敗したのだが、その責を問う知識人を毛沢東が反革命分子として敵視し、「文化大革命」のスローガンの元、紅衛兵を動員し、大学を閉鎖し、知識人を下放し、弾圧する暗黒の時期を迎え、その後の「改革開放」による経済の自由化による経済的發展の時代を背景にした民主化要求も「天安門事件」によって力で押さえつけ、今も依然として一党独裁を崩さず、党への批判的意見を圧殺し続けている。

それとは対照的に、インドにおいては、武力に訴えず、言論に依拠する限り、自由な意見の表明が許され、知識人が前面に立、議会という場で地主階級であったとしてもその立場を堂々

と表明し、選挙において国民の信を問うことができるという民主主義的伝統が現在に至るまで引き継がれている。『婿探し』は、そのような民主主義国家としてのインドの旅立ちを詳細に描いているのである。

だが、民主主義国家インドの現実には、インドの都会だけを見ても理解できない。国民の圧倒的多数が生活するインドの農村にこそ、カースト制度を始めとした前近代的な制度と意識が温存されており、都市の議会で創られた法律が骨抜きにされるのがインドという国の大きな特徴なのである。

そして、父親からブランプールを追い出されたマーンが、農村の実家に一時帰省するラシードについて行くことにより、前近代的性格が色濃く残る農村部の生活が『婿探し』の重要な部分として描かれることになる。

地主の息子ラシードの苦闘と絶望

ラシードは、正義感や理想主義的性格を持ち、ブランプール大学で学ぶうち社会主義思想の洗礼を受け、大土地所有制度に反対し、その元で隷属を強いられる小作農に共感を持つようになっていた。だが、ラシードの田舎の実家は、ザミンダーリー廃止法によってその存在を脅かされている当の地主の家系であり、彼は地主の息子だったのだ。そしてラシードは、前近代的な村の現実の中で、孤立無援の闘いを強いられ、絶望のなかで悲劇的に人生を終えることになる。その悲惨さは、華麗な議会や裁判所での議論と対照的であり、合わせてそれがインドという国の現実なのだ、セスは描いているのである。

インドの独立後の国民会議派の変質と第1回総選挙

マヘシ・カプールは、パルーバ州の会議派の大物政治家であるが、この時期、彼が属する会議派は、大きな転機を迎えていた。

元々会議派は、様々な階層・カーストや左派から右派に至る異なった政治的立場の人々が独立という大義の下で大同団結することによって成立した政党であった。しかし独立後、国民を大同団結させる独立という大きな理念・目標を失い、インドという国家権力の座に就き、利権を手に入れると、会議派内部の政治的立場や政治に関わる動機の違いが表面化し、それが、会議派の主導権争いとして展開されるのである。そうしたなかで1948年1月30日のガンディー暗殺後、首相のネルーは、独立闘争の時代から築き上げてきた社会主義的な綱領に従って国家建設を進めようとするが、独立闘争の盟友であり、ガンディーの下で共に会議派を支えてきたパテル (Sardar Patel) は資本主義派としての立場をより鮮明にし、党内で右派の力を強めて行き、1950年のパテルの死後は、その後継者タンドン (Purushottam Das Tandon) が会議派のなかで勢力を急速に拡張し、会議派の党首に選出され、来るべき独立後初めての総選挙に

において、ネルーの国民の間での絶大な人気を利用しつつ、自派の当選を計ろうとしていたのである。こうしたなかで党内左派の間からは新党結成の動きが起きていたのである。(Guha, Part one 7, 2007, Chandra, 15, 2000)

こうして、『婿探し』の民主主義国家インドを巡るテーマは、農地改革を議会や裁判という民主主義的手続きにより解決しようという側面に付け加え、独立後のインドが進むべき方法性を巡る会議派内部の権力闘争や、総選挙の様子とその結果、すなわち、独立後のインドの政治の原点が描かれ、後の展開への示唆と成っているのである。

本論で論じる主要なテーマの設定

これまで『婿探し』が、どのようなテーマを描いているのかを概観しつつ、本論で論じたい重要なテーマを幾つか明らかにしてきた。それは第一に、独立を契機に封建制からの脱却を目指す農地改革を巡るパルーバ州議会や高等裁判所での論戦であり、同時に、地主制度が存在する農村部の実態と、地主制度廃止への動きを骨抜きにしようとする地主勢力の動きや、それ抗おうとする、地主の息子でありながら、社会主義思想を持ったラシードの悲劇であり、第二に、独立後、政権党となり利権を手にした会議派の変質を巡る党内権力闘争や会議派政治家による官僚支配の傾向、そして、会議派の変質と右傾化の下で行われた独立後最初の総選挙等である。

本論—世界最大の民主主義国家としてのインドの旅立ちと苦悩

I ザミンダーリー制度廃止法案を巡る州議会での論争

インドの民主主義の歴史的前提—英領インドにおけるインド人自治の歩み

『婿探し』の読者は、独立後わずか数年のインドにおいて、インド憲法、中央政府と州政府、そしてそれぞれのレベルでの議会や司法体制がすでに存在し、そこで地方政府が提案した議案が様々な政党によって自由に議論されるという事態に驚くことであろう。それは同じイギリスの植民地であったマラヤやビルマ、オランダの植民地であったインドネシア、フランスの植民地であったベトナム、ラオス、カンボジアにおいては見られないことであった。

イギリスのインド統治の一つの特徴は、インドの一般民衆の教育にはあまり力を注がなかったが¹⁰⁾、一定の成長を見せていた都市部の中産階級層の子弟を対象に、インド国内に英語で教える高等教育機関を作り、さらに、イギリス本国の大学でもインド人の優秀な学生を引きつけた点にある。その狙いは、イギリスによるインド植民地統治・支配に協力的な親イギリス派の優秀なインド人を育て、官僚統治機構に組み込むことにあった。

従ってインドでは、一方では、膨大な字も読めない農村の貧困層を抱えながらも、他方では、

19世紀の末までには、イギリスで高等教育を受け鉄道、郵便、新聞等のインドで急速に発達しつつあった情報ネットワーク分野の仕事に携わっていたインド人が多数存在し、そうした人々が各地域でインド人の権利を行政当局に主張する組織に参加していた。他方、1885年には、インド人による自治を要求する政党、インド国民会議派（以下、会議派）が結成され、イギリス政府のインド統治機構への選挙に基づくインド人の参加を要求してきた歴史があり、幾度かのイギリスによる統治制度の改革を経て、1930年代には二度の総選挙と州議会選挙を経験し、州政府のトップを除き他の大臣の地位にインド人が就く体制が定着しており、独立時、その半数がインド人官僚からなっていた中央政府の行政機構（ICS）とインド国軍も存在し、独立後、インドという国家を統治する準備や体制が、すでにできていたのである。分離独立の際に生じたヒンドゥー教徒とムスリムの間の流血の大混乱を比較的短期間のうちに収束させることができたのも、そのような政府の官僚機構が機能したおかげであるといわれている。（メトカーフ、p.198、p.274、p.280、p.304、p.318、）

インド憲法制定会議とインド憲法の制定（1950年）

そして独立後、ネルーに率いられた新政府が最初に取り掛かった課題の一つがインド憲法の制定作業であり、憲法起草会議が1947年8月29日に召集され、その議長として草案の取りまとめにあたったのが、不可触民出身でアメリカのコロンビア大学で学位をとりイギリスのLSE（ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス）で法学と経済学の博士号を取得していたアムベドカー博士であった。そしてこの憲法制定会議が1952年の第一回総選挙に至るまで中央議会として機能したのである。

『婿探し』で描かれるザミンダリー制度廃止への州政府の動きと地主勢力の抵抗

『婿探し』は、そのような歴史的的前提の上に展開されるのであるが、ハレーシュが参加したスニルの家で開かれたパーティでも、ザミンダールの領地を没収する法案がパルーバ州政府によって議会で提案され、地主勢力が法案審議のあらゆる段階で執拗に抵抗していることが話題になる。

そして、その場にいたプランにも注目が集まる。何故なら、この問題は土地からの歳入に関わるが故に中央政府ではなく、州政府の所管であり、財務大臣であるプランの父親マヘシ・カプールが、その法案の提出責任者だからだ。プランは、母親から聞いた話として、マヘシが毎晩遅くまで仕事をしていて、時には、疲れ果てて夜遅く事務局から帰宅し、夜を徹して書類を読み、次の日の議会での演説の準備をしていて、母親が「200の条項を作れば、200の潰瘍ができるのよ」と父の健康を気遣っていると言う。そして、今や、ビハール州の高等裁判所でザミンダール廃止法が憲法違反であると宣言されたことで、皆がパニックを起こしていると言う。

こうしてセスは、パルーバ州議会においてザミンダーリー廃止法案が提案され審議されている状況を示唆している。インドの議会での法案審議は、イギリスの議会に習い、三段階の審議を経て採決されるのであるが、パルーバ州議会でのこの法案はその第二段階（第二読会）（second reading）にさしかかっている。

パルーバ州議会での法案を巡る論戦を伝える前に、もう一つの歴史的前提として、論戦が展開される直前に起草され、成立した憲法修正条項について説明しておこう。この修正条項が後にパルーバ州高等裁判所の判決に生きて来るからである。

ザミンダーリー廃止法案の補強を目的とする憲法修正条項の作成

独立直後から1949年までに、インドの沢山の州議会でザミンダーリー制度廃止法案が提案されていた。そしてその間、憲法制定会議においてインド憲法草案作りが進んでいたのだ。しかしながら、ザミンダール勢力は、彼等の土地の収用を防ぐために、私有財産権の侵害や補償の「不当性」等の理由を掲げ訴訟を起こすことが予想された。そこで、国民会議派の指導者たちは、各州議会在地主への補償を認め、大統領、すなわち中央政府の内閣がそれに同意すれば訴訟の対象とはならず合憲であるとする条項を加え憲法草案を補強したのだ。しかし、予想に反し、地主たちは、州議会の補償案の非合憲性を高等裁判所に訴え、それが勝訴するという事態も起きてきた。そこで、会議派の指導者たちは、1951年初頭に、憲法修正条項第一条（1951年）、続いて第4条（1955年）を加え補強し、基本的権利の侵害や補償額の少なさを問題にすることを裁判においては認めないとしたのである。（Chandra, 2008, No. 9342-9352）

州議会での審議—カプールは法案修正を検討させる

午前の審議を終えた昼食時、マヘシ・カプールは大臣政務官のサラーム・アブダス（Salaam Abdus）を呼ぶ。マヘシは、ビハール州議会を通過したザミンダール廃止法がパトナの高等裁判所で却下されるという状況の下で、ブランプール高等裁判所もその心理的影響を免れぬかもしれぬと危惧し、特に、「法による平等な保護」という憲法の規定に対応した補強が必要だと考え、若く学識のある同僚の知恵を借りたいと思ったのだ。サラームは、この間、ある考えが浮かんでいたのに役に立つ提案ができるかもしれないと言う。そこで、マヘシは、今晚までにその提案の草稿を自分に渡すようにと指示する。法案審議は、現在、第二読会の段階にあるので、何かするのなら今しかないと言うのだ。急な要請に驚いたサラームは、早速、図書館へ向かうが戸口で踵を返し、政府法制局の法案起草グループから二人ほど人手を依頼する。（ASB, p.282）

マヘシ・カプールと封建領主バイターのナワブとの関係

他方、マヘシは、食後、手を洗いながら、古くからの友人であるバイターのナワブのことを考える。ナワブは、この法案が通過することによって最も深く影響を受ける人々の一人であった。ルディア (Rudhia) 地区の彼の領地—そこから恐らく彼は収入の3分の2を得ているのであるが—は、法が実施されればパルーバ州に帰属することになる。そして大した補償金は受け取れないだろう。そして小作人は、耕している土地を買い取る権利を得ることになる。そして買い取るまで小作人の支払う借地料は、ナワブ様の金庫ではなく州の歳入局に収められるのだ。しかし、マヘシは、正しいことをしていると確信していた。マヘシは、都市部のミスリ・マンディの選挙区から選出されていたが、長いことルディアの農場に住んでいたため、田舎におけるザミンダリー制度の悲惨な結果を良く知っていた。マヘシは、自分の眼で生産性の低さや、その結果としての飢餓、土地改良への投資の欠如、封建制度の傲慢さと隷属の最悪の形態、典型的な地主の手下や乱暴者による弱者への専横の支配の実態を知っていた。

マヘシ・カプールは、もし何百万人に上る小作人が幸せになるのなら、数少ない善良なナワブの生活様式が犠牲になったとしても、それは、しかたがないことだと考えていたのだ。(ASB, P.283)

バイター屋敷とナワブの家族—ムスリムの女性政治家ベグム・アビダ・ハーンの選んだ道

次にセスは、バイターのナワブと二人の息子たちが住む屋敷とその家族を描く。先祖から代々受け継がれてきたバイター屋敷は、ブランプールにある最も奢侈な屋敷であり、内部には代々の貴族の油絵の肖像画やイギリスの高官が屋敷を訪れたことを記念する額縁に入った写真が飾られていたが、広い屋敷の沢山の部屋の殆どの住民はパキスタンに去ってしまったために閑散とし、住居の重苦しい雰囲気を一層際立たせていた。

ベグム・アビダ・ハーンも、ナワブの弟にあたる夫と共にかつてはここに住んでいた。ベグムは、長い間、女の館 (イスラム教の戒律に基づく、屋敷の女性居住区) でイライラを募らせていたが、夫を説得し外的世界と接触できる許しを得、社会的・政治的活動の面で夫以上に能力を発揮したのだ。

他方、分離独立に賛成していた夫は、分離独立後、ブランプールでのムスリムとしての自分の立場の脆弱さを理解し、インドを去る決意をしたのだ。一度はカラチに行ったが、自分がパキスタンに定住した場合インドに残した財産や妻の運命がどうなるのかが不確定であったこと等の理由で、イラクのイスラム教の聖地巡礼に行ったままで、財産権の問題が未確定のままであった。というのは藩王国ではなく、イギリス領インドに属していたため、財産の相続はムスリムの個人相続法に支配されていた。だから家族の死や離散による財産の分割も可能であったが、これまでそのような分割がされないまま、沢山の家族がそれぞれバイターの屋敷カルディ

アの砦に住んできたのである。しかし、分離独立と共に、住人の大半がパキスタンに行ってしまったため、パイター屋敷に住むのは妻を亡くし独り身となったナワブのみであり、屋敷は閑散としていた。ナワブは、図書館に籠り、ペルシャの詩やローマの歴史書等を読みふけることが多くなっていた。二人の息子たちは今や20歳台であり、フィローズは弁護士、イミタズは医者として多忙を極めていたのだ。そして娘のザイナブは、結婚していて、たまにしか屋敷を訪れることができなかった。

だからナワブは、寂しさのあまり、雷のような存在であり、あまり好ましいとは思っていなかったベグムにさえ会いたいと思うほどであった。ベグムは、州議会議員であり、屋敷の「女の館」の厳しい規則に縛られることを嫌い、州議会の近くに小さな家を構えていたのであった。

ベグムは、正しいと、あるいは、有用であると信ずる大義の為に闘う場合、攻撃的、あるいは、なりふり構わないタイプであり、ナワブを全くふがいないと思っていた。ベグムから見れば、自分の夫さえ、「分離」の際にパニックに襲われ、ブランプールを「逃げ出し」中東のあたりを宗教に溺れさ迷っていると軽蔑していたのだ。(ASB, pp.284-285)

修正されたザミンダーリー廃止法案を巡る議論

他方、州議会では、マヘシの指示と法制局の助けを得、サラーム・アブダスによって修正された案が州議会の第二読会に提案され、地主政党の民主党を代表し、ベグムがそれを批判する。ベグムの議論は、多岐に渡るのであるが、ザミンダーリー制度廃止法批判に絞って紹介してゆく。

ベグム：これまでの議論で、地主への補償が合意されていた。地主は、先祖伝来の生活手段を奪われるのであるから、それは当然のことである。しかし、支払われる額は端金であり、議会に提出された修正案では、その半額が、満期が不明確な州政府の公債の形で受け取ることになっている。そして、公債という形で弱められた端金は、地主の土地の規模に対し累進的システムではなく、段階的評価システムで支払われる。大きな地主ほど屋敷を構えていて、養うべき数百の人々—支配人、親戚、雇人、音楽家、(野次：格闘家、弱い者いじめ、遊女、放蕩者もだ!)を抱えているにもかかわらずである。こうした人々はどうすればいいのか？政府にはどうでもいいのだ。これは一般大衆の人気取り政策であり、数か月後の総選挙目当ての政策である。これが真実なのだ。財務大臣がそれを否定しても私はそれを認めない。そして、ブラムパー高等裁判所が段階的評価システムを認めないかも知れないと懸念した州政府は、審議の最終段階の昨晚、それを修正した。すなわち、補償金を二つの部分、非段階的補償金と段階的、所謂、「ザミンダール社会復帰資金」に分割した。そして、その日の遅く、修正条項案を可決したのだ。だが高等裁判所は、この補償金の仕組みが(憲法で規定された)

「全ての人への平等な扱い」だと認定するであろうか？財務大臣と大臣政務官は、補償金の4分の3を「長くもってもらいたい名前を持った別のカテゴリー（「ザミンダール社会復帰資金」）に移したのだ。そしてそれは大地主ほど損をする明らかに不平等なものである」。これが「全ての人への平等な扱い」と言えるだろうか？我々は、このような不正とは命ある限り闘う。

ここで野次が入るが、議長はそれを制する。

ベグム：この地域の文化、音楽、作法を継承してきた階級の財産が奪われ、ブランプールの街角で物乞いしなくてはいけなくなるのだ。だが我々は、貴族としての誇りを持ってそのような変化に耐え抜くであろう。この法案を下院と上院は承認するかも知れないが、ビハール州と同様、パルーバ州の高裁は、この有害な法を却下するであろう。そして我々は正義の為に、息が続く限り、あらゆる手段を通じて闘い続けるであろう。

社会党の立場—補償金の支払いを批判

ベグムの次に発言した社会党の議員は、働かざる者食うべからず、という倫理的な立場から、ザミンダールと会議派の両方に批判の矛先を向け、ザミンダールへの補償金の支払いそのものを批判する。

社会党：補償金とは、無力で抑圧されてきた百姓から吸いあげた血への補償金だ。ベグム議員は、ザミンダールとしての権利は神によって与えられたものだと言うが、その権利とは、貧しい百姓、みじめな小作人、土地を持たない労働者たちが、腹を空かせた自分の子供たちにミルクもろくに飲ませてやれない時に、この州のバターを自分たちや仕事もしない親戚連中がこれまでと同様に貪り食い続ける権利のことに他ならない。にもかかわらず、どうして州の金庫の金を補償金に充て、我々や我々の子供に将来的に借金を背負わせるのだ？この働かない悪党連中、ザミンダールや諸々の地主たち、あの大反乱のときにインドを裏切り、イギリスに忠誠を尽くした報酬として与えられ、何世代も居座ってきた連中の土地など取り上げるのは当然であり、補償金など必要ないのである。その金があれば、道路や学校や土地を持たない人々の家の建設や診療所や農業研究センターを作る資金に充てるべきである。

民主党：論点と無関係の議論である。

議長：無関係な議論ではないと思われる。議員は、小作人とザミンダールと政府の関係について述べているのだ。これは我々が直面している問題であり、議員の発言は無関係とは言えない。

社会党：百姓は灼熱の太陽の下、裸で立っている。しかし我々は、涼しい議場に座って議論し、百姓を以前と変わらぬ状態に取り残すような法律を作っているのだ。何故百姓は、そ

れまでの努力と苦しみ、土地を自らの手で耕してきたこと、言うなれば神によって与えられた権利によって自分のものである土地に支払をしなくてはならないのか？唯一の理由は、地主の法外な補償金の為である。地主の土地を買い上げるという観念を拒否すべきだ。この法案が2年前に検討され始めた時から先週の第二読会を通じ、私はそう主張してきた。しかし、この段階において、私は、大臣席に向かって、この案が地主とのいかにわしい同盟の産物であり、農民の精神を折ろうとする攻撃であると言う術しか残されていない。来るべき総選挙では、人々は真に人民の政府を選び、階級敵にいかなる援助も与えないであろう。(ASB, pp.300-303)

審議を傍聴するナワブのザミンダリー制度観

ナワブは、この演説の最初の頃から傍聴席に座っていた。その理由の一つは、今日が歴史的な日であり、議会での投票結果は、ナワブや彼のような人々にとっては没落を意味し、それは遅かれ早かれ起こるべきものだと考えていたからだ。ナワブは自分の属する階級に誇りを持ってはいなかった。立派な人々も少しはいたが、多くは野蛮な連中で、さらに多くの愚か者を含んでいたからだ。ナワブは、12年前に、ザミンダール協会が知事宛に出した陳情書を見た記憶があった。署名者の殆ど3分の1は、名前を書く代わりに自分の親指を使っていたのだ。

イギリスが1850年代の初めにブランプールをイギリス植民地に組み入れて以来、ムガル皇帝と血縁関係を持つ家柄にそれまで使えてきたバイターのナワブや他のブランプールの廷臣たちは、それまでのように国家に仕えるという心理的満足感を奪われた。イギリス人は、ザミンダールに地代からの徴税は喜んで任せ、(そして同意されたイギリスの取り分を超えて百姓から搾取することも事実上黙認してきたのだが)、国家の行政についてはイギリスで選別され、ある程度訓練され、インドに派遣されたイギリス人、そして後には、受けた教育や精神においてイギリス人と変わらぬ褐色の肌をした役人しか信用しなかったのだ。それには人種差別もあったにせよ、ナワブ自身認めざるを得なかったのだが、能力の問題があった。殆どのザミンダールは、自分を含め、自分の地所さえ治めることができず、番頭(munshi)や金貸しから金を騙し取られていたのである。そして殆どの地主にとっての第一の関心事は、いかに収入を増やすかではなく、いかに使うかにあったのだ。産業や都市の資産に投資するものなど殆ど皆無であった。あるものは、確かに、音楽や書籍や絵画の購入に使った。他の人々は、ナワブの友人でもあるパキスタンの現首相のように、政治の世界で影響力を増やすために使っていた。しかし、殆どの場合、王子や地主は、贅沢な暮らし、狩り、ワイン、女、阿片、等に浪費していたのだ。(ASB, 5.16, pp.304-305)

ベグムの最終弁論

議場では、4時半を過ぎ、投票までに30分を残すばかりとなっていた。そして最終討論の時間となり、再びベグムが壇上に立つ。

ベグム：あなたたちは80万人の人々の財産を奪い、公然と共産主義を奨励している。国民は、すぐにあなたたちの正体を見抜くであろう。あなたたちは、我々がやらなかったどんな新しいことをやるというのか？あなたたちは土地を小作人に与えるわけではない。我々と同様に、土地を貸してやるのだ。だが、あなたたちは、百姓のことなどどうでもいいのだ。我々は、何世代にも渡り、共に生きてきた。地主は、小作人の父や祖父のようなものであった。小作人は我々を愛し、我々も小作人を愛した。我々は彼らの気質を、彼らは我々の気質を知っていた。彼らは、我々が与えるものに満足し、我々は、彼らが差し出すものに満足していた。あなたたちは、私たちと小作人の間に入り込み、大昔からの感情の絆によって神聖化されたものを破壊したのだ。そして、あなたたちは、我々が小作人をひどく扱ったと主張するが、あなたがたの体制のもとで小作人たちがましな扱いをされるというどういう保証があるだろうか？百姓たちは、金でどうとでもなる番頭や貪欲な下級の役人の餌食となり、カス々になるまで搾り取られるであろう。

補償金についてすでに言いたいことは語ったが、最後に、これは、最初に端金を支払い、残りを25年の分割で支払うのと同じやり方だ、と付け加えておこう。

あなたたちは口を極めてザミンダーリー制度に悪口を浴びせたが、事実はこうである。この地方を現在ある姿一強力で特色ある地域にしたのはザミンダールである。生活のあらゆる領域において、我々は、これからも長く生き延び、拭い去ることのできぬ成果を残してきた。総合大学・単科大学、古典音楽の伝統、学校、この地方の文化等は我々が創ってきたのである。外国人や他の地方の人々が、この地方にやってきたときに見学し、感心するもの、こうした香しいものを、あなたたちは搾取や腐敗しつつある遺体の匂いがすると言う。こうした調子で語ることを恥ずかしいと思わないのか？

ザミンダーリー制度廃止法の可決

この演説の後、長い社会党議員による演説と第一首相のシャーマによる簡略なスピーチが続き、ザミンダーリー廃止法案は社会党の不承々の賛成も得て、圧倒的多数で可決され州議会を通過し、民主党は、抗議の意を表明し議場から退場する。

議長はそのあと、翌朝の11時まで審議の休会を宣言する。マヘシ・カプールは、議場の傍聴席のあたりを見上げ、ナワブと視線を合わせる。二人は友情の印としてうなずき合うが、そ

の場の状況を考慮し、今はまだ言葉を交わすタイミングではないとお互いに判断する。
(pp.306-310)

ベグム・アビダに影響を与えたナワブの今は亡き妻

次にセスは、州議会で、ザミンダーリー制度廃止法案に地主勢力の立場に立って反対の論陣を張ったムスリムの女性政治家ベグム・アビダ・カーンの物語を展開する。実は、その背景にはナワブの今は亡き妻の存在があったのだ。法案が採決された後、バイター屋敷に戻ったナワブが、娘のザイナムと交わす会話を通じて、その秘密が明らかにされるのである。

バイター屋敷に戻ったナワブは、「女の館」にいた娘のザイナムの傍らに身を置く。ナワブは、最近ザイナムが夫の不貞に悩んでいるのを知っていたからだ。静かにすすり泣く娘の傍らで、義理の息子がその不実によってそのように深く自分の娘を傷つけたことに大きな怒りを感じ、ザイナムが小さかった時によくしたように、彼女の髪を撫でながら、「お母さんのように我慢しなさい。そのうちあの男も戻ってくるから」と慰めたのである。

実はナワブは、ザイナムとその夫の關係に、若き日の自分と今は亡き妻の關係を投影していたのだ。ナワブは、結婚後も長い間妻のことを知らず放蕩に溺れていたのだが、妻は、そのような夫に我慢強く耐え、「女の館」に閉じ込められながらも壁の裏から屋敷を有能に切り盛りし、子供たちを育て、甥や姪たちを躰け、教育する手助けもしたのであった。

ザイナムは、父親が母親のことを引き合いに出したのは何故だろうかと思った。すると暫くしてナワブは、「私が、お前の母の本当の値打ちを知ったのは年をとってからだった」と独り言でも言うかのように付け加えたのだ。

こうしてナワブは、晩年になって知った今は亡き妻の生き方と、それがベグムに与えた影響について思う。

ナワブの妻は、読書をし、そこにとどまるのではなく、自分の頭で考える女だった。ナワブは、ベグム・アビダに影響を与えたのは実は妻だったのかも知れないと思いついたのだ。妻が、世間から隔離された「女の館」の生活に悶々としていた義理の妹ベグム・アビダに貸した本こそが、落ち着きのない、イライラしていた心に最初の反抗の種を蒔いたのかも知れないと思った。ザイナムの母親は、自分自身は「女の館」から出ることを思いつきはしなかったが、アビダが「女の館」に辛うじて耐えることができたのは、彼女が居たからであった。妻が亡くなったときアビダは、いたたまれない束縛と化した「女の館」から逃れる為に、道理、甘言に訴え、自殺まで仄めかす等あらゆる手段を駆使し、夫やナワブを説得したのだ。ベグムは、ナワブに対しては厳しい評価をしていたが、ナワブの子供たちには大きな愛情を感じていた。それは彼らが母親を想起させる特質を受け継いでいたからだ。(ASB, pp. 344-346)

このようにして、女性を世間との繋がりから隔離し、家に縛り付けるイスラムの戒律の下で

育ちながらも、ナワブの妻に勧められ本を読み、自分で考えることを知り、自己実現の道に目覚めたベグムは、政治家として世の中に打って出る道を切り開くことができたのである。ここには地主勢力の代弁者としてのベグムの政治的立場とは別次元での、ムスリム女性の自立への女性同士の連帯を見ることができよう。

独立後の会議派の変質・墮落と新党結成への動き

ここで物語は、独立後の政治のもう一つの新たな展開に目を向ける。それは、独立達成の理想の為に全てを投げうって闘った会議派のかつての闘士の中から見た、独立後の会議派の変質・墮落である。

ザミンダーリー制度廃止法が議会で可決された次の日の朝、マヘシ・カプールのプレム・ニーバス屋敷のベランダには、彼の選挙区であるブランプールの旧市街やそれ以外の所から多くの人々が陳情に訪れていた。彼らは農民、仲買人、政治を志す人々、頼み事がある人等、多彩な顔触れであり、カプールは屋敷の彼の書齋で、一人一人から話を聞くことになる。

そのうちの一人は、年老いた教師で、マヘシより若い、苦勞のために老けて見える男だった。男は、1921年に大学の学士号を取得していた。当時そのような資格を持てれば、政府の高官の地位にまで上り詰め引退し、悠悠自適の生活を送っていてもおかしくはなかった。しかし、老人は、1920年代の末にガンジーに従う為に全てを投げ出した。しかし、そのような理想主義的な衝動は高くついた。獄に繋がれている間、何の身寄りもなかった妻は、結核で亡くなり、子供たちは、他人の残り物を食べる暮らしを強いられ餓死寸前まで行ったのだ。独立後、老人はインドの現実に痛く失望していた。政府の配給制度や政府との請負契約が、人々の強欲さの餌食となり、イギリス統治時代には見られなかったような汚職や腐敗が蔓延していたからである。最悪だったのは、会議派の地方の政治家が、腐敗した州政府の小役人と組んでいたことだった。しかし、老人が、第一首相のシャーマに、そのような政治家を処罰するように近隣の人々を代表して訴えたところ、シャーマは、「あなたの教師としての仕事は神聖な職業だが、政治は石炭業のようなものだ。政治家の手や顔が多少黒く汚れていてもどうして責められようか」と言ったという。そして老人は、マヘシに面と向かい、「会議派は、恥ずかし気もなく利権にどっぷりと浸かっており、その政治は、イギリスと同じぐらい抑圧的だ」と言った。

そして老人は、自分自身に呟くように言った。「ガンジーは正しかった。ガンジーは、独立後、会議派が政権を取れば何が起きるのかを予見していて、会議派は解散し、党員は社会活動に従事すべきだと言ったのだ」。マヘシは、齒に衣を着せず、「もし我々すべてがそうしていたら、この国は無政府状態となっていたでしょう。30年代の末に州政府の仕事を多少なりともしていた人々が、政府を維持することは、その人々の義務でした。独立後の事態についてのあなた

のご指摘は正しい。だからと言って、あなたのような人や私が石炭業界から手を引いてしまつたら、その代わりにどんな連中がその後に居座るのかお分かりでしょう。以前政治は金の儲かる商売ではなかった。今や、政治は儲かる商売だ。当然のことながら金儲けに関心のある連中が政治の世界に参入したがるのです。もし我々が出て行くとそうした連中が入ってくるのです。ここに集まった沢山の人々を御覧なさい。このなかには、近々行われる総選挙に会議派候補としての公認を得るためにやってきた人々が少なからずいるのです。そして私たちがよく知っているように、イギリス統治の時代には、そのような人々は会議派には決して近づかなかったのです」と言った。

すると老人は言う。「私は、あなたに政治から手を引くようにと言っているわけではありません。私が言いたいのは、ネルーが新党を結成する手助けをして欲しいということです。タンドンが会議派の党首になったことでネルーが困っていることは皆が知っている話です。ネルーが会議派を殆ど掌握できなくなっていることも周知の事実です。ネルーはあなたを尊敬しています。だからデリーに行って、ネルーが会議派を去るよう説得して欲しいのです。ネルーが新党を結成すれば、次の選挙で勝利できる可能性が大いにありますと私は信じています」。マヘシは、「よく考えて見ましょう。そのような事を考えたこともない、などと言ったら嘘になります。しかし、事態には論理があり、時を見るには方法が必要です」とマヘシは答えた。老人は、うなずき、立ち去ったがその表情には失望の色がハッキリと表れていた。(ASB, pp.348-350)

ここには、独立後、議会制民主主義国として華々しく出発したインドの政治が抱える腐敗、すなわち独立闘争の時代には政治に近づかなかったような人々が、独立後、インド人の政府が出来たことにより「政治が儲かる商売」になると、私利私欲から政治の世界に参入してくるといふ、インドの政治が今もお直面している現実が描かれている。そして、この古参の独立運動の闘士がマヘシに打ち明けた問題は、会議派からの離脱と新党結成への動きと会議派内部の右派と左派の権力闘争という大きな問題へと繋がって行き、マヘシの会議派内部での身の処し方や総選挙にどの党から出馬するのか、という問題に繋がって行く。

分離独立後のインドにおけるヒन्दウー教徒多数派と少数派ムスリムの対立

又、かつてムスリム同盟に属していて、次の総選挙に会議派から立候補したいと言う政治家も相談にもやってくる。会議派の下部組織には、分離独立を目指し会議派と対立したムスリム同盟への反発や不信があるためだ。しかしマヘシは、「確かにお互いの間に不信感はあるが、問題は、ブランプールで、二つの宗派が対立するのではなく、どのようにして協調してやって行くのかにある」とし、それこそが会議派の伝統であり、総選挙においては、ムスリムにもその人口比率に即し公平に立候補枠が割り当てられること、そして古くから会議派とともに闘ってきたムスリムの政治家が優先されるが、新しいムスリムの候補にもチャンスは与えられるべ

きだというのが彼の立場であると言う。

Ⅱ ザミンダーリー制度廃止法の骨抜きを計る地主勢力と、それに反対する地主の息子ラシードの悲劇

このようにしてパルーバ州におけるザミンダーリー制度廃止法案の審議が一つの山を越え、闘いの場が高等裁判所に移ろうとする処で、物語の舞台は、封建的土地所有制度であるザミンダーリー制度が存在する北インドの農村地域に移される。そこで主要な役割を果たすのが、ルディア地区のデヴァリア村の地主の息子でブランプール大学の学生のラシードと、父親のマヘシからブランプールを一時期追い出された放蕩息子のマーンである。そしてブランプールのようなインドの都会とは異なり、大多数のインド人が住み、カースト制度に支配され、封建的な精神風土が強く、住民の大多数が字も読めない農村地域の様子が、様々な角度から描かれて行く。

マーンにとって田舎での生活は、生まれて初めての体験であり、その物語は、ブランプールでは出会えないユニークな人々との出会いや多彩な経験を描いたエピソードにあふれている。しかし、本論では、地主の息子ラシードを巡る物語を中心に、マーンの物語も、ルディア地区の政治や行政の動向に関わるものに絞り、紹介して行きたい。

デヴァリア村に汽車で向かう二人

ラシードとマーンは、モンスーン前のインドの酷暑の中を、ラシードの実家があるデヴァリア村に汽車で向かう。車中、マーンは、デヴァリア村の水質が気になり聞かすが、井戸水を手動のポンプで汲み上げるので大丈夫だというラシードの返事から、村には電気が通っていないことを知る。ラシードの隣に座っていた中年の農民がマーンの荷物のタグを見て「英語をしゃべるのか？」と話しかけ、「英語が喋れれば、王様みたいなもんだ。英語で人を煙に巻けば巻くほど、尊敬されるってわけだ」と言う。イギリスによる統治の時代の影響が色濃く残っているのだ。

やがて列車は、1時間半遅れでルディアに着く。ルディアは、ブランプールに次ぐパルーバ州第二の町であり、裁判所や役所等も存在するが、汽車の路線が二本交差するに過ぎない鄙びた所であるが、住人にとっては自慢の町である。列車がルディアの駅をでて河を渡り少し行くとジャングルに差し掛かるのであるが、ラシードによれば、そのジャングルはナワブの領地の一部なのである。そして、突然、列車が急ブレーキで停車する。近くの村から学校に通っている生徒たちが、村に列車が近づくと非常ブレーキを使って止め、さっさと下車し、周りのサトウキビ畑に隠れてしまののだという。あの年頃には皆手が付けられない。捕まえ、厳しい体罰を

加える以外にわからせる手立てがないのだとラシードは言う。

彼らは、サリンプールと言う小さな町で下車し、そこからは荷台付きの三輪車タクシーに乗りデコボコ道に揺られながら、デヴァリア村に向かう。その途中で、彼らは徒歩や牛車に乗った村人に出会う。村人は、ラシードと話しながら、じっとマーンを頭の上から足の先まで無作法に凝視する。マーンは、文明の世界から遠く離れ、よそ者を警戒し、字も読めず、電気も知らず、見知らぬ人を凝視することしかできない百姓たちの間で自分は何をしているのだろうと思う。(ASB, pp.543-548)

デヴァリア村のラシードの実家に着いた二人

村に着いた頃にはすっかり日が暮れていて真っ暗であった。ラシードの実家は、白漆喰塗りのレンガ造りの、それなりに大きな平屋建ての屋敷であった。ラシードの父親は、平屋の屋上から声を掛けて来た。もう一人、二十歳になるラシードより若い男が声を掛けてきたが、それは祖父の年を取ってからの子供でラシードの叔父にあたるネタジという饒舌な青年で、政治家志望の野心家であることが後に分かる。

父親が屋上の屋根にいたのには理由があった。酷暑の夏の夜、比較的涼しい屋上で寝るのは父親の特権であり、他の家族の男たちは、家の外で、簡易ベッドに毛布を掛けて寝るのである。そしてラシードの家の女性たちは、イスラム教の戒律に従い、家のなかに姿を隠し、男の目に触れないようにして、訪問者があっても外には出てこないのである。

マーンは、ラシードには妻と二人の小さな娘がいて、今は妻の実家に住んでいると聞き驚く。

二人は、野外ベッドに横たわりながら夜空の星を眺めるのだが、やがてフクロウが鳴く声が聞こえる。マーンは、フクロウが好きだと言うが、ラシードは、フクロウは不吉な鳥だと言い、古くからの言い伝えを語り始める。それは、10世紀の末から11世紀の初めにかけて今というイラン東部からアフガニスタン、パキスタンを征服したガズニの Mahmud of Ghazni とその「平和を愛する」首相の物語である。首相は、二羽のフクロウが息子と娘の縁談の話をしているという。似合いのカップルであったので、話はトントン拍子に進み、最も大事な娘の持参金の話になったと言う。婿の家は千の住民が逃げ出した村を望んだと首相は言う。 Mahmud は、「ではもう一方のフクロウはどう言っているのだ?」と尋ねる。すると首相は、「 Mahmud ・ガザニの最新の戦いの後、五千の村を差し出すことができると言っています」と答えたという。そんなフクロウの鳴き声を聞きながらマーンは眠りについたので。(ASB, P.548-551)

Mahmud は、そのような征服戦争の結果、ガズニというそれまでは鄙びた町を富に溢れる都に変えたのだという¹¹⁾。この地方には、そのような外部からの侵略者に苦しめられた歴史が存在していたのである。

祖父に起こされるマーン

翌朝マーンは、愛情深く、かつ厳しい声で誰かが朝の礼拝のために起床を促す声で目が覚める。すると屈強な体躯で、イスラムの預言者のように髭を生やし、胸をはだけ、緑色の綿のランギを肩にかけた老人が枕元に立っていた。マーンは、これはラシードから聞いていた祖父だと思った。礼拝を促す声には愛情と厳しさが強く滲みでていたので、マーンは自分がヒन्दゥー教徒だとは言い出せなかった。マーンが、やっとの思いで礼拝にはいきませんと言うと、祖父の表情には深く傷ついた表情が表れ、「ラシードは一体どういう類の人間を村に連れてきたのだ?」と言った。ラシードは、マーンはヒन्दゥー教徒だと説明し、財務大臣マヘシ・カプールの息子だと紹介した。それを聞くと老人は驚いた様子で、ラシードに何か聞いたそうであったが、結局その質問を飲み込み、「ヒन्दゥー教徒なのか!」と言った。(ASB, pp.547-552)

マーンは、デヴァリア村に出発する前に、この祖父や彼の家族についてラシードから色々話を聞いていた。ラシードは、小さい時に人を殴りつけたりする粗暴な所があったのだが、実は、それは人々の尊敬を集めていた祖父が、人を殴りつける姿をよく見かけていたため、人を殴ることが尊敬されるために必要な行為だと思ったからであった。それだけではない。祖父は、地主(ザミンダール)だったが、引退し、土地を子供たちに分割したため、今ではラシードの父親や叔父たちが地主で、ラシードも後を継ぐことを期待されているのだと言う。しかし、ラシードは、ザミンダリー制度を見ながら育ってきて、この制度が、地主以外の人々の惨めさの上に成り立っていることを知り、家族が言う地主の名誉とは、自分たちの欲望を満たすこと以外の何物でもないと思っているのだ。(ASB, pp. 363-364)

翌朝、用を足しに村の外に出て地域を案内するラシード

ラシードは、朝、水の入ったバケツを持って、野原に用を足しに行かないといけないと説明する。これが、まだ幾らか涼しくて、プライベートを持てる唯一の時なのであった。

ラシードは、周りに広がる広大な野原や池を見ながら、その多くが開発されていないのを見て「何ともったいないことだ」という。なだらかな丘の頂上に登るとその向こうに貯水池が見え、その横に白い建物が幾つか見えた。イスラム神学校だという。隣村にあるのだが、この村の子供たちもそこに通うのである。イスラム教について学ぶのかというマーンの質問に、ラシードは、小さな子供もいるので、色々なことを少しずつ学ぶのだと言う。ラシードは、自分が手に負えない生徒で先生を困らせ父親にもその報告が行ったと言う。しかし、教育水準そのものは高く、地元出身の高名な地質学者も居て、彼はこの学校を出たのだと言う。やがて二人は畑の畔が高くなった所にたどり着き、ラシードは、「この辺りならどこでもいい」と用を足す場所に着いたことを知らせ、地面にしゃがむ。マーンは、さりげない風を装い別の場所を探す。マーンは、用を足すごとにここに来て、又、家まで暑い中をもどらないといけないのかと思っ

た。(ASB, pp.552-554)

村を案内するラシード

ラシードは、マーンに村を案内する。ルディア地域の村は殆ど皆同じような造りになっている。土壁と茅葺の屋根の家々、そのなかにしばしば家畜も家族と一緒に住む。細い路地が入り組んでいて路地に面した窓はない。何世紀にも渡る征服と山賊行為が残した遺産である。村の有力者の住むレンガ造りの白漆喰の平屋の家がたまにある。牛や犬が路地をうろつき、ニームの木が内庭や村の井戸端から顔を出す。小さな白いイスラム教のモスクの低い光塔が村の中心部にあり、その近くには5軒のヒンドゥー教のブラーミンの家とバニア（商人）カーストが経営する商店がある。村で手動ポンプのついた井戸はラシードの家ともう一軒しかない。他の住民一四百の家族一は、三つしかない井戸から水を汲んでいる。一つは、ムスリムの井戸、これはニームの木の近くにある。もう一つは、ヒンドゥー教徒の井戸で、パイパルの木の近くにある。三つ目は、不可触民の井戸であり、村の端っこで土壁の小屋が立て込んだ所、皮剥ぎ場の近くに位置している。

地方の会議派の野心家の青年ネタジ

彼らは、穀物の炒り屋（grain-parcher）に向かっていたのだが、その途中でネタジと再び出くわす。ネタジは、サリンプールで開かれる夕食会に参加する途中で、その前に会議派の事務所に立ち寄り、ちょっとした用事を済ますのだという。

ネタジは、非常に精力的な野心家で、この辺りの政治を始め色々な事に手を染めていた為、殆どの人々が、（インドのイギリスからの独立の為、第二次大戦中に、日本軍の協力の下、シンガポールでインド国民軍を結成し、イギリスと闘った）スバス・チャンドラ・ボーズの愛称にちなみネタジと呼び、この青年の指導者気取りをからかったのであるが、最後には、彼の家族もそう呼ぶようになっていたのである。もっとも、彼自身は、このあだ名を好まなかった。(ASB, pp.564-565)

不可触民居住地区でカッチェルーの家を訪問するラシード

ラシードとマーンがトウモロコシを炒ってもらった頃にはもう夕暮れ時になっていた。雲が出て、空は夕焼けに燃えているようだった。彼らは、村の北の端っこに来ていた。夕方のお祈りの時間を知らせる声が聞こえたが、ラシードはモスクには行かず、村を最後まで一回りすることに決めていた。二人は、脱穀場を過ぎ、この地域ではチャーマー（Chamar）と呼ばれる不可触民の居住地区に着いた。

夕暮れのそよ風が、北の方から村の果てに位置する狭苦しい小屋が密集する処に吹いていた。

そこは洗濯屋、皮なめし屋、清掃屋、等を職業とする不可触民が住んでいた。だが、そよ風は、集落の土塀や狭苦しい路地に阻まれ、中心までは届かないのだ。家の外では数人の子供たちが遊んでいた。腹を空かし、痩せ細り、健康には見えなかった。

ラシードは、数軒のチャーマーの家を訪れる。死んだ動物の皮を剥ぎ、それを売るためになめす先祖伝来の職業を受け継いでいるチャーマーは、一家族しか残っておらず、殆どの家は農業労働者になっており、その中には、小さな自分の土地を耕しているものも一人か二人居た。マーンは、顔に深い皺のある男に見覚えがあった。ラシードの家に着いて水浴びをしたとき、水を井戸から喜んで汲んでくれた男だった。ラシードはその時、この男は10歳の時から家に仕えているカッチェルー (Kachheru) だと言った。

カッチェルーと妻は、二人きりで茅葺の一部屋しかない家に住んでいて、夜には家畜や昆虫と一緒に寝ていたのだ。

夫婦は、ラシードを極度の敬意、あるいは、畏敬の念を持って扱った。彼らが多少寛いだのは、ラシードがお茶を彼らと飲むことにした時のことであった。

ラシードは、ダラムバルの息子はどうなった—あなたの甥の—と聞くと、カッチェルーは「一月前に亡くなりました」と手短かに答えた。「あれだけ医者の手をかけたのに？」とラシードが聞くと、「役に立ちませんでした。お金がかさんただけで。おかげで私の義理の兄はパニアの男に借金をすることになりました。義理の妹は—あなたが顔を見てももう見分けがつかないでしょうが—実家に行きました。(田植えが始まる) モンスーンがやってくるまで、そこに居る予定です。

「お金が必要だったのなら、どうしてうちの家に頼らなかったのですか？」とラシードは困惑して聞いた。カッチェルーは、「それはお父様に聞いてください。兄は二度ほど行ったのですが、お父様は、お怒りになって、『ムダ金を使うな』、と言われたのです。でも、お父様は葬儀の費用を助けてくださいました」と答えた。

子に見捨てられた物乞いや、財産を兄弟から騙し取られ死期を待つ老人が居る村

その家を出た後、マーンは、ラシードが悩んでいるのが分かった。しばらくしてラシードは言った。「我々はこの世に細い糸によってかろうじて繋がれている。そして世の中にはひどいことが沢山ある。この村が悪い村だと思うかもしれないが、それはサガール村を知らないからだ。その可哀そうな男は、自分の家族に破滅させられ、自分の家で後は死ぬだけだ。あそこにいる老人と老婆を見るがいい」とラシードは、ボロを着て自分の小屋の前で物乞いをしている二人を指さした。「あれは、自分の子供たちに追い出されたのだ。子供たちはと言えば、それなりの暮らしをしているのだが、それぞれ他の子供に責任をなすりつけたり、誰の責任でもないと言ったりする」。「子供たちはどこで働いているのだ」とマーンは聞く。「僕の家だ」と

ラシードは答える。「そんなことをしてはいけない、と子供たちに言ってきかせないのか？それが、この家で働く条件だと」とマーンが言うと、ラシードは、「それは、村で尊敬を集めるわが父親と祖父に聞いてみないといけない質問だ。僕には答えられない」と苦々しい口調で言う。(ASB, pp.568-569)

ラシードの母方の叔父が語るラシードの生い立ち

次の日、マーンが庭のベッドに横たわりながらサイドに手紙を書こうとしていると、ラシードの母方の叔父で熊のような大男のマヌーとその友人がやって来る。やがて叔父は、ラシードについて話始める。叔父は、家族のなかで唯一ラシードに好意を持っている男である。ラシードが小さかった頃、体罰を受け、家出をした時には何度かこの叔父の処で世話になっていたのだ。

叔父によれば、ラシードは、学校では尖っていて、いつも喧嘩腰だった。バナレスの宗教学校に進学したときもそうだった。しかし、ブランプールに行くと以来変わった。真面目になったのだ。もしかしたら、それはバナレスで始まったのかも知れないが。しかし、ラシードは家族のものとは意見が合わずトラブルが起きる。あらゆることがおかしいとけちをつけるのだ。一度立ち止まり、周りの状況との関係で事態をよく考えようとはしないのだ。あんたは友達なんだから、一度、ラシードに話してやってくれと言う。(ASB, p.573)

ラシードの家に仕える不可触民農民のカッチェルーの労働と生活

その日の晩、村は激しい夏の嵐に襲われる。酷暑の時によく起きる嵐だ。外で寝ようとしていた人々も慌てて簡易ベッドや家畜を家のなかに入れるのだ。チャーマーのカッチェルーは、嵐の到来を正確に予期し、水牛を一部屋しかない家のなかに入れ、一安心する。彼の家の茅葺の屋根は他の家のほど貧弱ではないが、僅かに雨が漏るのを見て、「雨漏りも防げなくてお前に何の価値があるのだ」と妻に怒る。だが、妻は、「物乞いとその妻はどうしているだろう」と心配する。二人の家は、自分たちの家より低地にあるからだ。しかし、カッチェルーは、「俺たちとは関係ない」と切り捨て、こんな夜には、息子が生まれたときのことを思い出すとと言う。息子は、カルカッタに行ったまま音沙汰がないのだ。しかし、彼は明日の仕事のことが頭にあり、もう寝ようと言う。だが、嵐が断続的に吹き、雨漏りが続く。そこでカッチェルーは起き上がり、妻が葺いた屋根を直しに行く。外はひどい嵐である。不可触民の住む地域は村の北の端の低地にあるのだが、彼の家は、幸運なことには低地になる手前の比較的高い処にあり、朝までには、より低いところにある不可触民の家々は水浸しとなり汚物が集積しているだろうと思う。カッチェルーは、そこに住む人々のことが妻と同じように心配ではあったが、考えないようになっていたのだ。

次の日の朝、カッチェルーは、日の出前に起き、ラシードの家に向かう。外では不可触民の掃除人の女が、前日に個々の家から出されていたゴミを集めている。ラシードの家に着くが、まだ誰の姿も見えない。だが、夜明け前のお祈りをする習慣のあるラシードの祖父だけはもう起きているだろうと思う。

夏の乾季に雨が降った時は何時でも、その翌日や翌々日、主人の畑に行き、畑が水を含んでいるうちに牛を使って鋤で掘り返すことが彼の仕事になっていた。その為に早朝から家畜に餌をやり、牛に曳かせる鋤等の農具を準備し、いくつかの畑を朝から晩までかけて耕すのである。これは重労働であるが、それに賃金が支払われるわけではない。

カッチェルーは、ラシードの父親のチャーマーの一人で、父親の必要に応じ、いつでも、どんなことであろうと呼び出しに応じて役に立ってきた。他の他人とは違い、カッチェルーは、屋敷という聖域に出入りする特権を得ていた。特に、屋上に何かを引き上げることが必要な時などである。ラシードの兄が亡くなった後、男手が必要な際に手助けが必要となっていた。しかし、カッチェルーが家に呼ばれた時にはいつも、家の女たちは身を隠すしきりになっていた。

そうした労働に対する報酬としてカッチェルーは、地主の家から面倒を見てもらっていた。すなわち、収穫時に一定の穀物を与えられた。と言ってもカッチェルーとその妻が最低限必要な量には足りなかったが。又、カッチェルーは、小さな農地を耕す権利を与えられていた。もちろん、主人から家の用事を頼まれていない時にはあるが。また主人は牛や農具もカッチェルーに貸してやった。カッチェルーは、働きすぎであった。だが、彼がそれを知ったのは、気持ちというより、体の消耗が激しくなったからだ。子供の頃から40年にわたり、従順に、反抗も無礼な態度も見せず地主のために働いてきたために、彼は今や、他のチャーマーより丁重に扱われていた。家の者は、彼に仕事の指図はしたが、侮辱的な口調でどなったりはしなかった。彼は他のチャーマーたちのなかで飛び抜けた地位を与えられていて、農作業の繁忙期には、まとめ役を頼まれていた。

希望の無い村の生活を捨て、都会に出たまま便りの無い息子

しかしカッチェルーは、息子のティルー (Tirru) がデヴァリアから出て行きたい、カースト制度に苦しめられ、貧乏で、辛く、希望が無く、変わりようのない生活から抜け出したいと言ったとき、それに反対はしなかった。母親は、出て行って欲しくないと思願したが、父親の無言のサポートが母親を抑えた。

村に居ても息子にどんな未来があると言うのか？土地も、金も無く、なんの未来もなかったからだ。だが、そのために一家は大きな犠牲を払い、息子に公立の小学高を卒業させた。苦勞をして息子を学校にやったのは、灼熱の太陽の下、焼けるような畑で働かせ殺す為であったのか？自分の人生はどうであれ、それを息子にも味あわせることは望まなかったのだ。息子がブ

ランプール、カルカッタ、あるいはボンベイ等どこであれ望む処に行き、なんらかの仕事を見つけることを望んだのだ。

カルカッタに行った息子は、最初のうちはお金を送ってきたり、便りをヒンディー語で書いてきたりし、カッチェルーは、その手紙を郵便局員や商店主のバニアに頼んで読んでもらっていたが、そのうち手紙がこなくなり、出した手紙も返ってくるようになった。そしてある日、彼は息子を探すために地主の許しを得、旅費を借りて（これは底なしの借金地獄を意味した）カルカッタに行くといった。それを聞いて母親は、言いようもない恐怖に地面に倒れ伏した。カッチェルーは、サリンプールにさえめったにしか行かず、ルディアには行った事も無かった。ブランプール、ましてやカルカッタなど想像することもできなかった。母親はと言えば、自分の生まれた村と嫁ぎ先のこの村以外には足を延ばした事などなかったのだ。（ASB, pp.576-578）

地主の土地を耕すカッチェルー

早朝に畑に鋤を入れるのは決して不愉快な仕事ではなかった。涼しいし、二頭のよく訓練され従順な牛に鋤を引かせながら冷たい水と泥のなかに足首までつきながら歩くのは気持ち良かった。その作業を彼は鼻歌を歌いながら行うのだった。最初の畑は、彼自身が自分の為に耕す土地の二倍はあったのだが、すべてを鋤で耕したときには疲れて汗をかいていた。太陽が今や15度の角度で空に昇り、温かくなっていた。牛を休ませ、手の入っていない畑の様子を見に行き、自分の鋤で掘り返してみた。

朝が進むうち、彼は歌うのをやめた。二度ほど腹を立て、牛に棒を振るった。特に外側の牛が、言われたように円を描いて回り続けるかわりに、内側の牛が止まると同じように止まってしまった時だ。

カッチェルーは、今では一定のペースで注意深く自分と家畜の限られたエネルギーを使いながら作業を進めた。耐えがたいほど暑くなって汗が額から眉に流れ落ち目に入った。左手で鋤を持ちながら、時々右手の裏でそれを拭った。昼頃までには疲れ果てていた。牛を溝まで引いて行ったが、その水は生暖かった。自分は、牛の皮の水筒から井戸で汲んだ水を飲んだ。

日が最も高くなる頃、妻が畑に弁当を持ってやって来た。少しして、ラシードの父親がやってきて畑と畑の間の畔に座り込み、作業を見ながら、農作業ほど辛い仕事はない、等と励ましの言葉を掛ける。

今では畑の水さえも足元が不快に感じるほどに温かくなり始め、熱い風が吹くようになった。「休まなくては」と思いながらも、水があるうちに鋤を入れておくことの大切さを知っていたので、やるべきことをやらなかったと叱られるのがいやで、働き続ける。仕事が終わる頃には

彼の浅黒い顔は赤くやけ、足は茹で上げたようだった。普段、短い一日の仕事が終わった時など、彼は鋤を肩に背負って家路につくのであるが、今日は、その元気が無く、疲れ果てた牛にそれを引かせた。頭は朦朧として考えることができない。まだ鋤を入れていない自分の畑の横にさしかかっても、それに気づかないほどだ。そして、その小さな土地でさえ、自分のものではないのだ。だが、そう口に出したり、考えたりする気にもならない。ひたすら、一步一步、デヴァリア村への帰路を歩むことしか考えなかったのだ。村まではまだ一キロ以上あり、炎のなかを歩いているようだった。(ASB, pp.578-680)

屋上での親族会議—地主の息子として家を継げと言う父親

ラシードの父親の白漆喰塗りの屋敷は、デヴァリア村では一見堂々としたものではあったが、内部の部屋数はあまり多くはなかった。柱廊が四角形を成していて、中庭は空に抜けていた。四角の一辺を成す柱廊には、柱と柱の間にレンガで応急措置的に作られた極めて風通しの悪い三つの部屋しかなく、そこに家族が住んでいて、他に部屋は無かった。料理は、中庭の隅で行われ、他の柱廊の空間は物置に使われていた。中庭にはレモンの木やザクロの木があった。四角形の屋敷の裏側の側壁には女性用の屋外便所と小さな菜園があった。屋上に通じる階段があり、屋上では父親が家族会議を開いたり、パーンを噛んだりしたのである。そして今、ラシードはそこで開かれる家族会議に出ようとしていた。

家族以外のものは家に入ることが許されなかったが、ラシードの叔父たちは自由に出入りした。屋上会議は、長く留守にしていた家族が帰って来た時など、家族に関わる問題を解決する為に開かれるのであった。

この日の会議は、ラシードのためであったが、皆が集まるまでに、ラシードと父親の間ですでに口論が始まっていた。

屋上に上がりながらラシードは、二年前に亡くなった母親のことを思い出していた。ラシードにとって父親の再婚は考えられないことであった。だが、父親は、ラシードから10歳も年が離れていない女性と再婚し、欲望を満たしていたのだ。父親は、自分は何もせず、周りのものにあれこれ指図し、自分は朝から晩までパーンを噛んで歯と口を赤く染め、歯と口をダメにしていた。それでいて父親は、ラシードに腹立たしいことを言い、説教をするのだった。

悪ガキだった子供の時や思春期の時にはそうされても当然であったが、それ以後、落ち着き、大学で熱心に学ぶようになってからもラシードは、父親の不満のはけ口であった。そして父親のお気に入り、ラシードとも仲の良かった長男が3年前に列車事故で無くなって以来、二人の関係は、さらに悪くなっていた。

父親は、ラシードに、大学を卒業したら村に帰り、亡くなった兄にかわり土地を引き継ぐ義務があるというのだ。そしてブランプール大学に残りたかったら、自分の力でそうするのだと

宣言していた。父親にはラシードを経済的に支える財産は十分あったにもかかわらずだ。それに、父親には明らかに若い妻を娶る元気がまだあった。そして子供まで産ませようとしていた。晩年に子供を産ませるのは家族の伝統の一部になっていて、ネタジは、祖父が50台で産ませた息子だった。

だが、ラシードは、亡き母を忘れることができなかった。母は、ラシードや兄を愛し、また彼らも母を愛していたのだ。兄の死が、母親の死を早めたのは確かだ。そして、死ぬ前に母は、ラシードにある約束をさせていて、それは、ラシードが自由を味わう前に彼の人生を縛り付けていたのである。(ASB, pp.580-582)

ラシードの社会主義的思想を非難する父親と地主の欲得にまみれた利己主義を批判するラシード

屋上での家族会議は、父親とラシードのお互いへの兼ねてよりの不満を火種に激しく燃え上がる。

父親は、ラシードが夕方と夜のお祈りに顔もださず、昼間、不可触民の洗濯屋や掃除屋の家に顔をだし、その家の息子や甥の消息を尋ねたりしたことで、この村のものは皆、お前が共産主義者だという噂していると非難するのだ。

ラシードは、村の生活に特有の貧困と不公平さが我慢ならず、しかも、それを特に隠そうとも思っていなかったので、皮肉な口調で、「僕がしていることが間違っていると思わないで欲しい」と言った。すると父親は、「お前はブランプールに行ってから自信をつけたようだが、人の言うことをもっと聞くべきだ」と言う。ラシードは、「村の年寄りの言うことと言えば、できるだけってり早く金を儲けるべきだ、ということですね。周りの連中は、女と酒と食べ物への欲の為にしか生きていない」と言う。しかしラシードは、それ以上、父親に後で後悔するようなことは言うてはならないと自制し、一般的な言い方をする。「お父さん、僕は、人は他の人間の生活に責任があると思う。自分と自分の家族の為だけじゃなく」。

父親は、「しかし、まず自分の家族が第一だ」と言う。ラシードは、デヴァリアに何故自分は帰って来たのだらうと思いつつも、「僕が死んだ兄さんの嫁と結婚したのは家族を大切に作る為じゃないですか?」と答え、「僕は兄さんのかわりに僕が死ねば良かったと思っている」と言った。父親は、死んだ兄のことを考えた。ラシードの兄の方は、デヴァリアに住み、家族の土地の管理を喜んで助けてくれ、体も逞しく、地域のザミンダールの息子としての誇りを持ち、見るもの全てにケチをつけるのではなく、どこに行っても、こだわりのない善意を振りまくような人間だった。そして亡くなったラシードの母親のことを思い出した。そして優しい口調でラシードに言った。「改革とか社会主義とかのお前の計画をやめ、ここに住んで、家族のものを助けてくれないか」と。「ザミンダラー制度が廃止される一年か二年後にはこの土地がどうなるのか分かっているか? そうしたら、お前の計画を実現する為の土地は無くなって

しまうのだぞ」と言う。その口調には軽蔑の気持ちが滲みでていた。父親が言いたかったのは、ラシードがマーンを通じて財務大臣に働きかけるように、ということだった。ラシードは、カプールが原理原則の人であり、人脈を頼りにそれを曲げようとするような人間は決して許さず、まず、そんな人間の土地から取り上げると公言していると、父親の世界の論理からもわかりやすい論理で答えた。

小作人を犠牲に農地改革法を骨抜きにしようとする父親と、カッチェルーのことを考えるラシード

父親は、俺たちだって手をこまねいていたわけじゃないと、考えていることをラシードに話し出す。小作人の耕作地を次から次へと変えて行くと言うのだ。ザミンダーリー廃止法では、一定の年限小作人が特定の土地を耕作してきたことが証明できれば、小作人のその土地への耕作権が認定され、さらには、それを買い取ることも可能となるのだが、それを骨抜きにすると意味である。それを聞いてラシードが真っ先に考えたのはカッチェルーのマルベリーの木の植わった小さな土地のことであった。それを口に出すと父親は、「カッチェルーが何だ？」と怒りを露わにし、ラシードの口を封じ、「やつと思うようにはさせない。一人のチャーマーを例外扱いすると、皆、同じ扱いを要求してくる。家族は皆同じ考えだ」と言った。

ラシードが「でも彼の木が」と言いかけると父親は、「あいつの木だって？問題なのは、お前が大学でかぶれてきた共産主義の思想だ。奴は、その二本の木でも両脇にかかえさせて、土地から追い出してやる」と言った。

ラシードは、父親の言葉に一種の吐き気を覚え、気分がよくないと言い残し、階下に降りていった。

父親の言葉にひどいショックを受けたラシードは、何よりも恥ずかしいと思った。子供の頃から知っていて、自分を背中に背負ってくれ、井戸で水浴びをするときには手動ポンプの傍に立ってくれていて、畑を耕し、雑草を取り、収穫し、長年、家族に尽くしてくれ、今では年老いたカッチェルーを、畑から畑に移すとさりげなく言うなど考えられないことであった。カッチェルーは、15年の間耕してきた小さな土地に愛着を持っていて、改良を施していた。その畑に小さな水路を作り、大きな水路に接続し、畔道を整備していたのだ。マルベリーの木を木陰にし、その実を時折食べていた。この土地も厳密に言えば、古い制度の下では地主のものだ。しかし、その場合厳密に言えばとは、非人間的な意味ではと同義だ。そして近々実施される新しい制度の下では、5年以上、続けて小作人であった場合、その土地を耕作する権利を与えられるのである。

その晩、ラシードは眠つくことができず、家の外の狭い路地を出、村の北の端の荒野に向かって歩き始めた。夜は静まり返っており星明りに照らされ温かかった。窮屈な小屋のなかでは村で最も貧しい人々が寝入っていた。こんなことが許されてはならない、とラシードは呟いた。

(ASB, pp.582-587)

こうしてラシードは、ザミンダーリー制度廃止法が現実のものとなるの見越し、地主たちが、小作人を犠牲にして法を骨抜きにする方策を講じているのを知り、それを許してはならないと決意するのである。

村のパトワリを訪れるラシード

翌朝ラシードは、朝食の後、この決意を実行する為に村のパトワリを訪れる。パトワリは、州政府の村の役人であり、村の土地の所有者や耕作状態の記録を担当し、それを毎年更新しているのだ。村の地主は、平均して所有地の殆ど3分の1に上る土地を小作人に貸しており、ラシードの家の場合、小作地は殆ど3分の2に上っていた。ラシードは、パトワリの分厚い布の表紙のついた帳簿にはカッチェルーが継続的に小作人であった証拠が存在するはずだと確信していた。

パトワリは、ラシードが村をあちこち挨拶回りしていることを聞いていて、自分の処にも来てくれたことを喜んでいて。しかし、しばらく言葉を交わすうち、パトワリは、ラシードが単に社交的な意味で事務所にやってきたわけではないことに気が付いた。そしてそれを喜んだ。というのは、彼の政府からの給料は安く、非公式な形でそれを増やすことは広く認められていたからだ。そしてパトワリは、ラシードが、祖父に頼まれ、家族の土地所有の状況を調べにきたのだと思ったのだ。

パトワリは、倉庫から大きな台帳を持ち出し、中庭の台の上に置いた。ラシードは、彼の家のチャーマーのカッチェルーの畑を見たいと言った。すると役人はすぐにその畑の場所を指で示し、「心配ありません。ちゃんとしていますから」と言った。ラシードは「どういう意味だ？」という表情を浮かべた。パトワリは、自分の能力や勤勉さが疑われたのだと受け止め、別の作業用の台帳を広げた。それは土地を実地検分する際に使っているものだ。そこには畑がより詳細に記され、名前や数字やメモが黒と赤色のウルドゥー語で記されていた。役人は、作業用の台帳と正式の台帳を相互に見比べ、真剣でわずかに傷ついた表情で「自分の目で見てください」と言った。ラシードは、台帳を見たが、あまりに色々な数字や文章が記されていてわけがわからなかった。

すると役人は、この記録からは、その土地と、その周りの土地の耕作者は、ここ数年、貴方ということになっていますと言ったのだ。

「何だって？」とラシードは、役人の笑顔を見つめ、次に、役人が指さす場所を見つめながら言った。ラシードは、「一体、いつからこうなっているのだ？」と聞いた。

役人は、決してバカではなかったのだが、この段階でも何の疑念も抱かずに言った。

「農地改革法案が現実の脅威と成り、貴方の御爺様とお父様が最終の結果に懸念を表明され

て以来、あなたの召使は、ご家族の利益を精一杯お守りして来ました。ご家族の土地は、名目上ご家族の構成員に振り分けられ、ご家族は皆、私の記録上、所有者であり、耕作者であることになっています。これが最も安全な方法です。個人が大きな土地を持つと怪しまれます。勿論、ブランプルーで歴史学を学ばれている貴方には関心のないことでしょうが……。ラシードは、「僕にとっては大事なことだ。家の土地のどの程度が小作人に貸されていることになっている？」と聞く。パトワリは、「ゼロです」とさりげないジェスチャーで答えた。「だけど、家には物納小作人と金納小作人がいるのは誰でも知っているじゃないか？」とラシードが言うと、役人は、「雇用された使用人です」と答えた。「そして将来、彼らは畑から畑へと順番に移って行くのです」と言う。

するとラシードは、カッチェルーが耕してきた土地の名義が自分のものになっているのを確認した上で、それをカッチェルーの名義に直してくれと言った。今度は役人がショックを受ける番であった。役人は、ラシードの気がおかしくなったのかとその顔を見つめた。ラシードは、家族が議論を尽くした上で決めた事だと嘘をつき、カッチェルーがずっとこの土地の小作人であることを明確に記載するようにと指示し、軽蔑の表情を隠しながら、お金を幾らかパトワリに渡したのであった。

セスは、「神様のご加護がありますように」と二人の別れの挨拶でこの章を締めくくっているが、「実際、厄介事に首を突っ込んでしまったラシードには、神のご加護が必要であったろう。そしてそれは彼だけには留まらなかったのだ」と付け加えている。(ASB, pp. 586-590)

サリンプールの政治状況—野心家の会議派の青年と SDO

セスは、ここで物語の焦点を、ラシードの家の内紛からサリンプールの地方政治の世界に転じる。ここでは、若い野心的で、会議派の青年部に属し、政治の世界を金儲けや出世の手段として利用しようとする、ラシードの叔父のネタジや、清廉潔白で行政の論理に従い公明正大に行政を運営しようとする、州政府の地区担当官 SDO と大物地方政治家との対立等が描かれる。

夏の嵐の後、酷暑が訪れた頃、面白い人物が皆どこかへ去って行き、退屈していたマーンをネタジが、サリンプールに行こうと誘う。マーンは、ラシードから、ネタジが州政府の財務大臣の息子のマーンを利用しようとするから気をつけろと助言されるが、サリンプールまでのデコボコ道をハーレーダビッドソンに乗ったネタジにしがみ付きながら行くことになる。案の定、ネタジは、灯油販売の免許を取りたいので父親に話してくれと言う。所轄が違うという、そんなことは関係ないと言う。大物の政治家が持っているコネがあればなんでも出来ると思っているのだ。マーンには考えられないことだ。町に着くと、ネタジの知り合いの布地の販売を行っている店に立ち寄る。そこは地方の政治好きの連中の情報交換や政治談議の場なのだ。

地方での政治談議の話題—アガワールが扇動する宗派闘争への批判

最大の話題は、最近ブランプールで起きたムスリムとヒンドゥー教徒との宗教対立である。サリンプールのムスリムたちの憎しみは、内務大臣のアガワールに向けられていた。彼の噂は、ムスリムへの発砲事件の責任者とモスクの横にシバ神を祭る寺院を造る計画の強力な支持者としてこの土地にも伝わっていたのだ。アガワールが嫌われていたのとは対照的に、ヒンドゥー教徒ではあったがマヘシ・カプールは、その他の宗教への寛容な態度ゆえに好かれ、尊敬されていた。ラシードが、マーンに最初あったとき好意を持っていたのはそのためだったのだ。ラシードは、中央にネルー、州レベルで君の父親のような人間がいなかったらムスリムの状況はもっとひどくなっていただろうと言ったのだ。

SDO のサリンプール訪問—自分を売り込もうとするネタジ

ネタジは、州政府の地区担当官 (Subdivisional Officer) (以下 SDO) が、サリンプールを訪れていると言う噂を聞きつけていた。SDO とは、ルディアの行政長官のもとで州政府を代表し、管轄地区のなかを移動しつつ、情報収集、請願の聞き取り、政府の方針の実行等を行う行政執行官兼裁判官でもある。(この時代にはまだ二つの機能が分離されていなかったのだ¹²⁾)。ネタジは、SDO を町で見つけ、自分をザミンダールの息子で会議派の青年部に属すると自己紹介する。そしてマヘシ・カプールの息子マーンを紹介し、SDO とのコネを持とうとする。しかし、SDO は、マーンに英語で話しかけ始め、ネタジを会話から期せずして締め出す。マーンは、SDO からこの辺りのジャングルに人食いオオカミが出ているので、それを駆逐する為の狩りに誘われ、喜んで応じる。SDO の名前は、サンディーブ・ラヒリ (Sandeep Lahiri) という。

サンディーブ・ラヒリの大物政治家への嫌悪

サンディーブ・ラヒリは、マーンと二人で酒を飲みながら、彼が担当する地区の政治家が彼の仕事に干渉することへの嫌悪を隠さなかった。彼は地区の裁判官と行政官の機能を兼ね備えた官僚であり、人食い狼の出現、疫病の流行、大物の政治家の訪問等、彼が処理しないとけないことが頻発していた。奇妙なことに、面倒なのは地元選出の州議会議員よりも、この地域で生まれ、この地域を自分の領地のように考えている政治家だという。それは会議派の大物政治家で、州議会の議長を務め、第一首相シャーマの友人でもあるジャ (Jha) だ。ジャは、自分がラヒリの倍の年齢で、民衆の叡智を体現しているのだと、事あるごとに念を押すのである。ラヒリは、18カ月の任期の間、50万人の人々が住む地域を任せられ、地区の法と秩序を守り、住民の安寧を司り、住民の父であり、母である仕事の他に、徴税、犯罪事件を扱う。だから、デリーで6カ月の研修を受け、他の地域で6カ月間の実地訓練を終えたばかりの自分を見るた

びジャが癩に障るのは当然のことだと言う。貴方の親父さんの法案のお陰で、我々は仕事が増えることになるが、これは良いことだ、と少ししてラヒリは言った。だが、その声の調子には確信が欠けていた。

イギリス統治時代の高級官僚を範とするサンディーブ・ラヒリ

ニュースの時間になりラジオをかけるとインドの古典音楽を演奏するウスタッド・マジード・カーン (Ustad Majeed Khan) の歌声が流れているが、ラヒリは嫌な顔をする。彼の趣味は西洋のクラシック音楽なのだ。彼はBBCが聞けないとどうしてここで暮らしていけばよいのかわからないという。

セスが描いているのは、イギリス統治時代に「鉄の枠」(Iron Frame) と呼ばれ、外部からの圧力や金銭的誘惑に屈せず、公明正大に、行政の論理によってインドを統治したと言われるイギリス流の官僚機構 (ICS) の伝統を継承する若きエリート官僚なのである。(ASB, pp.671-675)

庶民にとっての封建領主・大地主としてのナワブ

その後マーンは、ナワブと二人の息子がバイター城に数日滞在すべく向かったという情報を得、喜び勇んで列車に飛び乗りバイター駅に向かう。ここでセスは、ブランプールのバイター屋敷でのナワブではなく、封建領主・大地主として城を構えるナワブの姿を示すとともに、庶民や小作人にとってのナワブや、ナワブの、謂わば、番頭役のムンシが、小作人を無慈悲に扱う姿を描いていて興味深い

マーンは、バイター駅を降りるとリックショーを雇、城に向かう。リックショー漕ぎは、「誰かに会うのかい？」と聞き、マーンが気さくに「ナワブにね」と答えると、その男はマーンのユーモアのセンスに思わず笑い出す。つまり、冗談だと思ったのだ。

ナワブの二面性—地域住民の権威の象徴であるが、小作人にとっては搾取者・抑圧者

ナワブの先祖が建てたという立派な病院や狩りの為の宿の前を抜けると、巨大な淡い黄色の建物が小さな丘の上にそびえている姿が目に入った。その麓には漆喰塗りの家々がゴタゴタと集まっている。マーンは、その城の巨大さと荘重さに圧倒され、見上げる。リックショー漕ぎは、ザミンダーリー制度が廃止されるとネルー先生は、あれを貧しい民に与えようと思っているのだと言う。それは事実ではないのだが、マーンは聞き流し、「この辺りでナワブは人気があるのかい？」と聞いて見る。「人気があるかだって？ナワブは、太陽と月とを合わせたようなものさ。それにナワブの二人の息子もね。ナワブがお城の上に、二人の息子を両脇に従えて立つと、まるで高官を従えたインド総督みたいなもんだ」と言う。そこでマーンは、「ナワブ

にそんなに人気があるのなら、何故、農民はナワブの土地を欲しがらぬのだ？」と聞く。すると男は、「何が悪い？俺の村の家族は、父親の叔父の世代からずっとナワブの土地を耕してきたが、いまだにナワブの旦那に一吸血鬼のようなムンシに一地代を払わないといけぬ。なんで俺たちは地代を払わないといけぬんだ。俺たちは汗水垂らして50年間も水を畑にやってきた。もう俺たちのものになってもいいはずだ」と言う。

つまり、ナワブは、地域における権勢と威光の象徴として庶民にとっては雲の上の人であるとともに、小作人に対しては、血も涙もない搾取者であるという二つの顔を持った存在なのだ。

大きな門の前に着くと、男はマーンに通常二倍の料金を要求し、マーンと言ひ争ひになりかけるが、マーンは男を可哀そうに思い、それに少し上乗せして払ってやる。男は、マーンがやはり少し頭がおかしいと思ひ、もしかしたら本当にナワブに会えると思ひているのかも知れない、可哀そうに、と思ひながら立ち去っていった。

権力に卑屈で、相手によって態度を変えるムンシ

マーンが、門番にナワブに会いたいと言うと、門番は、それをムンシに伝え、ムンシは彼を追い返せと指示する。しかし、マーンが紙切れに何か英語で書き、これを直接ナワブか息子に渡してくれと言うと門番は、マーンが英語で何か書いたのを見て、マーンを城の中庭に連れて行きムンシに会わせる。マーンは、フィローズの友人だと言ひ、部屋を用意すると言ひすが、ムンシは、警戒し、マーンの言ひことを信じようとしない。業を煮やしたマーンが、自分はマヘシ・カプールの息子で、父親はナワブの古くからの友人でもあると言ひると、途端に態度を変え、恭しく部屋に案内する。(ASB, pp.685-690)

召使のワリスが語るムンシの実像

部屋に案内されシャワーを浴びたマーンを連れて城を案内したのは、ワリスという20代後半のタフで自信に満ちた若い男であった。ワリスは、ナワブとその息子たち、特にフィローズに忠誠心を持っていた。城は壮大で限りなく広く、やっとの思ひで屋上に上ると、そこから広大な田舎の景色が広がっていて、夕暮れ時であったので家々の煙突からの煙が霧のように立ち込めていた。ナワブの城には、個人所有のものとしてはインド最大と言われる二階建ての図書館があり、ナワブがここに滞在するときには殆どの時間をここで過ごすのであった。そして地所の仕事は全てムンシに任せていると言ひ。ワリスは、ムンシを呼ぶのに「糞野郎」と言ひ言葉頻りに使ったのだが、これは田舎の人々の日常使う言葉の習慣であり、畏れ多いナワブ自身に話す場合以外には「糞野郎」が頻りに使われるのであった。

マーンは、ムンシの何が問題なのかを聞いた。ワリスは、「奴は泥棒だ！」とぶっきらぼうに答える。ムンシがナワブの財産を盗んでいるのは周知の事実であった。売った農産物の値を

低めに見積もり、自分が買った商品の値を高くし、何もしていないのに費用が掛かったと主張し、小作人からの地代の支払いが滞っていないのに、遅れているかのように記録する。それだけじゃない。ムンシは権力を笠に着て人々を虐める。そして奴はカヤスタ (Kayastha) だという。これはヒンドゥー教徒ではあるが、イスラムの宮殿で書記や秘書として幾世紀もの間仕えてきたカーストであり、ムスリム以上に優れたペルシャ語やウルドゥー語を書いたという人々である。ムンシの父親は Nawab の父親の時代にもムンシであり、Nawab が何も知らぬ間に盗みをしようとした。ただ、Nawab の父親はそれを知っていたのだ。だが、今の Nawab は、人が好過ぎるので、ムンシを叱責してもムンシは数分間這いつくばり、許しを請い、その後は、以前と変わりなく盗みを続けるのだと言う。

政治に野心を示すワリス

マーンは「君はどうなんだ？ 信心深い人間か？」と聞く。するとワリスは、驚いて「いいえ」と答え、「私がより興味を持っているのは政治です」と言い、ある男のことを話だす。その男は、Nawab の世話になったにも関わらず、この城は、所有者がパキスタンに去り放棄された地所になっており、Nawab はパキスタン人だと虚偽の訴えをし、Nawab に迷惑をかけていると言う。そして、この男は会議派であり、今度の選挙でこの選挙区から立候補しようとしていて、もし州議会議員に成れば我々にはやっかいなことになると言う。Nawab が無所属で立候補するか、俺に Nawab の立場を代弁させてくれれば、あの男をやっつけてやるのだがと言い、マーンの信用を取り付ける。(ASB, pp.685-689)

壁に掛けられた Nawab の先祖の肖像画

食事時になりマーンが食堂に降りて行くと、その壁には家族の肖像画が掛かっている。そのうちの 하나가、馬上で剣を構え、兜の上には緑の大羽を立てた颯爽とした檜祖父の姿を描いたものである。この檜祖父は、大反乱 (1857 年) の時に、サリンプールでのイギリス軍との戦闘で戦死したのである。もう一枚は、イギリスによって財産の継承を許された、その息子のものであり、彼は、より学問的、慈善的なことに生きがいを見出したのだ。彼は、馬に乗るのではなく、地面に立っており、Nawab の正装に身を包み、その瞳には落ち着きと瞑想的な佇まいがあった。反対側の壁にはヴィクトリア女王とエドワード 7 世の肖像が掛けてあり、檜祖父と祖父の画と対照を成していた。(ASB, pp.690-695)

小作人の息子を庇う老婆を虐待するムンシ

次の日、ワリスに町を案内された後、城に帰ったマーンとワリスは、ムスリムの老婆がムンシの前に跪き、息子を許してくれと嘆願する処を戸口の影から盗み聞きする。老婆の息子は、

ナワブの土地の小作人である事実を登記所に記録しにいったことが発覚し、ナワブの土地を盗む行為だとして叩きのめされていたのである。老婆は言う。「でも、息子が土地を耕していたことは本当です」。それが癪に障り、ムンシは、今や、この老婆を踵で押しつぶす喜びに駆られ、「お前には小屋があるじゃないか。穀物を煎るか、お前の萎びた体でも売ればいいじゃないか。息子には、誰か他の土地でも耕すように言え」と言う。

その女は、「あなたには人間の血が流れていないのか？あなたの行いが判断される日がやって来て、その時には神様が・・・」と泣いて訴える。それを聞いて怒ったムンシは、一家にその夜のうちに出行けと命じようとするが、次の瞬間、口をパクパクさせ言い終わることが出来ない。怒りで顔面蒼白のマーンが、殺してやると言わんばかりの形相で彼に向かって真っすぐ歩いてくる姿が目に入ったからである。ムンシは、マーンの足元にひれ伏し、卑屈に許しを請う。土地は温情深く、苦痛を伴わず経営できると楽観したいナワブが、ムンシの老婆への脅迫を耳にしたならば自分はどうなるだろう、と恐れおののいたのだ。マーンはただちに砦を去り、駅に向かう。(ASB, pp.695-697)

ラシードの結婚の真相

マーンが、バイターの城を訪問している間、実家の村に居る妻と娘たちを迎えに行ったラシードは、4歳になる娘メーハー (Meher) に「何を勉強した？」と話かける。そして娘のウルドゥー語の書体の学習が、自分が居ない間に退化していることに気づく。

ラシードは、妻とメーハーを連れてバスに乗り、駅に着くが、列車が予定よりほんの少ししか遅れていないことを知り、がっかりする。実は、3年前、ラシードの兄が列車の車輪に巻き込まれ死んだのはこの駅で、ラシードは、遅れを利用し、駅からリクシャーで30分ばかりの兄の墓を墓参しようと思っていたのだ。列車を待つうち、妻が泣き始める。彼女も同じことを考えていたのだ。妻は亡くなった彼の兄の妻で、メーハーは、その子供だった。亡くなったラシードの母は、その死に際に、義理の娘が未亡人になり、孫が父なき子になることに耐えられず、ラシードに、未亡人となった妻と結婚し、面倒を見るように頼み、ラシードは、それを受け入れたのであった。(ASB, pp.697-702)

タズニームの手紙が引き起こしたラシードの葛藤

ラシードがデヴァリア村に帰ると、タズニームからの手紙が届いていた。その手紙は、逡巡の末、サイーダには黙って書き、召使の女に頼んで出したものであり、アラビア語の先生であるラシードに、アラビア語やコーランの学習の進捗状況や身辺の状況を報告したものであった。彼女は、ラシードがアラビア語文法や書体の誤りを見逃さず厳しく指導し、彼女の努力を鼓舞するやり方が気に入っていて、ラシードが去った後も努力を重ねていることや、再び、ラシード

ドに教えてもらいたいと告げていた。ラシードは、彼女の手紙のアラビア語から、彼女の努力の跡を見ることができた。その手紙には、サイーダに黙って出されたという点とは別に、ラシードの心を悩ますものがあり、我知らず、メーハーの母親のことを考えていた。妻は、気立てが良く、美しい女性であったが、可哀そうに、自分の名前さえ殆ど書けなかったのだ。そして、もし自分に選ぶことができたなら、人生のパートナーとして彼女のような女性を選んだらどうかとふと考えたのだ。(ASB, pp.702-704)

駅での出来事と、タズニームからの手紙は、図らずも、ラシードの心の無意識の葛藤を彼に意識させることになる。すなわち、兄の死後、その妻を守るという母から課せられた義務や妻への同情心から結婚したことと、本来、タズニームのように教育を受けた女性を人生の伴侶としたいという密かな願望との矛盾を彼に意識させることになる。そしてそれが、後に、憔悴し、錯乱したラシードが、タズニームに求愛の手紙を書き、妻には離婚してくれと手紙を書くかと思えば、逆に、自分をタズニームと結婚させようとする策謀があると思ひ込む、矛盾した行動につながって行くのだ。

ラシードを苦しめる村の現実

ラシードは隣村のサガール (Sagal) の老人を訪れる途中で、ため池で泳いでいるマーンを見つけ、二人は話し込むが、やがて話題はラシードが村の現実に抱いている思いにたどり着く。

神を信じず、天国はこの地上にあるという楽天的なマーンに対し、ラシードは、この地上が天国とはとうてい思えないと言う。少なくともブランプールもデヴァリアも、ましてや殆どの人が字もかけない妻の住む村はそうだとする。暗い顔をするラシードを見てマーンが、自分の楽天的な言葉に気を悪くしたのかと気遣うと、ラシードは、義理の娘のメーハーの教育について話し始める。娘は頭のいい子だが、娘の母親が住む村にはデヴァリア村の神学校のような学校がないのだという。だから彼がなんとかしてやらないと何も知らないまま大人になるのだ。ここに居るときは教えてやれるが、ブランプールに数カ月帰っていると、村の環境が支配してしまうのだと言う。(ASB, p.705)

ラシードと父親との価値観の対立

ラシードの苦悩の大きな原因の一つは、父親との価値観の違いにもあった。ラシードの母親は、女性としては教育もあり、ラシードと兄を愛し、ラシードが教育をつけ、それで身を立て、この土地を変えたいという願いを理解してくれた唯一の人間であった。マーンは、ラシードが「この土地」と言った時の苦々しい調子に驚いた。そしてラシードは、「母を愛したために、僕はこの土地に厄介な形で縛り付けられてしまった」と言った。そのような母親とは違い、父親は、財産と金以外の事には関心がなかった。祖父は、信心深かったが色々な物事への理解力が

あった。しかし父親は、ラシードが崇拜するもの全てを軽蔑した。そして父親の再婚以来、家の事情は益々悪化したと言う。

ラシードは父親が体現する生き方を、この村全体に、そして歴史にまで拡大する。世の中や歴史を見れば分かるが、何にも変わらない。老人が自分の権力や信じることにしがみ付き、自分たちの最悪の悪徳は認めつつ、若者のちょっとした欠陥を排除し、僅かでも改革しようとするそれを握りつぶすのだと言う。(ASB, pp.706-707)

ラシードが批判するのは、停滞し、時代の変化から立ち遅れた村の現実を変えようとする人間を叩き潰す農村部の閉塞性である。そして、手のつけられない乱暴者だった自分がバナラスの宗教学校で変わった物語をする。

バナラス神学校で改革者となったラシード

それは有名な学校で高い学問水準を誇っていた。だから小学校で成績が悪かったラシードを最初は受け入れてくれなかったが、一年以内に60人いる学年で3番目の成績に上り詰め、人を殴ったりすることも無くなった。

とはいえ学校のなかで学生たちは酷い生活を強いられていた。そこでラシードは、学校での学生への酷い扱いに対する抗議行動を組織するようになった。彼が、改革ということを考え始めたのはその経験からだ。小学校時代の知り合いは、ラシードが潔癖な改革者になったことに驚いていた。そのうちの一人は強盗団に入り、彼が村の改革を口にし始めると、彼らは皆、彼の頭がおかしくなったと考えた。村は改革を必要としていて、そして改革は可能だということは神もご存じだ。しかし、いくら人々がお祈りの儀式をしたところで、神様はその気にはなってくれないだろう。マーンは、そんな調子で神について語るラシードに驚く。(ASB, pp.707-709)

兄弟の強欲さの犠牲者となった善良な老人の物語

長いマーンとの会話の後、ラシードは、立ち上がり、サガール村のある老人を訪問するという。そして道すがら、その老人の悲惨な人生について語り始める。それは裕福な家に生まれながらも、強欲で腹黒い兄弟達に財産を奪われ、病に倒れ、寝たきりとなり、二人の娘に下の世話をしてもらいながら死を待つばかりの生活を送っているある老人の物語である。彼の腹黒い兄弟たちが財産と子供に恵まれているのに対し、何も悪いことをしなかった老人は、惨めな状況にあると言う。

彼らは、家の近くの路地で、立派な身なりの一人の男とすれ違う。それは老人の兄弟の一人で、家族の財産の老人の取り分を盗んだ一人で、この村の指導者の一人、そしてモスクでイマムの留守の折にはその代理を務める男だ。ラシードは、挨拶をすることさえ不愉快な男だと言

う。

老人の家は、二室からなる茅葺で、今にもくずれそうなその家のポーチには、無精ひげを生やし、頬がこけ、やせ細り、あばら骨がむき出しになり、その手は捻じれた爪のように曲がり、ひよろ長い足の骨は内側に捻じれている老人が簡易ベッドに横になっていた。一見、90歳の死を前にした老人のように見えるが、その声はハッキリしていて、誰かが近づいてきたのが目に入ると「誰だ?」と言った。ラシードがマーンを良家の息子だと紹介し、マーンが老人の質問に答えていると、ラシードがちょっとあの壁の方を向いてくれないかと言う。理由も聞かずにそうし、もういいと言われる前に振り替えると、黄色いサリーを身に着けた美しく肌の白い女性が、柱の裏に身を隠すのが目に入った。腕には子供を抱えている。老人の下の娘だとラシードは言った。「綺麗な人だな」とマーンが言うと、ラシードはその目つきで彼を黙らせた。娘によると、医師はこれ以上の治療を拒否し、娘の夫は老人の願うことだけ満たしてやるようにと指示したという。

すると突然、老人がマーンに自分のことを話し始める。「私は、22年間病気で、12年間は、体が動かなくなり寝たきりです。神に召されたほうがましです。6人の子供があり、娘も6人いましたがマーンは12人の子供の数え方に驚いた一二人しか残っていません。妻は3年前に亡くなりました。決して病気になってはいけません。これは最悪の運命だ。」と食事から下の世話まで庭先の簡易ベッドの上で済ます生活について語り、「神様はどうしてこんな目にわたしを会わされるのでしょうか?」と言う。

老人は、娘を指しながら、ラシードに「娘の母親は、お前の父親が病気のとき面倒を見たが、若い妻をもらって以来、今では顔もださない。来るのはお前だけだ」と言う。老人は、「別に非難しているわけではない」と言うが、ラシードは、「それはよくないことだ」と言う。老人はラシードに「お前はいい人間だ」と言うが、ラシードは、「いい人だという肩書をサガールで得るのは簡単なことだ」と言う。老人はクスクスと笑い、最後に、「そうだな」と言った。老人の娘は、「貴方のお陰で人を再び信じる事が出来ました」と礼儀正しさのなかに優しさを込めて言った。しかしマーンは、ラシードが、庭を出て行きしなに、「いい人のはずの人々が貴方にしたことを見ていると神様が信じられなくなる」と眩くのを耳にした。(ASB, pp.709-712)

モスク前の広場でのラシードと老人の兄弟たちとの言い争い

二人は、サガール村の端にあるモスクの前の小さな広場を通りがかる。そこには、10人ばかりの髭をはやした村の長老たちが立ち話をしていたが、ラシードは、その中の3人が老人の兄弟であることに気づく。その三人は、ラシードへの反感を露わにし、ラシードが、お祈りにやってこなかったことをなじったが、その本心は、ラシードが若く、町にでて教育を受けたこ

とに嫉妬し、彼の共産主義に脅威を感じ、そして何よりも、彼らの恥ずべき人生の根源である老人と親身に話していたことに腹を立てていたのだ。こうした険悪な雰囲気の中で長老たちは、ラシードの信仰心の欠如を批判し、ラシードは、お祈りには時間通り顔を出している連中の偽善的な生き方を批判する。しかしラシードは、彼らがいかに反動的で偽善的で嫉妬深い連中であろうと、自分より年長者であることに気づき、また、こんな場面を見てマーンが自分の宗教をどう思うだろうかと思いついてその場を去る。(ASB, pp.712-735)

このようにしてラシードは、欲に溺れ、兄弟の財産を奪うような人々が隣村の指導者であり、イマムの代理も務め、礼拝に出なかったことで自分を批判するという理不尽な現実を怒りを覚え、同時に、神への懐疑心を強めるのである。だが、ラシードへの村の反感はそれには留まらなかった。

家族会議で非難され、孤立無援のラシード

翌日の夕方のお祈りの直後、ラシードは、突然、屋上での家族会議に呼び出される。そこにいたのは祖父、父親、ネタジ、マムー、そしてモスクのイマムであった。

ラシードの挨拶に心から挨拶を返したのは叔父のマムーだけであった。そしてマムーは居心地が悪そうだった。デバリア村のモスクのイマムは、善人であり、村のもう一軒の大地主の家の長老であった。イマムは、普段、ラシードに温かい挨拶を返すのであったが、ここ数日、距離を置いているのをラシードは、感じていた。

実は、パトワリが、ラシードから受けた指示を変に思い、誰のお陰で潤っているのかを心得ていたので、ラシードがモスクの礼拝に行き、父親が家にいる午後のお祈りの時間にやって来て、ラシードが何をしたのかを知らせたのだ。怒りを露わにする父親に続き、祖父は、ラシードに言う。「この土地は、お前が勝手に人にやったり自分のものにしたたりできるものじゃない。パトワリにはお前の指示を取り消すように言っている。どうしてこんなことができるのか？子供の頃からわたしはお前を信用してきた。お前は直な子ではなかったが、卑劣なことをするようなやつじゃなかったのに」。ラシードの父親は、「この土地はもうお前の名義にはなっていない。そして役人が記帳したことは、最高裁も容易に取り消すことはできないのだ」と言う。「この土地ではお前の共産主義的な計画は通用しない。この人間は、ブランプール大学の頭の良い学生のように、理論や理想に動かされること等ないのだ」と言う。

これを聞いてラシードの瞳は怒りと反感を露わにした。「そんなに簡単に僕の財産を奪うことなどできない。イスラム法は、明確に・・・」とラシードはイマムの方を見て、自分の言うことの実証を求めた。すると父親は、「宗教学校で勉強したことも利用したと言うわけだな。いいか、お前は遺産相続法のことを言っているようだが、爺さんと俺が墓に入るまでたい日間で、お前は財産を勝手に処分などできないのだ。」と厳しい口調で言った。

イマムは、深くショックを受けた様子で「どうして家族に隠れてそんなことをしたのだ。お屋敷の人間が適切に振舞ってこそ村の秩序は保たれるのを知っているはずじゃないか？」とラシードを諫めた。

「適切にだって？何て偽善的な冗談だ！確かに、奴隷のように永年耕してきた土地から小作人を引き離すことは、地主の利益の為には適切なのだ。」とラシードは心のうちで思った。

ラシードが、マヌーに助けを求めると、それを先回りして父親が言う。「家の土地のある部分はマヌーの妹（ラシードの母）の持参金で買ったものだ。祖先が何世代にも渡って開発し、耕作し広げてきた土地をそう簡単に手放せると思うか？今年は雨が遅くてすでにやっかいなことになっているのに、それに付け加えイナゴの大群に襲われたら大変だ。一人のチャーマーに土地をやると・・・。」と小作人をイナゴに例え、ラシードの行為がもたらす他の小作人への影響を懸念する。

こうして父親とラシードとの間の刺々しい口論が始まるが、再び祖父が声を上げ、ラシードも自制する。父親は、「お前は妻や二人の子供のことを考えたことがあるのか？」と言う。そして祖父は、「カッチェルーのこともだ」と言う。ラシードは、「カッチェルーは、何も知らない」と弁護するが、祖父はため息をつき、「このことはいずれ村の噂になる。パトワリは、この問題を自分に都合のよいように喋るだろう。狡猾な男だからな。そして、これが明るみに出たら、カッチェルーがお前をそそのかしたと思う人間が沢山でてくる。そうなったら俺たちは、カッチェルーを見せしめにしなくてはならない。お前は、カッチェルーの立場を悪くしてしまったのだぞ。」と言う。

父親は、祖父とラシードのやり取りに割って入り、「そんなこともお前は考えずにやったのだぞ。これまでだったら、畑から畑に移るだけで、俺たちの家の家畜や作業道具を使うこともできた。俺たちのチャーマーにひどいことをしたのはお前なんだぞ。」と言う。それを聞いてラシードは、両手で顔を覆った。マヌーは、「まだ何も決まったわけじゃない。」と慰める。

父親は、「他人を非難するかわりに自分の行いを振り返って見ろ。俺たちは、まだお前から謝罪の言葉を聞いていない。叔父さんとイマムが居たからお前への罰はまだ寛大なものになったのだ。お前はまだ、好きなときに、ここに住むことができる。土地の幾分かも、お前の態度次第でお前の名義に戻すこともできる。しかし、もしお前がこの家を信頼しなくなったら、この家の門はお前に閉じられることになる。俺は、息子を失っても構わない。すでに息子を一人失ったのだから。妻と子供のことを考えろ。俺たちはまだ、カッチェルーの処分について議論しなくちゃならない」。ラシードは、周りを見回すが、同情の気配は見られたものの、ラシードを支持するものは誰もいなかった。ラシードはその場を辞し、心配げに彼を見つめる妻に、夕食はいらないといい、サイーダからの手紙を訳してもらおう為に待っていたマーンに「後で」と言い残し、家の外を北の方に歩いて行くのだった。(ASB, pp.735-743)

こうしてラシードは、社会主義的信念に基づく行為により、自分の家族、親戚、地域社会のなかで孤立無援となり、さらに、助けようとした当の小作人の立場も一層悪化させてしまったのである。

Ⅲ ザミンダーリー制度廃止法の合憲性を巡る高等裁判所の審理

高等裁判所での審理—三権分立の下での司法権の独立性と新たな憲法解釈の試み

他方、プランプールでは、州議会で可決されたザミンダーリー制度廃止法を憲法違反だとする訴えが、地主勢力によって高等裁判所になされておき、その合憲性を巡る裁判が開始される。

ここでセスは、ザミンダーリー制度の歴史的功罪を巡る州議会での政治的・社会的・文化的観点からの議論とはまったく異なった、憲法論の観点からの法的議論が、独立したばかりのインドにおいて高度なレベルにおいて、マスコミの注視の下、公開の場で展開される姿を読者に提示するのである。それは、三権分立という民主主義国家の大原則が、独立当初の時期からインドにおいて機能していたことを示すと同時に、それを可能とする法律分野のインド人法学家が独立前からすでにならぬ程度において存在したことを示している。

これは、現在のインドにおいて、アルンダーティ・ロイのような国家権力を真っ向から批判する知識人が自由に言論を行使し得ているというある意味、驚くべき状況を説明するものでもあり、あらゆる問題点にもかかわらず、民主主義国家インドが誇るべき点であろう。セスは、そのような独立国家インドの成り立ちをこの小説で描いているのである。

さらに、インド憲法は、それまでのイギリスの慣習法ではなく、アメリカ合衆国と同様の成文憲法として成立したことが、裁判での法律論の展開に大きな影響を及ぼしていることも描かれ、興味深いのである。

普通の案件であれば一人か二人の裁判官が担当するのであるが、この件については異例の5人の裁判官が担当している。その5人は、一人のイギリス人判事以外は、全員インド人判事からなり、主任判事は、インド人である。

そしてナワブは、傍聴席の最前列に陣取って傍聴する。そして、彼の息子のフィローズも、弁護団の一員としてこの裁判に関わっている。この裁判には、主な訴状に加え、20数件の申立書が提出されており、それらは土地にからむものであるが、ザミンダーリー制度とは多少違う要素を持っている案件であり、宗教団体、イギリス国王に直接土地を与えられた地主、マー藩王のように、イギリス統治前の統治者から土地を与えられた地主等が申告したものが含まれ、フィローズはそのうちの二つに関わっていたのだ。

ここでは、本筋のザミンダーリー制度廃止法を巡る議論に絞り、紹介して行こう。

ベナジーの冒頭弁論

原告の主任弁護士として最初に発言するのは、カルカッタから呼ばれた著名な弁護士ベナジー (G.N. Bennerji) である。70 歳を超える年齢ではあるが未だにかくしゃくとしており、若い恋人を持つ元気もある。

ベナジーは、まず、アショカ王朝の時代からイギリス統治の時代を経て、これに勝る重要な訴訟はかつてパルーバ州ではなかったであろうと言う。何故なら、州政府は、この州の生活様式全体の変革をこの法により目指しているからである。しかしその法は、この国の憲法に違反しており、無効なのである、無効なのだと言う。

州政府の法務長官のシャストリ (Shastri) は、ベナジーの演説を聞きながら平然として微笑を浮かべた。彼は、ベナジーが関わった訴訟に関与したことがあり、重要な点を、パラグラフの最初と最後で繰り返すのがベナジーの癖なのを知っていたからだ。そして、ベナジーは、この繰り返しの重要性を、彼が率いる年若い弁護士たちにも強調していた。ベナジーは、裁判官たちは弁護士とは違い、当該の訴訟事件について熟知しているわけではなく、とりわけ、発布されてまだ一年にしかならない憲法について、あまり知らない裁判官もいるのだと強調していた。ベナジーが念頭に置いていたのは、裁判官の一人であり、彼は、その裁判官を馬鹿だと思っていたのだ。

ベナジーは、ザミンダーリー制度廃止法は、第一に、厳密な、あるいは適切な意味で、「公的な目的」を持っているとは言えないと主張する。そして「公的な目的」は、憲法 31 条第二項に規定する「私有財産の公権力による接取」に関わるいかなる法にも必要な要件なのだと述べる。しかし、ベナジーは、ここではこの点について、さらに詳しく述べるのではなく、違憲性の第二の根拠に移る。すなわち、ザミンダーリー制度廃止法による地主への補償額があまりに少なく、憲法への詐欺行為であると主張し、さらに、提供される補償額が大きな地主と小さな地主の間で差別があり、それ故、第 14 条の「法の下での平等な保護」に反すると主張。また、ザミンダーリー制度廃止法は、全ての市民は「財産を取得、保持、処分する」権利を持つと規定している 18 条 (1) の (F) 項に反するからと主張。第三に、地所に対する実際の接取命令の発令の際、州政府の下級職員に膨大な自由裁量の余地を与えていることにより、州議会は、別の機関に違法にその権限を委託しているからだと言主張する等、一時間以上に渡り法の様々な弱点を攻撃したのである。

するとそこで、5 人の裁判官のうちただ一人のイギリス人の裁判官が、「権限委譲の問題を最初に扱う特別な理由でもあるのですか？」と言う。「と言いますと？」とベナジーが説明を求めると、「貴方は、ザミンダーリー制度廃止法は憲法の特定の条項に違反すると言われるが、違反するという直接の根拠・理由を最初に論じられたらどうですか？ 権限移譲そのものを禁止するのは憲法には何もありません。立法府の権限は、自らの領域の全てに及ぶのであり、立

法府は、憲法に反しない限り、権限を誰であれ好きに移譲できるのですと言う。それに対しベナジーは、「裁判長殿、私には私のやり方がありますので・・・」と自分の流儀を強調しようとする。

裁判官は60歳定年なので、70歳を超えたベナジーより10歳以上若い裁判官ばかりだったのだ。裁判官は「どうぞお好きなように」と発言を撤回する。

立法府の権限移譲の是非

ベナジーは、続けて「パルーバ州の立法府が行政府に移譲した権限は、自らの権限の放棄であり、明らかに憲法と数々の判例、一番新しい所では、ジャティンドラ・ナー・グプタ (Jatindra Nath Gupta) 訴訟の判例で定められた法令や憲法の意図に反しているのであります。グプタ判例におきましては、州議会は、その立法権をいかなる他の機関や権威に委ねることはできないと決定しており、そしてその判決に本件も拘束されるのであります。何故なら、これは連邦裁判所、すなわち現最高裁の前身によって決められたものだからであります。」と主張。

ここで主任判事が「ベナジーさん。あの判例は3対2で決められたものではなかったですか？」と発言する。ベナジーは、「にもかかわらず、それは決められたのであり、この法廷においてもそのような結果が生じるかも知れません。もちろん、この法廷のどなたもそのような結果は望まないでしょうが」と言う。主任判事は、「そうですね。続けてください」と顔をしかめながら言った。そういう事態だけは彼も避けたかったのだ。

しかし暫くして主任判事は又口を挟んだ。

「しかし、イギリス王妃対ブーラ (Queen versus Burah)、ホッジ対イギリス王妃 (Hodge versus The Queen) 判決はどうですか？」

「私は私なりのゆっくりとしたやり方で、その点についても触れさせていただきます」とベナジーは、言った。

一瞬、微笑みとも取れる表情が主任判事の顔に浮かび、彼はそれ以上何も言わなかった。

成文憲法であるアメリカ合衆国最高裁判例がインド憲法解釈に影響する？

30分後、ベナジーは、再び勢いを取り戻していた。「しかし、我々のインド憲法は、イギリスの慣習法とは違い、そしてアメリカの場合と同様、成文憲法であり、国民の意思を明確に表現しているのであります。そして正に、国家の様々な権限の、立法府、行政府、司法機関への付与が、アメリカとインド憲法の双方に、同じような形で存在するが故に、我々が道標として、意味の解釈方として仰がなくてはならないのは、合衆国の最高裁において定められた規則なのであります」と言う。

「ならないのですか？」こう聞いたのはイギリス人の裁判官だった。

「した方が良いのであります、裁判長殿」とベナジー。

「アメリカ憲法の規定が我々の憲法の解釈において拘束力を持つと言っておられるのではないでしょうね？この質問への答えは、イエスカノーかでなくてはなりません」。

「もちろん、あなたもお分かりのように、それは無茶な主張です。ですが、全ての問題には2つの側面があります。私が言いたいのは、アメリカでの前例や解釈は、厳密な意味では我々を縛るものではありませんが、海図のない海を行く我々にとって唯一の安全な道標なのであります。そして、国家の別々の機関による権限の委譲を禁じたアメリカにおける規則は、我々が適用すべき基準なのです」。

イギリス人裁判官は、納得はしないながらも、聞く耳は持ったという様子である。

「権限移譲をすべきではない理由は、クーリー (Cooley) によって『憲法の限界』の第1巻224ページに簡潔に述べられております」とベナジーは言う。

アメリカ憲法は、権限移譲を禁じているというクーリーの解釈

主任判事は、口を挟み、裁判官全員がその著書のコピーを読めるようにと求め、ベナジーは、カーボンコピーを提出する。そして、ベナジーは、該当する箇所を朗読する。

国家の主権者がその権限を置いた場所に、その権限は留まらねばならない。憲法そのものが変わるまでは、合憲的な機関によってのみ法は作られねばならない。

その判断、知恵、そして愛国心にこの高度の特権が委ねられた権力は、その権限が委ねられる他の機関を選ぶことによってその責任を免れることはできないし、いかなる他の組織の判断、叡智、愛国心をもって、主権者による信頼が最高の信頼を置くことが適切だと判断した機関の判断、叡智、愛国心に、代用することもできない。

パルーバ州議会による権限の州政府への不適切な移譲？

そして、「裁判長殿、ザミンダリー制度廃止法において、パルーバ州議会が州政府に移譲したのは、この主権者による信頼、主権者による信頼なのです。すなわち、多くの場合、政府の下級官僚によって行われることになっている法の発効期日、ザミンダールの地所の接取の順序についての決定—極めて恣意的で、気まぐれで、悪意に基づく可能性もあるのですが—、補償として提供される公債の条件、現金と公債の割合や他の重要な問題等であります。これらは単なる細部ではなく、権限の不適切な移譲であり、この法は、たとえそれ以外に問題はないとしても、それだけで、法的に無効なのであります」と主張。

シャストリは微笑を浮かべながら立ち上がり、「博学なる友人の発言に訂正を行いたい。法の発効は、インド大統領の承認と同時に行われることになっております。従って、法はただち

に効力を発揮するのであります」と発言。これはシャストリが行った最初の口出しであったが、さりげなく、愛想のよい上品さを持って行われた。シャストリの英語は決して流暢ではなく、特有のアクセントを伴っていたが、根本原理から説き起こす卓越したものであり、この国の他の弁護士に及ばないものであった。

それに対しベナジーは、「我が学識豊かな友人の発効期日についての訂正に感謝したい。しかし、私が述べたのは、地所の接取の権限がいつ発効したかではなく、いつ接取されるのかという点であります」と言う。すると主任判事の右横に座っている判事は、「政府が同時に地主の地所を全て接取するのは不可能なことはご存知でしょう？」と言う。ベナジーは、「同時にかどうかという問題ではなく、公正さが問題になっているのです。私が心配しているのは、その点なのです。現在の法は、政府がもし特定のザミンダール、例えば、マー藩王が気に入らないとすれば、即座に接取命令を発令できるのであり、独裁に道を開きかねないのです」。

このような調子で議論が延々と続く。裁判にドラマを期待してやってきた外部者たちはひどくがっかりした。また、多くの訴訟当事者は、目の前で展開されていることがチンプンカンプンであった。だが、ベナジーは、5日間に渡り、原告の立場について論じ続け、その後、今度は、シャストリが5日間反論し、最後にベナジーが2日間、論駁に立つことになっていたのである。聴衆は、もっと派手で華やかな心躍るやり取りを期待していたのだが、彼らを待ち受けていたのは、聞いていると眠たくなるような様々な判例を巡る議論であったのだ。

傍聴する弁護士にとってのこの裁判の重要性

しかし、弁護士たち、特に傍聴席の背後に陣取っていた訴訟に関わっていないものたちは、その全てを楽しんだ。彼らは、ベナジーの憲法についての議論の立て方は、成文憲法を持たず、議会による法と裁判所による判決に基づくイギリス法の、そして、(イギリスに倣っていた)これまでのインドの弁護のやり方と大変異なっており、インド(植民地)政府が1935年にその枠組みを決め、インド憲法が15年後にそれに従って起草されて以来、ますます重要になったことに気づいていた。しかし、このように広範囲かつ詳細に、優れた法律家によって論じられる訴訟は初めてであったのだ。(ASB, pp.746-750)

法廷での議論が進むにつれて傍聴人の数がどんどん減って行き、今では、裁判の当事者や新聞記者だけとなっている。何故なら法廷での議論は、この裁判の歴史的背景やこの判決の歴史的意義とは異次元の、純粋な憲法論として展開されているからである。

インド憲法の「法の下での平等」と「公的目的」に照らし、ザミンダリー制度廃止法は合憲か？

そしてベナジーを初めとする原告の弁護士の関心は、第一、第二の論点である、差別を禁じ「法の下での平等」を規定した憲法の14条と「公的目的」による財産の接取やその際の補償を規

定した 31 条第 2 項、第 4 項¹³⁾ に集中し、シャストリ氏の 14 条、31 条への見解や、違憲だと主張されているザミンダーリー制度廃止法についての見解に関する厳しい尋問が行われたのである。5 人の裁判官からの質問は、14 条と 31 条に直接関連する論点全体に及ぶものであった。

質問 1. ベナジー氏は、「ザミンダーリー制度廃止法」の目的は、憲法 31 条に規定された「公的目的」による土地の接取ではなく、政権に現在就いている政党の政策に過ぎないと主張しているが、あなたの見解はどうですか？

質問 2. 司法長官、アメリカにおける「公的目的」にかかわる判例のなかには相互に矛盾し合う例がありますが、それをどのように理解しますか。

質問 3. 司法長官、貴方は、憲法 31 条第 4 項の「この憲法に書かれないかなることにも関わらず」という文言が、この条文のなかで支配的な意味を持ち、31 条に基づく法は、14 条や他の条項を根拠に異議を申し出ることにはできない、と本当に我々を信じさせようとしているのですか？ 31 条の第四項は、第 2 項に含まれる根拠による法的異議申し立てから法を守っているに過ぎないのです、等々である。

傍聴していた記者の数人や弁護士さえもが公判が州政府に不利な方向に進み始めたと強く感じた。

しかし、シャストリは、これを意識していないようだった。彼は、平静に、言葉、いや音節を選びつつ、ベナジーの 3 分の 1 の速度で発言した。

最初の質問に対するシャストリの答えは、「憲法のなかのディレクティブ・プリンシプルに書いてあります。だから「公的目的」は、政党の政策であるだけでなく、憲法そのものに書かれているのです」と答える。(ディレクティブ・プリンシプルとは、政府機関が法令を作成する場合のガイドラインに相当するようなものである = 筆者)。

アメリカでの「公的目的」に関する判例相互の矛盾した解釈をどう考えるのか、という質問に対しシャストリは、ニヤッと微笑み、「私はそれに答える立場にはありません。アメリカの判例に依拠しようというのはベナジー氏の主張です。実際、クーリー博士自身、相互に矛盾した判決に照らして「公的目的」の意味を確定するのは幾分困難であると言っていなかったでしょうか？」と答える。

他の判事が質問している間、それには加わらなかった主任判事は、今や討論に身をのりだして参加する。以下二人のやりとりを問答形式でまとめておこう。

主任判事：「州政府は、2 つの支払い、すなわち、非スライド制（接取される土地の大小に関わらず支払われる）補償金とスライド制（土地が大きいほど損をする）の社会復帰金は、相互にその性質が全く異なると主張していますね？ 一方は補償金であり、他方は違うと。だから両者を一緒にすることは出来ず、補償金は非スライド制ともス

ライド制とも言えず、従って、大きな地主に差別的で不平等であるとは言えないと。

シャストリ：はい、そうです。

主任判事：さらに、2種類の支払いは、例えば、ザミンダーリー制度廃止法の違った項目に記述されており、それぞれ違った政府の担当局の職員が支払いにあたるが故に、2つの支払いは別々のものであると州政府は主張するわけですね。

シャストリ：はいそうです。

主任判事：他方、ベナジー氏の主張は、このような区別は、単なる手品のようなごまかしに過ぎない。特に、補償金は社会復帰金の3分の1に過ぎないのだから、と言うものです。

シャストリ：違います。

主任判事：というの？

シャストリ：手品では無いということです。

主任判事：さらにベナジー氏は、議会での第一読会の段階では補償金にこのような区別はされておらず、パトナ高等裁判所の判決で、憲法14条の「法による平等な保護」という項目が論点になったことから、この問題を詐欺的に回避するために考えだされたものだと主張していますが。

シャストリ：法は法であり、討論は討論であり別ものです」。

主任判事：では法の前文はどうですか？前文には、法の目的として社会復帰は上がられおりませんが。

シャストリ：不注意です。法は法であります。

主任判事：では、貴方、つまり州の主張、すなわち、所謂、補償金は、31条第2項に基づく補償金とその全てであるとするならば、この社会復帰金とは何ですか？

シャストリ：（補償金のように法的義務としてではなく）州政府が、誰に対してであれ、どのような形であれ、自分が選んだ形で行う支払いであります。

ここで主任判事は、獲物をここぞとばかりに問い詰める。

主任判事：補償金に対する法的異議申し立てから保護する32条第4項は、「好意に基づく支払い」にも適用されるのですか？この「好意に基づく支払い」の、大地主には不利な、スライド制という不平等な条件は、14条の「法の下での平等」を根拠とした法的異議申し立ての対象とはならないのですか？

フィローズは、ベナジーを見た。それこそベナジーが夕方の弁護団の会議で議論の予先を向

けるべきだと主張していた論点であった。ベナジーは、そして、法廷の全ての人が、じつと司法長官を見つめた。15秒間の沈黙の後、シャストリは、「政府の好意に基づく支払い、についての法的異議申し立てですか？」と心から驚いた様子で言った。

主任判事：「社会復帰金」は、大きな地主には不利に作用します。最小の地主は、地代に基づき、算定金の10倍の額を支給され、最大の地主は、算定金の1.5倍しか貰えません。

つまり、算定金への異なった倍率、故に、不平等な扱い、故に、差別であります。

シャストリ：裁判長殿、「好意に基づく支払い」は、法的権利に基づくものではありません。

州によって与えられた特権であり、従って、不公正な差別を根拠にした異議申し立ての対象にはなりません。

しかし、司法長官は、以前ほど大きな微笑を浮かべてはいなかった。この議論は二人の間の一問一答の尋問になっていた。

主任判事：司法長官、アメリカの最高裁では、憲法修正第14条—我々の憲法第14条がこれに、文言の点でも精神の点でも一致するのですが—は、責任のみならず、付与された特権についても当てはまることになっています。

シャストリ：裁判長殿、アメリカの条文は短く、従って解釈の余地があります。インドのものは、長く、それだけ解釈の余地は少ないのです。

主任判事は、微笑を浮かべた。今や、ずる賢い顔つきを浮かべた。もし本法廷があなたの議論が説得性を欠き、「好意に基づく支払い」も、14条の「法の下での平等」を保証しなければならないという結論に至るならば、州政府の立場はどうなりますか？ シャストリは、「その時には、州政府は、敗れます」と言わねばならない所であったが、そう言うかわりにシャストリは、「政府はその立場を検討しなくてはならなくなります、裁判長殿」と答えた。主任判事は、「政府は、そのような論法に照らし、立場を再検討した方がよいでしょう」と言った。

法廷の緊張は極度にピリピリしたものとなり、居眠りをしていたマー王の夢のなかにまで入り込んだ。マー王は、激しく立ち上がり、「それはおかしい」と叫び、法廷をかき乱し、「私の土地、私の命が賭かっているのだ！」と喚きたて、裁判長の命令で法廷から引きずりだされたのであった。(ASB, pp.758-762)

高等裁判所の判決

そして高等裁判所の判決がでる日が訪れた。緊張と興奮と不安が第一法廷に満ちている。地元の法律家は、皆この歴史的判決を見に来ている。もちろん新聞記者も、どっと押しかけ、その命運が法の秤にかけられている訴訟当事者の王様、封建領主、大地主の様子を見守る。法の

秤はすでに一定の方向に傾いているのだが、未だ、カーテンに隠されていると言えよう。

裁判長は、75 ページに渡る判決文の最後のページにあたる主文だけを読み上げた。それには 30 秒とかからなかった。

判決主文：パルーバ州ザミンダーリー制度廃止、及び、土地改革法は、憲法のいかなる条項にも反せず、従って、有効である。原告の主要な申請、及び、関連する申請は却下する。

そして裁判官は一人々順番に判決文に署名をし、法廷の官吏にそれを渡す。(ASB, pp.819-820)

判決の 2 日後、シャストリは、は判決の全文を熟読する。全員一致の判決であり、シャストリはホットする。判決文は、しっかりと明晰に書かれていて、得に、最近加えられた憲法修正第一条という壁も相まって、不可避的な最高裁への上告にも耐えられるであろうと思った。

議会の権限の移譲と公的目的の欠如についての原告の主張は、却下されていた。根本的な問題、シャストリが、どちらに転んでもしかたがないと見ていた問題、すなわち補償金を 2 つの部分に分けた政府の方針について裁判官たちは、次のような判断を下していた。

「社会復帰金」と「補償金」は、両方とも、合わせて接取される土地への真の補償金、あるいは「実際の補償金」である。判決は、両者が共に補償金であることにより、不十分、あるいは差別的という理由で両者の違憲性を問題にすることができなくなったとした。(憲法修正第一条には、補償金について、社会的弱者を守るという立場から、不十分、あるいは、差別的という理由で違憲であるという主張を認めないことが明記されていたのである = 筆者)。

もし、2 つの項目を異なったものであるとする政府の周到な主張が裁判所によって支持されていたならば、(スライド制に基づき、大きな地主ほど損をする) 社会復帰金は、憲法によって補償金に与えられた保護を受けることは出来なかったであろう。言わば、裁判官たちは、州政府の主張を線路上から吹き飛ばし、迫りくる列車から守ったのである。

シャストリは、判決が賠償についての政府側の主張を取り入れないことによって、皮肉にも政府の側の主張を支持する判決になっていることの奇妙さに思わず微笑を浮かべていた。(ASB, pp.818-821)

IV 会議派右派の台頭を巡る党内権力闘争とネルーの苦悩

ザミンダーリー制度廃止法の問題が、一段落ついた段階で、小説の焦点は、来るべき第一回の総選挙を睨んだ会議派党内の権力闘争に移って行く。その本質は、独立後の会議派内部における右派の台頭と、その下での本来の会議派の基本路線からの逸脱、変質であり、そして、それを批判する左派の人々による新党結成の動きである。そして、独立闘争の時代から築き上げ

てきた会議派の本来の政策を掲げ、党の右傾化の流れに抗し、政府の政策を堅持しようとする孤高の首相、ネルーの苦闘する姿が描かれる。

そうした会議派の動向と並行し、『婿探し』は、政治とも深く関わるもう一つの重要な動向、すなわち、中央・地方政府を支える行政の論理に政治家が干渉し始める動きを描いている。すなわち、会議派の地方政治家が、州政府の行政を自分に有利なように動かす為に、SDOの法令・規則に基づく公正な遂行に干渉し始め、SDOがそれを撥ねつけたことからSDOは鉱山局に配置転換されるのである。

セスは、上記の二つの流れを交互に描きつつ、独立後の新たな政治秩序の形成過程を描いているのである。これが大事なのは、新たな政治秩序が、独立後の政治の原点となり、それ以降のインドの政治を大きく左右して行くことになるからである。

マヘシ・カプールが回想する会議派内部の権力闘争

マヘシ・カプールは、8月の初旬にルディアの彼の農場にマーンを伴って出かける。マヘシには農場の管理以外に2つの目的があった。マーンが農場経営に向いているかどうかを知りたかったのと、差し迫った総選挙で会議派候補と闘う上で、どの選挙区から出馬するのが一番良いのかを知るために、その候補の一つである、自分の農場があるルディア地区を訪れたのであった。自分の畑を歩きながら、マヘシは、再び、デリーで最近演じられた国民会議派の大物政治家による党内権力闘争を回想する。(ASB, pp.1035-1038)

ここでは、その流れを簡潔に整理しておこう。デリーでは、ヒンドゥー排外主義を標榜する右派の政治家タンドンが、会議派の党首となったのである。タンドンは、左派のキッドワイの反対もあり、1948年の党首選挙では僅差で敗れたが、1950年の選挙には勝利したのである。これはタンドンが、1951年秋から始まる総選挙に向けての会議派候補者選定に大きな影響力を発揮できることを意味した。

裸足で髭を生やし厳格な顔立ちで不寛容なタンドンは、ネルーより7歳年長で、同じアラハバード出身であったが、今や会議派の党組織を率い、執行部のメンバーを各州の会議派のボスたちから構成していた。というのは、殆どの州の会議派の党組織は、保守派が支配していたからである。タンドンは、党執行部のメンバーの人選は、党首の自由に任せるべきだと主張していたので、彼は、自分の政敵であるキッドワイ (Rafi Ahmad Kidwai) をそのメンバーから外していた。首相のネルーは、タンドンの勝利は、自分の保守的なライバルであったサルダー・パテルの勝利だと正確に見ていたもので、最初、キッドワイを排除したという理由で党の執行部への参加を拒否しようとしたが、党の統一を優先する立場から考え直し、参加していた。それは、各地方の利害に埋没し分裂したインドの政治状況のなかで、会議派が唯一国をまとめる政治勢力だと見ていたからである。

ネルーは、首相としての自分の方針を守ろうとし、自分の主要な政策を会議派の会議で提案し、その賛成を取り付ける方針を取った。彼の方針は、党の会議で圧倒的賛成を得て承認されたが、それは、党の人事や選挙候補者の選定過程を支配することとは別物であった。自分の政策に賛成するというリップサービスを得ても、次の選挙において、民衆の間での自分の絶大な人気を利用され、党内の保守派が、州議会や中央議会において多数を占めた場合、自分は見放され、無力となり、その方針が歪められるのではないかという危惧を抱いていたのだ。

タンドンが党首に選出されてから二か月後、サルダー・パテルが死去したことで、右派は強力な戦略家を失ったが、タンドンは、彼自身がネルーの強力な反対者であることを証明した。タンドンは、キッドワイやカラパティによって設立された民主戦線のような党内の自分への反対勢力を、党の規律と団結を盾に押さえつけようとし、さらに、会議派の党組織は、ネルーに率いられる会議派政府に対しても助言し、支配する権限を持つと主張した。そしてあらゆる主要な政策においてタンドンの意見は、ネルーの意見やその支持者、クリパラニやキッドワイ、そしてブランプールではマヘシ・カプールのよう人々の意見と真っ向から対立していたのである。

経済政策での違いだけでなく、ムスリムへの態度においてもネルー派とタンドン派はまったく異なっていた。インドとパキスタンがカシミール問題を巡って睨み合っているという情勢の下で、ネルーは2つの貧しい国が戦う悲劇を回避しようとし、パキスタンの大統領と話し合おうとしたが、会議派の多くの人々は、パキスタンに怒りを抱き、戦争を望んでいた。閣僚の一人が辞任し、ヒンドゥー教復活党を立ち上げていた。また東パキスタンからベンガル州へ難民としてやってくる人々が増大し、州財政の負担が増大する状況のなかで、同じ数のムスリムをパキスタンに送るべきだと主張する人々もいた。会議派のなかには、ヒンドゥー教徒対ムスリムという発想が強く、分離独立を主張したムスリム同盟と同根の発想が根づいていたのだ。

だが、ネルーは、インドをヒンドゥー教徒の国だと見なし、ムスリムをインドの二級市民だと見なす考えには反吐が出る思いであった。そして、かつてムスリム同盟に属していた指導者たちも、会議派のなかに、迎え入れていた。ネルーは、ひどい扱いや不安感から、ラジャスタンや他のパキスタンと国境を接した州から未だに西パキスタンに移住しようとするムスリム達を安心させようとし、その演説のなかで必ず、宗派間の対立や報復的措置に反対していた。

ネルーは、財産を奪われ西パキスタンから難民となって逃げだしてきたヒンドゥー教徒やシーク教徒、そして、右翼政党や党内右派が、パキスタンへの対抗措置を主張するのに反対した。またネルーは、インドからパキスタンに移住した人々がインドに残した財産を狙っている人々を利する、移住者財産管理局の厳しい決定を緩和させようとした。

ネルーは、パキスタンの大統領と協定を結び、戦争の危険を緩和した。こうした全ての行動が、ネルーを、インドの文化に根差さない、根無し草で、ムスリム好きの世俗派で、ヒンドゥー

教徒の大多数から切り離されたインド人だと見ていた人々を激怒させた。

ただ、そうした人々が無視できなかつたのは、1930年代にネルーがインド全国を遊説し、一般大衆を魅了し、その心を沸き立たせて以来、大衆は、ほぼ確実に彼に選挙で票を投じるであろうということだった。マヘシのように独立闘争の時代の政治的光景を体験した政治家は、それを知っていた。

マヘシは、彼の農場の管理人と灌漑設備について相談しながらも、その年の夏にデリーで起きた大きな政治的危機を想起していた。それは、タンドンに代表される会議派の右傾化に反発した人々が党から離脱する動きであり、そのなかでマヘシも30年間忠誠を尽くしてきた政党を離れる決意をし、新しい党に合流したのであった。マヘシは、他の多くの人々と同様に、ネルーが自分の努力の虚しさを理解するのを願っていた。しかしネルーは、自分の支持者が右傾化する党からどんどん抜けて行っているにもかかわらず、会議派を去ることを拒み、会議派全国大会の委員会ごとに、団結と和解を求める以外に、積極的な動きをなんらしなかつた。ネルーが迷うのに合わせ、彼の支持者たちも困惑、混乱を深めた。そして夏を迎える頃に、危機が起きたのである。

6月に、パトナで党の臨時大会が開催され、時を同じくして、会議派を「腐敗と縁故主義と盗みの政党」と定義し会議派を去ったクリパラニを含む数人の有力な指導者によって労働者・農民党 (KMPP) が設立されたのである。キドワイ (Kidwai) は、会議派を去ることなく、KMPPの執行部に選挙で選ばれていた。これが右派の怒りを呼び起こした。キドワイは、会議派中央政府の大臣の一人であり、同時に会議派政府にとって代わろうとする政党の執行役員だったからである。彼らはキドワイの会議派の議員としての辞職を要求した。

7月始め、バンガローレで、会議派の中央執行委員会が開かれ、次いで、再び、バンガローレで、全インド国民会議派中央委員会が行われ、キドワイは自分の立場の釈明を求められた。彼は言葉を濁し、会議派を直ちに辞める意思はなく、KMPPの結成大会を延期するよう努力したができなかったと述べた。そしてバンガローレ大会が、変則的な彼の立場を不必要にすること、つまり、右派による会議派の支配を正すことを要請した。

だが、バンガローレ大会は、そのようなキドワイの希望を踏みにじった。ネルーは、この会議で、二つの最も強力な会議派の委員会、すなわち右派が支配する中央執行委員会と中央選挙対策委員会を再編し、右派勢力を減らすように要求したのであるが、タンドンは、自分と中央執行委員会全員の辞意を表明した。会議派が永久に二つに分かれることを恐れたネルーは、要求を撤回。紆余曲折を経て、結局さらに200名のメンバーが会議派を辞し、バンガローレで開かれていたKMPP大会に合流した。だが、タンドン派は譲歩しなかつた。キッドワイは、党内で抵抗を続けたが、結局、その闘いに破れ、ネルーはさらに孤立を深めることになった。

ネルーは、国が抱える数々の大問題—洪水、パキスタンとの国境沿い紛争、新聞法、ヒन्दウー

法、パンジャブ州に対する中央政府による直轄支配宣言により頂点に達した中央政府と州の関係の問題、日々の政権運営、最初の5か年計画の作成、ネルーが特に力を入れた冷戦構造のなかでの発展途上国の非同盟政策等の外交政策等々に付け加え、会議派内の自分の政敵に打ち負かされたという厳しい現実が気がめいった。政敵らは、タンドンを会議派の党首に選び、ネルーの支持者を党外に追い出し、州、地区レベルの会議派委員会、執行部、中央選対を独占し、ネルーに同情的な大臣を止めさせ、次の総選挙で自分たちの候補者を立候補させようとしていたのだ。その結果、ネルーは追い詰められていた。自分自身の決断力の無さが、その原因でもあったとネルーは、考えたかも知れない。(ASB, pp.1038-1040)

マヘシ・カプール自身は、そうだと思った。カプールは、自分の心の重荷を近くにいる人に打ち明ける癖があり、マーンと彼の農場を散歩していたマヘシは、マーンに自分の気持ちを語るのであった。

マヘシは彼が州の財務大臣の職を去る決意をしたとき、シャーマ第一首相は、ひどく落胆したのを思い出した。というのはこれまでシャーマは、アガワールとカプールの対立を利用し、政策決定を思うとおりにできる自由を確保していたからである。

ザミンダーリー制度廃止後、農村で起きていたこと

散歩の最中に、SDOのサンディーブ・サヒリがジープでやって来て、彼が抱える問題についてマヘシの助言を得ようとする。その一つが、ザミンダーリー制度廃止法が通過した後、起きている問題である。「あなたはもう財務大臣でなく、関心をお持ちではないのは承知しておりますが」とSDOが言うとマヘシは、「私が関心を失ったなどと誰が言ったのだ？」とサンディーブ・サヒリに詰め寄る。マヘシ・カプールを怒らせる話題があるとすれば、それは彼が精魂込めてやってきた法の副産物のことであった。ザミンダーリー制度廃止法が通過した州では、小作人たちが、家や土地から追い出されていたのだ。地主たちの意図は、(自分たちの土地を小作地として貸し出してきたという事実を覆い隠し)、自分たちがずっとそうした土地を耕してきたのであり、自分こそその土地への権利を保有しているのだと示すことであった。マヘシは、SDOに「この問題に、君はどう対処しているのか？」と聞く。SDOは、「問題の規模は想像を超えております。私は、同時に全ての場所に行くことができませんので」と答えた。するとマヘシは、「運動を起こすのだ」と言う。

サンディーブ・サヒリは、肝を潰した。公務員の自分が運動を起こす等というのは考えられないことだ。しかも、そんなことを元大臣が言うとは思ったのだ。他方、サンディーブは、マヘシが、土地から追い出された百姓に同情し、百姓たちの味方だと思ったから話かけたのだ。サンディーブは、心密かにマヘシがそのような運動を起こしてくれることを期待していたのだ。マヘシは、SDOに、この地方の会議派を、事実上、牛耳っている「ジャとは話をしたのか？」

と聞く。SDOは、「ジャと私のそりが合わないことは公然の事実です。あの男は、私を困らせて喜んでいるのです。地主連中から政治資金の大半を受け取っているのです」と答える。「判った。考えて見よう。ここに着いたばかりで、物事を決める時間も、選挙民と話しをする暇もなかったからな」とマヘシは言った。SDOは、マヘシが次の選挙で、いつものブランプールの選挙区からではなくルディア地域の選挙区の一つから立候補することを示唆したことに大喜びする。

SDOは、地元民の間で人気があった。それは、彼が地元民に善意を持ち、問題が起きた現地に赴き事実を確かめ裁く効果的なやり方、税金の公正な徴収方法、彼の知るようになった違法な立ち退きを認めない姿勢、所管の地域での法と秩序の断固とした維持等によるものであった。

SDOは、「これからジャと会うことになっていますので。」とその場を立ち去ろうとするが、マヘシは、この地域で農民が土地から追立てられる事件の資料を求める。だが、SDOは、そのような情報を、今は公職を辞した人間に渡すべきかとまどろ。マヘシは、不十分なものでも良いのだと言い、若いSDOを見送った。(ASB, pp.1042-1043)

政権党の政治家による官僚支配—侵される行政の独立性と公平性

サンディーブ・ラヒリの会議派のジャ訪問は、最悪の結果に終わった。会議派の大物政治家のジャは、SDOから州の行政について相談されるという慣習になじんでいたが、サンディーブ・ラヒリは、大学でインド憲法の本質や行政と政党との関係についてリベラルな立場からの解釈について深く学んでいたため、政治家とは一定の距離を置くという方針を持っていたため、二人の間には大きな溝があったのだ。しかしこの日、ジャは愛想が良かった。話題は、独立記念日のための催しの為にSDOが集めようとしている寄付金に及ぶ。ジャは、その半分を会議派に回して欲しいというのである。会議派が州の政権党なのだから役人はその言う通りにすればいいのだというのがジャの考え方だが、SDOは、行政の公平性の観点から、「会議派に渡せば、他の政党にも渡す必要があります。」という。ジャは、「ではカプールも要求したのか？」と聞く。「いいえ。」と答えると、「それならいいではないか。」と言う。ジャは、「公平」という言葉への軽蔑を隠さない。会議派は特別な政党であり、会議派無しにはインドの独立は無かったのだから、他の政党と同じ扱いをするなど外だと考えているのだ。そして、会議派に資金を回さないなら行政が寄付を集められないようにしてやると言う。こうして陰湿な関係のまま会見は終わったのだ。(ASB, pp.1043-1047)

心配したサンディーブは、自ら市場で一人最大1ルピーの上限を設けて集める。これが話題となり、また傲慢さと金で動く地方の会議派は、この独立後の早い時期においてもすでに大衆の間で不人気となりつつあったのだ。そして会議派が、この募金に反対しているという噂も重

なり、せいぜい 500 ルピーも集まればと思っていた所、800 ルピーもの寄付金が集まる。それを聞いたジャは怒りに震え、「ここでは誰がボスなのか教えてやる。」という。(ASB, pp.1048)

マヘシは、小作人の追立に怒り、田舎の選挙区からの立候補を示唆

ジャが怒りに震えている処へマヘシ・カプールがやってきて、ジャの友人の地主が小作人を土地から追い出そうとしているのをやめさせろと言う。ジャは、そんなことは聞いていないと取り合わないため、それなら、ここから次の選挙で立候補し、百姓が酷い扱いを受けないようにすると言う。それを聞いてジャは驚く。マヘシが田舎の選挙区から立候補する等考えられなかったからだ。それほど、ブランプールの旧市街から立候補するというイメージが定着していたのだ。そしてこれまで、マヘシがルディアの事について口を出すことなど殆どなかったのである。そうしたなかで、マヘシのこの活動家的な新しい姿にジャは驚く。

マヘシは、自分が入閣しようといまいと、ザミンダーリー制度廃止法が歯抜けになるのは許さない。必要なら自分が歯医者になるつもりだと言う。するとジャは、もっと良い考えがあると言い、「サリンプール・バイター地区から立候補したらどうだ。そうしたら、小作人を追い出すやり方に長けている君の友人のナワブが小作人を追い出さないようにすることが出来るぞ。」と言う。

そしてジャは、マヘシに「どうしてネルーの党から離れたのだ？ネルーと競って選挙で勝てるというのか？」と畳みかける。マヘシは、「君はネルーのいう事を何も信じていないのに、彼の名声を利用して票を獲得しようとしているのだ。ネルーの名前が無ければ、お前には何の価値もない。」と言い返す。

ネルーが会議派の役職を辞任したというニュース

そこへジャの友人で地主のジョシが部屋に入ってくる。恐ろしいニュースだという。それはネルーが会議派の中央執行委員会と中央選対委員会の役職を辞任したというのだ。そして会議派からも離脱し、別の党へ行くことも考えていると言う。これを聞いてマヘシは、ブランプールに帰り、相談をしないといけなくなるかも知れないと思う。部屋を出しなげに振り返るとジャはひどいショックに襲われ呆然としていた。(ASB, pp.1049-1051)

一国の首相が、自分が代表する政党のリーダーへの不信を事実上宣言したのである。それも彼がデリーの赤い砦の城壁の上から演説を行う独立記念日の数日前と言うタイミングである。

SDO の左遷と州政府主席次官の背景説明

他方、ジャやその支持者がボイコットするなかで、2000 人が集まった独立記念日の集会を主催していた SDO は、一通の電報を受け取る。それは、州政府の行政官のトップである主席

次官からのもので、サンディーブのブランプールの鉱山への配置換えを伝え、後任者の到着後、ブランプールの役所に当庁するようというものであった。早くもジャが手をまわしたのだと察し、サンディーブは、大いに憤慨したのであった。

サンディーブは、ブランプールに着くと直ちに主席次官に面会を申し入れ、次官は彼を自宅に招く。数カ月前、次官は、サンディーブに一通の覚書を送り、そのなかで、彼の仕事ぶり、とりわけ、やっかいな土地を巡る数年越しの争いを、当事者を集めた即決裁判で解決した事を高く評価していたのだ。だが、ここに来て、サンディーブは足元をすくわれたと感じた。だが、主席次官は、これが、州の第一首相のシャーマの命による人事であり、栄転であるという。だが納得がいかないサンディーブは、ルディアでジャとの間で起きた事を説明し、思い当たることがないかと聞いた。確かに、これは任期がまだ残っているなかでの突然の配置転換であり、次官にとっても腑に落ちない指示であった。次官は、サンディーブへの指示を聞くとすぐに、彼に関連するファイルを参照し、ただ一点だけ気になる点を見出していた。それは、今年のガンジーの生誕記念日にガンジーの写真を冒涇したイギリス人との混血の青年たちに対し、反乱罪で訴えるよう主張した第一首相に対し、ラヒリは、青年たちの行為が若気の至りに発するものであり、又、起訴する正当な法的根拠が存在しないとして、寛大な措置を取ったことである。この事件で、第一首相は腹を立て、前任の主席次官に、サンディーブについての性格評価の欄に、「法と秩序を維持するという義務を犠牲にし、リベラルな本能を発揮することを選んだ。」と記すよう指示していたのだ。

サンディーブは、「もしあなたが私の立場に居たら、どうしていましたか？インドの刑事法のどのような規定に基づいて青年たちの首をはねることができたでしょうか？」と聞いた。自分の前任者を批判しなかつた主席次官は、「君が最近ジャを侮辱したことが原因かも知れないね」と言った。そして、「私は、君が栄転になるように主張することで精いっぱい君を庇うことしかできなかった。いつ第一首相と喧嘩すべきか、そうでないか、時を選ぶ必要があるのね。」と言った。

そして主席次官は、ウイスキーを傾けながら、問題を広げ、過去に遡りながら長い話を始めた。

問題が起り始めたのは1937年、政治家が地方政治を動かし始めた頃に始まった。シャーマが第一首相に選挙で選ばれていた。そして、最初の頃から、官僚の昇進や配置転換にはその人の能力以外のことが関わっていることに気が付いた。指揮系統がイギリスの総督、知事、行政長官、地方長官と繋がっていたときには全てが明快であった。腐敗が始まったのは議員がトップを除いた下のあらゆるレベルに潜り込んだときである。官僚の目から見てルールに反するおかしなことが起り始めたのだ。ここで次官は、クリケットのゲームに例えながら、行政の世界でルール違反が公然とまかり通る現実を語る。話を聞きながらサンディーブは、現実がどの

ように動いているのか理解し始め、自分の未来の姿を想像し幻滅するのであった。(ASB, pp.1052-1056)

ネルーの辞任発言を受け、シャーマがマヘシに会議派復帰を説得する論理

マヘシが屋敷にもどると妻は、シャーマがその日の朝訪ねてきたと言う。マヘシは、会議派の要職を辞任するというネルーの発言が引き起こした波紋にどう対処するのかを話し合うつもりで、早速シャーマの自宅を訪ねる。

しかし、シャーマがマヘシを訪れたのは、会議派に復帰するようにと説得する為であった。ではシャーマはどのような論理で彼を説得するのか？

シャーマは、情勢を見ながら幾つかの可能性を論じる。その第一は、ネルーが会議派を辞め、選挙で彼と闘うようなことになれば、自分は選挙にはでないし、政府の職からも引退する。すると、マヘシが党に戻らない限りアガワールがその座を狙うと言う。マヘシは、シャーマが州の権力をアガワールに譲るようなことはしてはならないと強い口調で言う。シャーマは、私は仮定の話をしているだけだと言い、第二の可能性について語る。シャーマがデリーに行き、ネルーが辞意を翻すよう要請する。するとネルーがシャーマに中央の大臣の職に就くよう要請し、断りきれずそれを受ける。するとアガワールがパルバ州の第一首相になる。つまり、ネルーが新党に移ろうが、会議派に留まろうが、マヘシが会議派に戻らない限り、政敵のアガワールが州の第一首相になる可能性が強いと言うのだ。

次に、シャーマは、観点を変え、国全体というより広い文脈で問題を考えようと言う。もしネルーが会議派を去り、選挙で会議派と闘うというような事態になれば、人々の心は、会議派への忠誠とネルーへの忠誠との間にどんなに引き裂かれるだろうか？何と言っても会議派は、ガンジーの党であり、独立の党なのだからと言う。マヘシは、「だがその党は今や縁故主義、腐敗、不効率、自己満足の党に成り下がっている」と言いたい思いを自制し、「もし、(会議派の変質について)闘いが必要ならば次の選挙で勝負すべきだ。会議派が、選挙に勝つためにネルーを利用し、その後、ネルーに党内の右派勢力の数の力で反旗を翻す方がよっぽど悲惨だ。会議派の抱える問題について白黒つけるのは早いにこしたことはない。私とあなたが同じ側について闘った方が良いというのには賛成だ。貴方が私の党に入り、そしてネルーにもそうしてもらおう二人で説得できれば一番いいのだがと言う。

シャーマは、その言葉をマヘシのジョークだと解釈することにし、真面目に取り上げない。何故か？ここで我々は、シャーマが、かつて独立闘争に全てを犠牲にして闘った教師に言った言葉を想起してみよう。その教師は、シャーマに、独立後、腐敗や汚職にまみれている会議派の政治家を処分してくれと訴えた時、シャーマは、「政治は、石炭業のようなものであり、政治家の手が多少、黒く汚れていてもしかたがない」と答えたのである。つまり、シャーマは、

会議派の変質を、マヘシのように、深刻な問題だとは捉えていないのである。だが、老獪なシャーマは、話題を変え、マヘシと見解が一致しているヒンドゥー教徒とムスリムが協調する必要に話題を変える。そして、ネルーが、各州の第一首相宛に出した極秘の書簡をマヘシに見せる。その書簡のなかで、険悪なパキスタンとインドとの関係が続くなかで、インド国内においてはヒンドゥー教徒やシーク教徒の過激派が策動を続けており、インドの少数派のイスラム教徒に迫害を加えるような事態に展開すれば、それがパキスタンとの戦争の引き金にならないとも限らず、何ととしてもそのような事態は避けなければならないと訴えていたのである。シャーマは、マヘシに、そのような時に、国を二分するような事態を起こしてはいけないのは明らかだ。だから私は君に党に戻って欲しいのだ。アガワールのムスリムへの態度は君もわかっているだろう。だが、彼は内務大臣なのだから治安問題は彼の担当なのだ。そして今年は、ヒンドゥー教徒の祭りとムスリムの祭りが同じ日に当たっている。ムハマドも、ラーマも、ガンジーも平和主義者かも知れないが、三者が集まると、何が起きるかわからない。そこにパキスタンとの戦争が重なると、分離独立の際の悲劇が再び起きないとも限らないと言う。このシャーマの最後の言葉にマヘシの心は大きく動かされる。

しかし、そこにアガワールがやって来て、そうした雰囲気をおち壊す。シャーマの、「我々にはネルーが必要だ」という言葉に、アガワールは軽蔑感を露わにし、「タンドンのしていることは全て党内の民主的な手続きを踏んでやっていることだ。どうしてネルーに皆しがみ付くのだ。他にも優れた指導者はいる。組織的な能力はネルーにはない。党をでてキッドワイと一緒になれば、ムスリムの票は得られるだろうが、それだけだ。」と息巻き、マヘシはその場から立ち去る。(ASB, pp.1060-1062)

ネルーのさらなる攻勢

他方、首相としての激務に付け加え、タンドンが会議派を自分の意のままにする事態に危機感を募らせていたネルーは、元イギリス総督の屋敷の今は首相官邸となっている家の仕事場で、速記者を傍らに口述筆記をさせながら、独立闘争の時代と重ね合わせながら、現在、自分が置かれた状況について考える。

ネルーが独立闘争を闘っている間は、苦しみや、犠牲、獄中にあり愛する妻と会えない日々があったが、敵と味方の境界線は明確であった。しかし、今や全てがわからなくなっている。昔の友人が今や政治的ライバルであり、闘った目標が骨抜きにされ、それに自分が手を貸している。自分の支持者は党を去り、その党は今や保守派の手中にある。その連中の多くはインドをヒンドゥー教徒の国だと考え、保守派以外の者は、それに適応するか、さもなければ、その結果を覚悟する必要があると考えている。父親もガンジーも妻も亡くなり、彼の相談に乗ってくれる相手は誰もいない。心置きなく話せる人々は遠くにしかない。だが、何かしなくては

いけない。選挙の後では遅すぎる。これほど悲しい闘いをこれまで戦ったことはなかった。(ASB, pp.1072-1073)

ネルー、党内役職の右派独占を批判し、タンドンを党首の座から追いやる

ネルーがタンドンに対し、宣戦布告したのは、その直後の1951年8月初旬のことであった。すなわち、ネルーは、会議派の中央執行委員と選対委員会の役職への辞任届を出し、会議派の中央の役職が右派の人脈で独占され、本来の会議派の路線を引き継ごうとする人々が党から追い出されていると批判したのである。

だが、タンドンは、党執行部の人事は党首の権限であるとし、ネルーの意見に従わない。ムスリムの有力な指導者たちの中央執行委員会からの辞任がそれに続く。シャーマを始め地方の指導者たちも、ネルーとタンドンの正面衝突を防ごうとし、デリーに行く。しかし、ネルーは、シャーマを中央に呼び、一緒に内閣を組織しようとは言わず、彼らのプライドを傷つける。配慮が行き届かなかった理由の一つは、大事な会議があったからである。会議派の議員会議が開かれ、そこでネルーは自分への信任投票を要請し、ネルーは圧倒的に支持された。彼らの間には、ネルー無しには選挙に勝てないかも知れないという恐怖と党首タンドンが、党の組織の決定を自分たちに押し付けることへの反感もあったのだ。

タンドン派は、いつになくネルーの非妥協的な態度に驚く。そしてネルーが、それまでの方針を自ら覆し、党首と首相の地位を兼ねることを要求しているという噂も広まる。

膠着状態が1か月に及んだあげく、タンドンは、危機の責任はネルーにあるとし、仲介者によって、受け入れ可能な提案がなされない限り、自分は、会議派の党首を辞任すると言い、そして翌日、党首を辞任し、そして新たに党首に選ばれたネルーのもとで中央執行委員会に入った。ネルーが勝利したかに見えた。(ASB, pp.1076-1077)

ナワブは、サリンプール・バイター選挙区からのマヘシの立候補を要請

マヘシが、ナワブの招待でバイター砦を訪問する。マヘシは、ブランプールのせわしく煩わしいプレム・ニーヴァス屋敷での生活や、何よりもブランプールやデリーの政治の世界から離れたかったのだ。というのは、彼にしては珍しく、政治の世界に嫌気がさしていたのだ。

ネルーがタンドンとの闘いに勝利した後、マヘシは会議派に対する態度を考え直す必要に駆られた。ネルーが会議派を離脱しなかったことがっかりしたが、会議派は以前ほど彼のような考えの人間に敵対的ではなくなったと思えたのだ。キドワイの動向が気になったが、キッドワイは、会議派がネルーを支持したのは、彼なしには選挙に勝てないという御都合主義からに過ぎないと踏んでいた。そして会議派のある種の好ましくない連中が党から排除されれば、新党を廃止し、会議派に戻ることもありうるとした。

マヘシは、政治に嫌気をさしていたので政界を引退し、隠居すべきか、あるいは、どの党が自分に良いのか、あるいは無所属で闘うべきか、と考えあぐねていたのだ。(ASB, pp.1079-1082)

ナワブは砦の図書館に引きこもり、ある詩人の詩の編集に取り組んでいたが、昼食に、マヘシをダイニングルームに迎え、彼の病院、記念碑、厩、音楽家、詩人、インド有数の蔵書の管理、ムスリムの祭りへの出費等に要する経費をどう今後賄って行くのかと言った問題について語るが、やがて話題はマヘシの今後の生き方と選挙のことに移り、この選挙区から立候補してはどうか、と言い出す。その理由は、ムスリムとヒンドゥー教徒が半々のこの選挙区のような所は、ヒンドゥー教の過激派が反ムスリム暴動に人々を駆り立てるのもってこいの地域だからだ。そうした動きはもうすでに始まっている。そして日々、お互いを憎み合わせるようなニュースが起きている。パキスタンの関係からのものもあればインド国内の問題、アヨーディヤー問題、牛殺し、ムスリムとヒンドゥー教徒の祭りが今年のように一緒の時期に当たっていること等だ。

この屋敷は、ムスリム同盟の拠点になっていた。アガワールのような人間が目敵にするのは目に見えている。また議会ではヒンディー語法案がだされ、ウルドゥー語を喋るこここの人びとには不利になる。誰が、ムスリムと我々の文化を守ってくれるのか？君のようにありのままのムスリムを知っていて、ムスリムの友人を持ち、偏見によってではなく自分の経験によって判断できる人々だけなのだ。

マヘシは、何も言わなかったが、ナワブが自分をそのように信頼してくれていることに心を動かされた。

ナワブは、さらに言う。恐らく、ここは他の地域より危険な所だ。この地域は、パキスタン樹立のための闘いの拠点の一つであり、それに反対した人々の怒りを生み出してきた。そしてこの地に残ったムスリムは、多数派のヒンドゥー教徒のなかで少数派となってしまった。何が起ころうと、私や、娘や息子たちの家族は何とかやっつけられるが、私が話した普通の人々の殆どは、恐れを持ち、四面楚歌の状況に意気消沈している。彼らは、多数派のヒンドゥー教徒を信頼せず、又、自分たちが信頼されていないと思っている。だから、私は、君がここから出馬して欲しいと思っているのだと言う。マヘシは、「貴方自身が立候補してはどうか？」と言う。マヘシとしてはミスリ・マンディの選挙区から出たいと思っていたし、それがだめでも自分の農場があるルディアを考えていた。サリンプール・バイター選挙区は、あまりに疎遠な所だからである。だがナワブは、自分は政治には向いていない、一票を人々から請うという行為はできないからだとする。しかし、まともで適切な人間に、ここからでもらいたい。ナワブを憎んでいて会議派から立候補したいというものがある。すでにナワブの利益を代弁できるものを無所属で立候補させる用意はあるが、君がでてくれれば、私は、全面的に君を支持するし、そ

の候補者にも君を支持させる。その候補はワリスだという。マヘシはそれを聞き、君の召使じゃないかと大声で笑い出す。ナワブは、ワリスは見かけによらず能力があり、タフで、ナワブや、この家の者、特にフィローズには忠実だ。そのためには何だとしてくれる男だと言う。マヘシは、他にも考えるべき問題があるという。その一つは、どの党から立候補すべきか、という問題だと言うと、ナワブは、間髪をいれず、会議派からだと言う。もう一つの問題は、政治家を続けるかどうかだ、と言うと、ナワブはそれを一笑に付し、取り合わない。(ASB, pp.1082-1086)

ネルー勝利後の議会の動きー

ヒンドゥー法の挫折

ネルーは、党内クーデターを起こしたが、その後の事態は彼の思うようにはいかなかった。デリーの議会では、会議派を含め様々な党派の反対でネルーやアムベドカー法務大臣が推進していたヒンドゥー法を議会で通過をさせることを断念せざるを得なかった。この法案は、結婚、離婚、遺産相続、保護者の在り方等の点で、現行のヒンドゥー法を、女性にとって、より合理的で公正なものにすることを目的とするものであった。

ブランプール州議会での公用語を巡る審議

より正統的なヒンドゥー教徒は、ブランプールの議会でも守勢に回っていたわけではなかった。アガワールは、ヒンディー語を翌年初頭から州の公用語にしようとする法案を提出し、ムスリムの議員たちは、ウルドゥー語の地位を守ろうとして発言した。

ベグムの演説：少数派を守るために命を捧げたガンジーは、少数言語、そして、それを喋る少数派のムスリムを死滅させる、このような法律に賛成しただろうか？

ヒンディー語のデヴァナガリ表記法を導入することは、ムスリムに公務員の道を閉ざすことになる。

アガワール：二つの言語と表記法を公務の現場で用いることは、不効率であるという点につきる。

ベグム：アガワールは、ムスリムや女性には権利がないと言っているに等しい。そしてこの法律を通そうというアガワールの動きの結果、ウルドゥー語による書物の出版物が消滅しつつある。二つの言語は兄弟のようなものであり、何故兄に弟を虐めさせるのか？

アガワール：二つの言語論を主張しているが、これは二国論に通じるものだ。

社会党：どちらかの言語ではなく、英語を公用語にすべきだ。

会議派議員：スイスのような小さな国でも4つの公用語を持っているのだから、この地域でも

ウルドゥー語を少なくとも地方言語と同じ扱いをし、学校で教えるべきである。

アガワール：州の財源には限りがあるのだから、ウルドゥー語は、イスラム神学校で教えればよい。この州では最初から公用語にヒンディー語を用いることを明確にすればよいのだ。

ベグム：インド憲法でさえ、インドの公用語について、アガワール氏が言うように明確ではない。中央では、15年後に英語に代わって他の言語を使用するとされ、どの言語にという点は、不明確になっている。英語のような外国語が、このように許容されるのなら、ウルドゥー語が許容されないのは何故か？ウルドゥー語は、この地域の文化・芸術を表現してきた言語であり、他の地方言語と同様に扱われるべきである。

アガワール：デヴァナガリ表記法さえ学べば、言語の違いに対処するのは、そうたいして難しいことではない。

ベグム：二つの言語には、表記法を除き、大きな違いはないというのか？

アガワール：ガンジーは、ウルドゥー語とヒンディー語の源としてのヒンドスタン語を理想と考え、そうする計画を立てていた。

ベグム：そういう問題ではなく、事実が問題なのだ。現実には起きているのは、ラジオ放送を見ても、古い聖典のサンスクリット語が掘り起こされ、現代語のなかに、三語に一語は取り入れられていて理解できなくされている。これは、ブランポールの庶民が数百年の間使ってきたアラビア語やペルシャ語からの語彙を毛嫌いするヒンドゥー教の原理主義者の策謀である。

いっそのこと、サンスクリットを共通言語にすればよい。そうすれば、自分の国にいながらにして外国人になったような気になるという私が言うことの意味が理解できるだろう。そうしたら、イスラム教の子ども、ヒンドゥー教の子ども、同じスタートに立つことができる。(ASB, pp.1104-1107)

マヘシとアブドゥー・サラームの情勢論議

マヘシは、議場の外で、かつて彼の下で政務次官を務めたアブドゥー・サラームと久し振りに出会い、プレム・ニーヴァス屋敷に彼を招く。マヘシは、ネルーがタンドンに勝利したことで、会議派から立候補することに気持ちが傾いており、中央・地方の政情についてのサラームの意見が欲しかったのだ。

サラームは、「ネルーは、本当に主導権を取り戻したのでしょうか」と切り出す。中央では、ネルーが、一応の勝利を取めたかに見えるが、地方では、シャーマヤアガワールのような保守的な政治家が沢山いて、地方政治の実権を手放そうとは決してしない。その証拠に、ネルーが

勝利して一週間もしないうちに、彼らは、次の選挙の候補者選定委員会を立ち上げ、立候補者を決め始め、会議派を離脱した人々が帰ってきて立候補する前に既成事実を積み上げようとしている。カルカッタの高等裁判所は、そのような企てを抑えなくてはならなかった。この州でも、4名から8名の選考委員の8人全てを決めてしまい、離脱した人々がもはや選考委員になれないようにしてしまった。

だが、マヘシは、ネルーがそのような事態にならないようにしてくれると楽観していたのだ。(ASB, pp.1107-1111)

ネルー、会議派党首を引き受け選挙の候補者を自分で決める道避ける

— 詰めの甘いネルー —

だがサラームの見方は、もっと厳しいものであった。サラームは、デリーで開催された会議派全インド会議に出席していたのである。その会議の初日にネルーは、会議派の党首に選出されていたが、一晩考えると言い、その場で受諾はしなかった。ネルーは、どうしていいか考えあぐねていたのだ。そして次の日、人々は、会議の場に表れたネルーが、彼の支持する候補を選挙に立てるよう断固として指示することを期待していたが、彼らが聞いたのは、指揮官の戦闘宣言ではなく、社会の分断を乗り越えた心の団結という演説のみであった。

候補の選定についてはどう言ったのだ、とマヘシが口を挟むと、サラームは、ネルーは、この責任から逃れることは、難しいことに気が付いたと言った。だが、小さいが心に付きまとい離れない問題があると言う。それは、皆が一晩寝て、考えを変える気になったのか、それともそうでないのか、という点だ。そして皆がそれを示すことを望んだのだ。そこで皆は、一斉に大声を上げ、党の精神と心の一体を誓った。アブドゥー・サラームは、心の中で、「権力の舵を取り自分が気に入った候補を選べ！」と叫んだが、ネルーは、ただ、党の心と精神の団結を唱えるだけであり、決定的な判断が出来ず、結局、党首になることを受諾しなかった。結局、どうしたらいいのか、判断ができなかったのだ。(ASB, pp.1111-1114)

総選挙の候補者選定過程を支配する保守派

会議派は、全国レベルと州レベルの両方での候補者選びに大わらわであった。10月から11月にかけて、パルーバ州では会議派の選対委員会による立候補者選びが続いていた。アガワールに率いられた選対委員会は、一度会議派を脱退した人々が会議派の候補として選ばれることを阻止することに全力を注ぎ、そのためには、あらゆる手段を使った。一人の会議派候補に対し平均6人の候補者があり、明白なえこひいきの証拠を残さずに、自分と同じ政治的傾向の候補を選ぶ十分な余地があった。候補者のカーストや地域での地位、金力、イギリスの支配下で監獄で過ごした時間等が考慮された。しかし、最も重視されたのは、どの派閥に属するのか、そ

して当選の見込みはどうかという点であった。

会議派からの離脱組は、委員会が選んだ候補者のリストを見てショックをうける。現職でさえ、少数派に属していれば立候補名簿からはずされていたのだ。マヘシ自身、会議派を離脱した為に、これまでの選挙区やルディアから立候補することができず、その代わりに、幾つかの候補者未定の選挙区の内の一つを選ぶ道を与えられる。

デリーに対し、離脱派とも相談したというア RBI を得るためだけに、彼らが最後の会議に招待されていたことを知り、うんざりして退席する人々もいた。

結果に不満を持ったのは分離派だけではなくた。落ちた人々の多くは、急いでデリーに抗議に出向き、候補者リストを吟味する委員会で、ライバル候補の名前に泥を塗るのだった。ネルーは、候補者の吟味、直訴の過程を彩る人々の権力への赤裸々な欲望、人を平気で傷つける行為、党そのものへの影響等への関心の欠如を見せつけられ、気分が悪くなった。ネルーは、分離派の味方であったが、候補者の最終選定の過程全体がエゴと欲望と野心に汚れてしまったために、潔癖な性格が邪魔し、分離派の候補を支持し、溝に入り州の会議派組織の古参のメンバーと取組み合いをすることが出来なかった。分離派の人々は、楽観論と悲観論の間を揺れ動いた。ある時点では、パルーバ州の分離派が提出した別の候補者リストが、州の正式の委員会が作成したリストに取って代わりそうになったのだが、シャーマと協議した後、ネルーは、再び意見を変えたのである。人の心を操る名人であるシャーマは、分離派の候補者リストを受け入れ、ネルーが望むなら、それを支持する動きさえしようと提案した。しかし、その場合には、第一首相や他の政府の役職を解任してくれと頼んだのだった。しかし、それはネルーには出来なかった。シャーマの、自分の支持者と他の党派との間に巧みに同盟関係を形成する力量無しにはパルーバ州の会議派はやっていけなかったからだ。

そうしたすったもんだの末、最終的に、会議派の候補者リストには4,000名の地方議会レベルの候補者の名前が挙げられた。そして次に重要になるのは投票者であった。1946年の選挙の時の6倍に上る全ての成人による選挙であり、地球上でこれまで行われたことのない規模の選挙であった¹⁴⁾。

マヘシ・カプールは、結局、ブランプールのこれまでの選挙区やルディアの選挙区からは立候補できず、サリンプール・バイター選挙区という、謂わば、見ず知らずの選挙区から会議派の候補として立候補することになる。彼が結果に不安を感じたというのは当然である。(ASB, p.1180-1184)

ラシードの錯乱

12月に入ったある日、サイーダを訪れたマーンは、ラシードの様子を聞く。サイーダは、「ラシードは、気がおかしくなった」と言う。タズニームに奇妙な手紙を書くようになったので、

家への出入りを断ったのだと言う。

次の日マーンは、旧市街のみすぼらしく、家の立て込んだ地域にあるラシードの部屋を訪れる。ラシードの家族に、彼の様子を知らせると約束していたし、父親が立候補する選挙区にラシードの村も含まれているので、選挙について話したかったのだ。ラシードは、一人暮らしで、家庭教師で生計を立て、勉強し、社会党の活動に関り、イスラムにおける世俗主義について、半ば大衆向けで、半ば学問的なパンフレットを書いていた。ラシードは、ここ数カ月間、意志力のみで生きていた。戸口にマーンの姿を見てラシードは、驚いた様子であった。白髪が増え、顔はやつれてはいたが、瞳にはまだ一種の情熱が宿っていた。近くの公園で話していてすぐ判ったのは、ラシードは、サリンプール・バイター選挙区では会議党に反対し社会党を支持しており、マヘシを支持はしてくれないということだった。ラシードは、インド社会の封建制、迷信、抑圧的な構造、特にバイターのナワブのそのなかでの役割について果てしなく語るのだった。そして会議派は、大地主と手を組み、国に接収される土地の補償をしているのだと非難し、人々は騙されないぞと主張した。

中でもマーンが驚いたのは、ラシードが、彼とタズニームを結婚させようとする計画が進行しているという妄想を抱いているという点であった。その後、マーンがサイーダを訪れ、そのことを言うと、サイーダは、ラシードがタズニームに書いた情熱的なラブ・レターを見せ、どれだけ彼女がタズニームの身を案じているのかを理解させる。(ASB, pp.1265-1270)

ただ、サイーダは、ラシードの手紙をタズニームには見せていなかった。そして、サイーダも知らないところで、フィローズとタズニームとの間に、密かに、恋文のやり取りが進行していることが、後に起こる悲劇への伏線として読者には知らされている。

V 第一回総選挙と農村での選挙活動

マヘシの地方での選挙活動

マヘシが会議派候補として立候補することになったサリンプール・バイター選挙区は、7万の選挙民を抱え、ヒンズーとムスリムの割合が半々の地域であり、100を超える村々と、ラシードの家族が住むデヴァリアや隣村のサガールも含まれている。この選挙区は、一人区である。10人の立候補者があり、6名が政党の代表であり、残りは無所属。マヘシは、会議派を代表し、かつ、現役の財務大臣として立候補しているため、彼の対抗馬になりそうな候補者は、他には見当たらなかった。

無所属の候補の一人がワリスで、マヘシが何らかの事情で立候補しなかった場合の為にダミーとしてナワブが立てた候補であり、マヘシ当選の為に統括責任者の役割を担っていた。しかし、いったん候補者となると、バイター砦のなかで、ムンシであろうと、もはや彼を以前の
152 (670)

ように使用人として扱うことは出来なくなっていた。そしてワリスは、ザミンダリー制度廃止法を不当なものと考えており、この選挙戦では、会議派を支持するものの、心の底では会議派に反対であった。そして、地主への賠償にも反対した社会党の演説会には人を連れ、野次を入れに行くという。(ASB, pp.1270-1271)

マヘシは、息子のマーンの、この選挙区の事情についての説明に注意深く耳を傾ける。この選挙区では、マヘシの脅威となりそうな候補はいなかった。国民会議派は、インドの独立を勝ち取った党であり、ネルーの党であり、資金も豊富であり、組織力もあり、誰もが知っていた。そしてどの村にも一人や二人の会議派の活動家が出て、独立以来、社会活動を行っていて、選挙になると運動に積極的に参加したのだ。

その他の政党の一つは、ヒンドゥー教政党ジャン・サン (Jan Sangh) であり、カシミール問題でパキスタンに好戦的態度を取り、パキスタンを含むインドの再興を掲げている。ラム・ラジャ・パリサード (Ram Rajya Parishad) は、現実離れした政党であるが、平和的で、ラーマの統治する平和な時代の再現を目指し、ネルーが掲げる、ヒンドゥー教徒の女性の地位の向上を目指すヒンドゥー法典に反対の立場を取る。そして KMPP と社会党そして共産党である。

マヘシは、敬虔なヒンドゥー教徒である自分の妻がここに居てくれたら女性票を組織する力になってくれるのと言う。ここは女性が男性の目に触れないよう身を隠す風習の強い地域なのだ。

アムベッドカーを党首とする不可触民の利益と権利を守る党は、1人区からは候補を立てず、左翼系の候補を支持し、2人区では候補を立て、憲法で保証された留保枠を利用し当選を計る。

マヘシは、マーンに、この後、ブランプールに戻り選挙運動の応援に母親を連れてくるようにという。そして革靴の仲買人のケダレスには、不可触民のジャタブの人々にこの地域の不可触民と連絡を取るように頼んでくれという。

マーンは、選挙戦の初めに、2台あるジープを使い、父親とフィローズと一緒に回るよう提案する。そうすれば、ヒンドゥー教徒とムスリムの共同という父親の立場を選挙民に知らせることができるという。そしてナワブが何故、選挙で父親を積極的に助けられないのかと聞く。マヘシは、ナワブが選挙や政治そのものが嫌いなのだと弁護する。特に、彼の父親が、ムスリム同盟の一員として国を分裂させてしまった後ではと言う。それにジープを貸してれたおかげで大いに助かっているという。そしてマーンは、ブランプールに戻り、母親を連れてくると約束する。こうしてマヘシは、マーンに初めて頼る経験をする。

社会党の集会の様相

演説会は、夕方、バイターの公立学校の運動場に張られた巨大な天蓋のなかで行われる。太鼓のリズムに合わせて町を練り歩いてきた社会党の行進が近づいてきて、候補者が壇上に上がる。

候補者は中年の学校教師であり、地域の社会党の幹部として長らく活動してきた人物である。聴衆は、殆ど全員が男性である。壇上には地域の名士が何人か座り、壇上の背後には社会党のバンヤンの木を描いた党旗が掲げられている。紹介されると候補者は、早速ヒンディー語で流暢に語り始める。それは会議派批判である。会議派政府は、我々の税金を我々にきれいな飲み水を提供する水道パイプの整備に使うのではなく無駄なことに費やしている。広場に建てられたガンジーの銅像がそうである。ガンジーは、尊敬すべき人物ではあるが、これは公金の恥ずべき使い方である。だがいくらそれを批判しても政府は耳をかそうとはしない。もし税金を公共トイレの建設に使えば、我々の母親や姉妹は屋外で用を足す必要はなくなる。そして政府が不必要な出費の為に紙幣を増刷するために物価は上がり、我々の生活を圧迫している。過去4年間のインフレ、削減される配給品、供給される布の減少、腐敗や縁故主義によるひどい生活をどう乗り切って行けばいいのか？私は、自分の生徒たちを見ていると涙を抑えられないと言う。すると会場の後ろに陣取っていた会議派の連中の野次が入る。「さあ、泣いて見てくれ、イチ、ニー、サン」。だが、弁士も負けていない。後ろの尊敬すべき、機知に長けた兄弟たちよ、話の邪魔はやめてくれ。君達がどこからやってきて、この地方の人々の抑圧に手を貸そうとしているのかはお見通しだ。私は、自分の教えている生徒たちを見て泣けてくる。何故か？後ろで爆竹を鳴らすのを止めてくれたら話そう。この生徒たちは、仕事に就けないのだ。いくら有能で、まともで、勤勉であったとしてもだ。こんな経済状態に会議派政府は追いやったのだ。母親たちは、子供を学校にやるために大事にしてきた宝石を売り払い、学費にし、大学にもやり、子供の将来に大きな期待を抱いてきた。だが、政府や役所の事務員になるにもコネが必要であり、誰かに金を払わないといけない。我々がイギリスを追い出したのは、そんな国にするためじゃない。人々が食べ、学生が仕事に就けることを保証できないような政府は、恥じて死ぬべきだ。

又、候補者は、この地方第一の大地主のナワブと会議派のマヘシが、車の両輪のごとくこの選挙で共同していると批判し、会議派の政府がザミンダールに補償金を支払う事を批判する。そして、会議派を、腐って中が中空の樹に例え、1月30日の投票日に社会党への投票を訴えるのだ。

社会党の候補の演説が演説会で大盛り上がりを見せるのをワリスは笑って見ている。マーンがその理由を聞くと、町と農村は違うのだという。そして社会党を打ちのめすのは村の票だと言う。(ASB, pp.1275-1276)

カーストの利害と腐敗が常態化した選挙の実態

次の日、彼らは、ジープでデコボコ道を埃にまみれながら移動しつつ、沢山の村々を訪問し、ワリスが紹介する無数の村の村長や、村の会議派の活動家、それぞれのカーストの指導者、イ

スラム教の導師、ヒンドゥー教の賢人、地元の大物等と会い、彼らの要求を聞き、マヘシはそれに簡潔な答えを返す。例えば、農民カーストの男たちは、ネルーが提案したヒンドゥー法の下では女性も財産を相続できる結果、農地が細かく分かれてしまうことを心配し、ムスリムたちは、ブランプールやアヨーディヤーでの紛争がこの地域にも広がることを危惧していた。

やがて彼らは、選挙活動の場をバイターからサリンプールに移し、会議派のボランティアの沢山の人々と会い、地域特有の問題や話題やジョーク等を聞き、地域での演説に組み込めるようにする。会議派の委員会に潜り込んでいたネタジは、マーンを見ると馴れ馴れしく抱擁し、早速、チャーマーの指導者たちに地元産のアルコールを贈るようにと助言するが、マヘシは、それを断る。ネタジは、こんなに常識もないのにどうして大物になったのだと驚いて、マヘシの顔を見る。

その晩、マヘシは息子に打ち明ける。「私が運悪く生まれ落ちたこの国は、何という国なのだ？ この選挙ほどひどい選挙を見たことがない。どこに行ってもカースト・カースト、カーストだ。選挙権を広げるべきではなかった。おかげで 100 倍もひどい選挙になってしまった」と。マーンは父親に慰めの言葉をかけるが、父親が深く心を乱されていることを知った。自分が勝つ（これは揺るぎがなかった）ことよりも、世の中の状態にである。日が経つほどにマーンは、自分の父親を尊敬するようになっていた。マヘシは、巧に、しかし原則を持って運動した。そして朝早くから夜遅くまでこの仕事は続き、しばしば妻がそばに居てくれたらと言った。しかし、手慣れたブランプールの選挙区から追い出され田舎の選挙区から出馬しなくてはならなかったことに一言も不平を漏らさなかった。

マヘシは、マーンと共にサリンプールを再び訪れる。マーンは、前にサリンプールを訪れた時、瘦せた、辛辣な物言いをするムスリムの教師にマヘシを紹介したのだが、その教師は言葉少なに、マヘシに自分の票を期待して良いと言ったのだ。マーンが奇妙に思ったのは、教師は彼らが、票をお願いしますと言う前に、そう言ったことだった。実は、マーンは、知らなかったのだが、ネタジが、その教師に、軽蔑をこめてマヘシ・カプールは、酒でチャーマーを買収するのを断ったと言っていたのだ。それを聞いてその教師は、即座に、マヘシ・カプールは、ヒンドゥー教徒だが、投票したい男だと言っていたのだ。（ASB, pp.1281-1283）

祖父が語るラシードの近況

年末のある朝、マーンと父親は、その日の選挙活動の日程に上がっていたデヴァリア村とサガル村に向かいジープを走らせる。マーンは、村に近づくとつれ、ラシードの家族に最近の彼の様子をどう伝えればよいのかと考え、突然、憂鬱な気分襲われる。

ラシードの祖父は、村人たちが、マヘシ・カプールがナワブのジープで選挙活動をしていることをすでに知っていて、大地主とも折り合いをつけることができる会議派の大臣としてのマ

ヘシ・カプールへの支持は揺るがないと保証する。

他方、ラシードの祖父は、ラシードが家から追い出され、叔父のマヌーからのわずかな仕送りで生き延びているとマーンに話、詳しいことは夕食後にと言い、二人に一晚滞在するようにと勧める。そして夕食後、祖父は、プライバシーの無い村では話ができないと、近くの学校にマーンを連れて行く。そして、ラシードの祖父は、ラシードが、タズニームを新たな妻として迎えたいと妻に手紙で打ち明け、それを認めるように迫ったと批判し、さらに、それまでラシードの家に忠実だった不可触民のカッチェルーをそそのかし、土地のことで村の役場より上位の徴税局の役人に訴えさせたこと、しかし、それが裏目に出て、カッチェルーは土地から追い出され、ラシードは家から縁を切られたという。祖父は、「曲がらないものは、遅かれ早かれ折れるものだ」と言う。夕方のお祈りに村に帰るラシードの祖父にマーンは、一人で考えたいといい、そこに一人残る。

マーンは、マヌーがラシードを助けるために彼にできることをしていることを知り、何もできていない自分を恥じた。そして、選挙の合間にブランプールに戻ったら、彼を訪ねようと思った。マーンは、前回ラシードに会ったときに困惑したことを思い出した。そして、ラシードの祖父から聞いた成り行きの結果、ラシードはどうなってしまったのかと考えた。

物事の穏やかな表面下には、そのような苦悩と危険が潜んでおり、そして自分がラシードを理解しているとあまりに安易に考えていたことを反省した。そして、あらゆる悪にもかかわらず、世の中は、自分一人の努力と情熱と意思だけでは変えることなどできないのだから、ラシードは、自分の為にも、この世の中をもう少し寛容な視点から見ようとしなければいけないと思うのだった。(ASB, pp.1285-1290)

マーンがサイーダとフィローズの関係を誤解し、フィローズをナイフで刺す

ブランプールに戻ってきたマーンは、久しぶりにサイーダを訪れる。しかし、サイーダは、今日は別の客が来ることになっているので相手はできないという。マーンは、サイーダの言い訳に解せないことが色々あったので、酒を飲んだあと、屋敷の近くで、誰がサイーダに会いにやってくるのか観察する。やがて驚いたことには、サイーダの客としてやって来たのはフィローズであった。二人に裏切られたと思ったマーンは、ものすごい形相でサイーダの部屋に飛び込み、サイーダの首を絞め、やめさせようとするフィローズを誤ってナイフで刺してしまう。

だが、サイーダがフィローズを呼んでいたのは、フィローズとタズニームが恋文を交わす仲になっているのを知り、実は、タズニームが自分の妹ではなく、ナワブがサイーダに産ませた子であり、フィローズの妹だと打ち明ける為であった。

フィローズは、傷を負いながらも一人で霧の中を帰ろうとして倒れ、それを発見した車夫によって病院に運ばれる。他方、マーンは、列車で逃げようとするが、思い直し警察に自首する。

(ASB, pp.1295-1300)

マヘシが恥を忍んで息子への穏便な扱いを警察署長に依頼

こうして選挙戦の最中に、マヘシ・カプールの息子のマーンがナワブの息子のフィローズを刺し、警察に拘束されるという事件が新聞で報道され、大いに世間を騒がせ、マーンは裁判に掛けられることになる。マヘシの妻は、この事件にショックを受け心労のなかで脳卒中を起こし亡くなる。内務大臣のアガワールは、マヘシの政敵ではあるが、娘がマヘシの娘と友人でもあり、娘の頼みを受け、マーンが警察から拘置所に移される際に、母親の火葬に立ち会えるよう手配する。フィローズは生死の境を彷徨い、予断を許さない状況が続く。マヘシは、フィローズが死ぬかもしれず、その場合には、マーンは死刑、もしくは、終身刑が課せられるかも知れないという状況におかれる。マヘシは、妻を失い、そして息子までも失うかも知れないという思いに耐えられず、警察署長に会い、穏便な処分を依頼する。しかし、最新医療の成果である抗生物質が効果を発揮し、フィローズは回復に向かう。そしてマーンは、マヘシの介入の効果もあり、当初予想された最高終身刑に問われる殺人未遂ではなく、最高7年の刑期に問われる傷害罪で起訴されることになる。そして、保釈金を積めば仮釈放が可能となる。

選挙の終盤戦でワリスはフィローズは死んだというデマを流し、マヘシは敗れる

だが、この事件は、マヘシとナワブとの友情を壊し、総選挙にも大きな影響を与える。ナワブは、マヘシ支持からワリスを当選させる方向に転換し、ワリスは事件を利用しマヘシを攻撃する。しかし、国民的な人気を誇るネルーがマヘシの応援にかけつけ熱弁を振るい、劣勢を取り戻す。ワリスと接戦になった選挙の終盤戦、ワリスは、「フィローズが死んだ」というデマのポスターを流し、小差でマヘシは落選する。だが、マヘシは、サリンプールでの選挙結果について異議申し立てせず、人々を驚かせる。

選挙後のマヘシとアブドー・サラームの会話

選挙後数日たったある日の午後、プレム・ニーヴァ屋敷の庭で、マヘシ・カプールはアブドー・サラームと選挙戦とその結果について語り合う。落選によりマヘシは、彼の人生の活力の元であった政治家・議員という職を失い、同時に、誇りと生きがいも失い、深い落胆の気持ちに捉われていた。サラームと、もし、「フィローズが死んだ」というワリスの偽りのポスターが無かったならば、勝っていたかも知れない等と、多くの「もしも」を数え上げるが、親友のナワブが、ワリスの行為に加担していたという噂だけは信じようとしなかった。マヘシは、あれはあくまでワリスが単独でやった行為であり、そうでなければならぬ、と信じたのだ。

しかし、落選という事実は変わらず、マヘシは、最後には目を閉じ、黙ってしまうのだった。

ワリスについて

すると、サラームは、そんなマヘシを挑発し、本来の精力的なマヘシを呼び起こそうとする。そして、ワリスは、面白い現象だと切り出す。「俺は、何が人の道なのかは分かっている。だが、俺はそんなものに従うつもりはない。何が悪いことかも知っている。だが、悪事への抵抗感はない。ドリョウダナがクリシュナに言ったように」と言う。それを聞き、マヘシの表情には怒りの感情がよぎる。「いや、ワリスは、それとは違った類の人間だ。ワリスには善悪の観念と言ったものはない。私は、あの男と実際に闘ったのだ。あの男は、争い事で人を殺し、その後、名乗り出て、『俺が、やっつけてやった』と自慢し、それで通ると考えるタイプの人間だ」と言う。

話は、別の方向にそれるが、やがて又ワリスの話題に戻り、サラームは、今後の政治家としてのワリスに話を向ける。デマのポスターを流し、ムスリムのフィローズがヒンドゥー教徒のマーンに殺されたと宗派の違う人間への偏見を煽った行為により悪人になってしまったと言う。マヘシは、「悪人」という言葉はきつ過ぎると言い、「奴はフィローズが好きただけだ。生まれて以来、あの家に仕えてきたのだから」と弁護する。しかし、サラームは、そのうち、自分の議員としての地位も同じぐらい気に入るようになるだろう、ワリスが、いつ、自分の地位をナワブに対抗して主張するようになるか、興味深々ですと言う。

マヘシは、そうなるとは思えないが、もしそうなったら、どうしようもない。もし、あの男が悪人だとすれば、そうなるだろうと言う。

会議派の行く末

サラームは、挑発に乗ってこないマヘシをさらに挑発し、日頃思っていることを最後にぶつける。

独立から四年しかたっていないのに、会議派はこんなに変わってしまった。自由の為に身を犠牲にして戦った人々は、今や、敵同士だ。そして、政治の世界には新しい人々が参加してきている。例えば、もし私が犯罪者で、政治の世界に簡単に入ることができ、そして、それが儲かることがわかれば、「俺は、殺人や麻薬で金を儲けることもできるが、政治だけは神聖な領域だ」とは言わないだろう。「政治の世界は、体を売る商売と似たようなものだ」と言うだろうと言う。

さらに、選挙には金が益々必要になり、政治家は、ビジネスマンから金を益々要求せざるを得なくなるだろう。そうすると、自分たち自身が腐っているので、行政から腐敗を一掃することもできないし、そうしたいとも思わないだろう。遅かれ早かれ、裁判官や選挙管理委員、官僚のトップも、同じように腐敗した人間によって決められる。すると、インドの政治制度は、持たなくなるだろう。唯一の希望は、会議派が今後の選挙で一掃されることだと言う。(ASB,

pp.1401-1404)

『婿探し』の政治的メッセージと農地改革のその後

セスが『婿探し』において、このように徹底して独立直後の会議派の変質と腐敗を描いているのは、彼自身が、会議派の支配の下で、政治家と官僚の腐敗が頂点に達し、汚職事件で犯罪歴を持つ政治家が増大し、歴史家が「政治の犯罪化」と呼ぶ1980年代のインドの政治を目撃してきたからでもあるだろう。((Guha, 2010, Rulers, No. 12616-12625)) その意味で『婿探し』は、セスが目撃してきたインドの政治腐敗の歴史的原点を明らかにする意味を持っていたとも言えるだろう。

だが、マヘシ・カプールに見られるように、そのような会議派の変質・腐敗に怒りを持ち、独立闘争以来の、世俗的で民主主義国家の理念に忠実な政治家たちも存在していたことがこの物語の救いとなっている。

そして、物語の最終局面では、マヘシが促進したザミンダリー制度廃止法は、最高裁で、その合憲性が未だ争われているものの、合憲判決が暗示されている。

だが、物語においてすでに描かれている通り、現実には法の抜け穴を潜り抜ける地主勢力による小作人への迫害と収奪は続き、1960年代後半から1970年代初めにかけての西ベンガル地方における共産党から除名された毛沢東派による地主へのテロ活動(ナクサライトの反乱)を受け、合法的な農地改革が実際に実施されるには、1970年代を待たねばならなかったのである¹⁵⁾。

マーンの死傷事件の結末

こうして物語の焦点の一つは、マーンの誤解によるフィローズ死傷事件の、その後、に移る。ここでは、大まかにその後の経過をまとめておこう。

マーンは、マヘシが警察署長に働きかけたこともあり、裁判までの間、仮釈放され自宅に戻る。すると、獄中であんなに会いたいと思っていたサイーダに対し、もはやその気持ちが失せているのを知る。恋に溺れたことの結果、自分が引き起こした事件のあまりの深刻さに、その気も失せ、冷静な自分に戻ったのだ。他方、一時、様態が危ぶまれたフィローズも回復に向かうとともに、マーンとの友情を継続させようとする。マーンが自分を刺してしまったのは、誤解に基づくものであり、自分への悪意によるものではないことを分かっていたためである。そしてフィローズは、マーンに会いに来てくれという手紙を書き、それを心の底で願っていたマーンは喜んで屋敷を訪れ、二人の友情を確認する。その後、マーンは2月の29日 法廷に呼び出され、傷害罪で訴えられ、再び収監される。(ASB, pp.1420-1423)

他方、ナワブは、ワリスが選挙戦の最後の局面で、フィローズが死んだというデマのピラを

流した事、そして、それにもかかわらず、マヘシは、選挙の結果に異議を唱えなかった事をムンシから聞き出し、ワリスの行為に激怒し、マヘシが自分のことをどう思っているのだろうと考え、かつ、自分がマヘシの妻の葬儀に行かなかったことを恥じる。さらにナワブは、フィローズとマーンの友情が復活したことを知り、これ以上マーンの罪を問う意味が無いと判断し、フィローズと話し、二人は、マーンを救う手立てを考える。

二週間後の裁判においてフィローズは、自分でマーンが持っていたナイフの上によるけ、刺さってしまったと、それまでの証言を撤回し、裁判長は、自分に悪意をもって重症を負わせた相手を被害者の男がわざわざ弁護することなどありえないと判断し、マーンの無罪が確定する。マヘシは、感謝の気持ちに溢れる。こうして宗派を超えた、友情の絆が復活するのである。(ASB, pp.1429-1433)

そして、プレム・ニーヴァ屋敷では、マヘシが亡き妻への弔いの意味を込め、かねてより妻が望んでいたヒンドゥー教の儀式を行う。

そして、物語は、最後に、ラシードのその後に焦点を移す。

獄中でマーンは、しばしば、ラシードが囚われている苦悩に満ちた狂気と幻覚に思いを寄せた。囚人となり地位も名誉も失い、ラシードの境遇に共感することが初めてできるようになっていたのだ。だが、マーンには愛する家族が存在した。マーンは、兄のブランに頼み、ラシードにお金を送ってもらった。そして釈放後、マーンは、ラシードに手紙を送るが返事はない。下宿も訪ねるが、もはやそこにはいない。大学の歴史学科の事務員によれば、ラシードは、国の為に選挙運動をしないといけない時に講義に出てはいられないと、退学を選んだという。デヴァリアのラシードの祖父やマヌーにも尋ねるが、彼らもラシードの行方を知らない。(ASB, pp.1434-1438)

読者が最後にラシードを見るのは、バーサート・マハル (Barsaat Mahal) 宮殿の胸壁を、深夜、彷徨う姿である。バーサート・マハルは、アグラのタージ・マハルをモデルとした虚構のモグル帝国時代のイスラム教の宮殿であり、恋に破れた若者の自殺の名所としても知られていると、物語の初めの方 (ASB, p.35) で描かれていた。

セスは、深夜、宮殿の胸壁をふらふらと歩くラシードの最後の姿を次のように描いている。

ラシードは、バーサート・マハルの胸壁を歩いている。

彼の心は、飢えと混乱の為に虚ろである。

暗闇と河と、そして大理石の冷え冷えとした胸壁。

どことも言えない所に自分はいる。

心が痛んだ。連中は俺を取り囲んでいる。サガールの長老たちだ。

父も無く、母も無く、子供も妻もない。

河の上に宝石の如く輝く胸壁、その下を河が流れる庭園。

悪魔も、神も、アイビスも、ガブリエルも存在しない。

ガンジスは、永遠に流れる。

天空の星、そしてその下では：

神の声に捕らえられたものも居れば

我らが台地に飲み込まれた者も居る。

溺死させられたものも居る。

神が人間を不当に扱ったのではなく、

人間が自ら間違いを犯したのである。

お祈りではなく心の安らぎを。祈りはもう結構だ。

祈りより眠りたい。

我が被造物よ。汝らは、その命をあまりに早く捧げすぎたのだ。

私は、お前の天国への入園を法により禁じた。

天国の春。

アー、神よ、アー、神よ。(ASB, p.1438)

こうして、この世のあらゆる絆を失い、疲れ果て、神からも見捨てられたと感じたラシードは、城壁から身を投げるのである。

そして、ラタのハレーシュとの結婚式と二人が列車で新婚旅行に旅立つ場面でこの長大な小説は幕を閉じる。

注

- 1) "A Suitable Joy," *Guardian*, Saturday 27 March 1999 02.46 GMT <https://www.theguardian.com/books/1999/mar/27/books.guardianreview1>
- 2) "Vikram Seth's Big Book," by Richard B. Woodward, *New York Times*, May 2, 1993 <http://www.nytimes.com/1993/05/02/magazine/vikram-seth-s-big-book.html?pagewanted=all>
- 3) (Ibid.)
- 4) <https://www.theguardian.com/books/1999/mar/27/books.guardianreview1>
- 5) 『ラマーヤナ』の原作の第7巻(後の巻) Wikipedia [https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%8A#](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%8A#%E3%83%A4%E3%83%8A#) 第7巻_ウッタラ・カーンダ(後の巻)
- 6) アムベドカー博士は、1956年に仏教徒に改宗している。Wikipedia, https://en.wikipedia.org/wiki/B._R._Ambedkar
- 7) "No entry for Modi into US: visa denied", *THE TIMES OF INDIA*, Mar 18, 2005, <http://timesofindia.indiatimes.com/india/No-entry-for-Modi-into-US-visa-denied/articleshow/1055543>.

cms

- 8) "Firebrand Hindu Cleric Ascends India's Political Ladder" By ELLEN BARRY and SUHASINI RAJJULY 12, 2017, NY Times
- 9) https://en.wikipedia.org/wiki/Permanent_Settlement
- 10) 1947年の独立時のインド全体の識字率はわずか12.2%であったと言う。 https://en.wikipedia.org/wiki/Literacy_in_India
- 11) ガザニの Mahmud https://en.wikipedia.org/wiki/Mahmud_of_Ghazni
- 12) <http://www.preservearticles.com/2011100514628/what-is-the-role-and-functions-of-sub-divisional-officer-india.html>
- 13) Article 31 of the Constitution not only guarantees the right of private ownership but also the right to enjoy and dispose of property free from restrictions other than reasonable restriction. The article states that no person shall be deprived of his/her property, except by authority of law. It is also mentioned that compensation would be paid to a person whose property has been taken for public purposes. <http://www.elections.in/political-corner/article-31-of-the-constitution-of-india/>
- 14) グーハによれば、21歳以上の1億7千6百万人の成人男女を選挙人として登録する必要があり、その内、85%が読み書きできなかったために、党名を読めない人々の為にそれぞれの党を示す象徴的な絵を考案したり、1週間は消えないインクで指を使い投票を可能にしたりしなければいけなかったと言う。また、北インドの子供をもつ女性は、自分の名前で選挙登録することを嫌い、誰々の母親、もしくは、誰々の妻として登録したがったと言う。それを聞いて選挙管理委員長のスクマー・センは、それを過去の忌まわしき伝統として認めず、結局、2百80万人が投票できなかったという。(Guha, 2007, 7, iii)
- 15) Cf. 『Neel Mukherjee の *The Lives of Others* 論 — インドの独立後の農地改革の挫折とナクサライト運動 —』加藤恒彦 立命館国際研究 29-2, October 2016

引用文献

- Chandra, Bipan. Mukherjee, Mridula. Mukherjee, Aditya. *India Since Independence*, (New Delhi), the Penguin Group, 2000. 2008年には改訂版がでている。本書には改訂版のDK Digital Media, India 電子版(2011年)を参照した。
- Guha, Ramachandra. *India after Gandhi: The History of the World's Largest Democracy*. (London), Macmillan, 2007. 本書にはPan Booksの電子版(2010年)を参照した。
- メトカーフ、バーバラ等、『インドの歴史』、河野肇訳 創土社 2006年
- Pozza, Barbara, "A Suitable Boy: The Abolition of Feudalism in India," *Erasmus Law Review* [Volume 01 Issue 03], 2008, file:///C:/Users/owner/Desktop/08_ASuitbaleBoy.pdf
- Seth, Vikram, *A Suitable Boy*, London, Weidenfeld & Nicolson, 1993.
- 尚、本論分では2013年のPhoenix ebook版を使用。
- Woodward, Richard, B., "Vikram Seth's Big Book," *New York Times*, May 2, 1993.

(加藤 恒彦、立命館大学国際関係学部教授)

Summary of “A Study of *A Suitable Boy*: the Troubled Inauguration of Independent India as the World’s Largest Democracy”

Vikram Seth’s novel, *A Suitable Boy* (1993) turned out to be far more than the story about an arranged marriage that its title suggests, and is in fact an epic novel, depicting in detail greater stories about how the independent India was inaugurated as the world’s largest democracy with all its inadequacies, in stark contrast with China, where a socialist country was established through armed revolt led by Maoist Communists against big landlords, which resulted in exclusive rule by the Chinese Communist Party.

The greatest significance of Seth’s novel, this paper asserts, lies in the way Seth describes in realistic detail how newly Independent India embarked on its journey of nation building through democratic procedures, without overlooking the darker side of specifically Indian realities in the rural villages where a feudalistic way of life based on Zamindari and the caste system is still dominant.

Based upon this assertion, this paper mainly focuses upon the following aspects of this novel:

Firstly, how the Zamindari Abolition Act was proposed by Mahesh Kapoor, the Finance Minister of the ruling INC government in Paruva state and was freely discussed in the state assembly by various political parties, including the one which represented the interests of the Zamindars and strongly opposed the Act. After heated discussions, the Act with its amended clauses was passed, but the Zamindars appealed to a higher court, raising doubts about the constitutionality of the law.

Secondly, Seth describes the counter-moves in the rural villages by local land-owners to maintain the status quo by making use of the legal loopholes of the Act, thus to attempt to deprive the peasants of their tenancy rights newly conferred upon them by the Act, symbolizing the gap between big cities & remote villages in India where the great majority of the Indian people live.

Seth highlights this conflict between the old and the new way of life in the countryside by depicting the tragic death of Rasheed, a son of a Zamindar, who turned Socialist in the Brahmipur University. When Rasheed comes back to his home in the village, he tries to protect the newly conferred tenancy right of a charmar of his family behind the back of his family. However, his well-intentioned attempt backfires and he is not only accused by his family but also the charmar is driven out of his land. As a result of his total isolation in his own family and loss of financial support from it, he finally kills himself at the end of the story.

Thirdly, Seth scrupulously describes how the legal debates in the Brahmipur Higher court were conducted concerning the constitutionality of Zamindari Abolition Act, which, different from the debate in the State Assembly on the social and historical significance of the Zamindari system, focuses solely on whether the Act is in harmony with the Indian Constitution: if the Act is constitutional in terms of the 'social purpose of the law' clause, or 'equal protection under the law' clause, to what extent the various similar cases in the US is relevant to the present case because US Constitution, in contrast with the Common Law of the UK, was a written Constitution, etc. The significance of this part is to show the extent to which Independent India had legal experts to sustain the legal system.

Fourthly, Seth depicts how the Indian National Congress Party, which, led by Gandhi and Nehru, had fought for the independence of India at the sacrifice of self-interests, started to lose its original integrity and began to change into a party of corruption and nepotism once it became in possession of the central and local State power and politics became a profitable business. This led to a power struggle within the INC between Nehru and his supporters who would be true to the ideals of the party during the independence struggle and those conservatives who were against the policies of Prime Minister Nehru, but could not do without him because of his overwhelming popularity among the people in view of the upcoming first general election. Seth describes how, in spite of Nehru's desperate efforts to reorganize the Working Committee members along the line of his policies, conservatives in INC succeeded in retaining Nehru as the head of INC and eliminating his supporters from the party.

Lastly, but not least, Seth describes how the historic General Election was held and fought, focusing on a local electoral district in Paruva state, where Mahesh Kapoor, a supporter of Nehru's policies, had to run for state assembly due to his minority status in the now changed INC party and ended up suffering defeat due to fake propaganda by an opponent who had no conscience.

So, although Independent India started out as the world's largest democracy, it was not without over-shadowing clouds which later in the 80s revealed it as a hotbed for criminalization of Indian politics.

(KATO, Tsunehiko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)